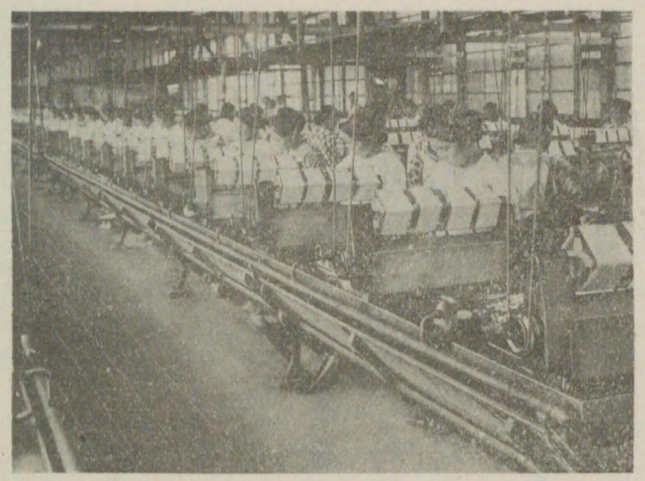
この他水産養殖も行はれ鰻の如きは年額四十七萬圓を超えてゐる。



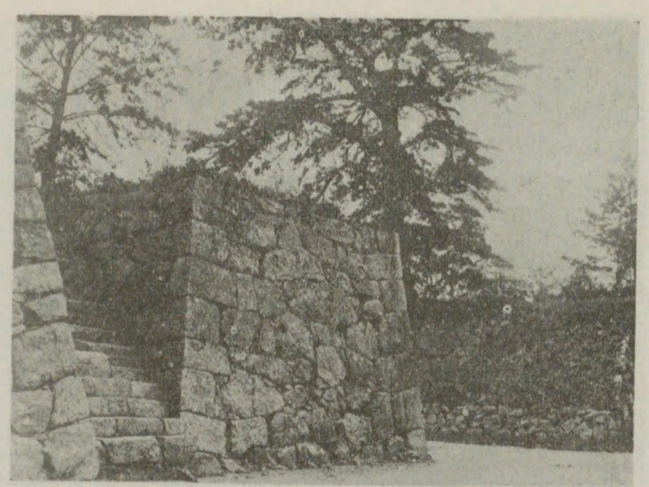
玉糸工場に於ける作業狀況

此の地は始め今橋と稱したが、大永年中吉田と改稱し、江戸時代には東海道五十三次の一、吉田宿として殷賑を極め、明治二年今の名に改められた。

吉田城阯

（關屋町）

城阯は市の北方豊川に臨む要害の地にある。此の城は永正二年牧野古白の創築であるが、翌三年田原城主戸田憲光に奪はれ、其の後數次の爭奪あつて後、天文十五年今川義元の領有する處となつた。然るに永祿七年桶狹間の役後は德川家康の手に



吉田城阯

移り、酒井忠次之を守つたが、天正十八年家康の關東移封と共に、池田輝政岐阜より移されて十五萬七千石を領した。慶長五年輝政播州姫路に轉封の後は松平、水野等の數氏を經、寛延二年松平伊豆守信復が濱松から移つて七萬石を領し、世襲して維新に至つた。尋いで明治四年廢藩の際、樓櫓や外郭は取除かれたが、郭内は陸軍省用地となり今歩兵第十八聯隊が屯してゐる。

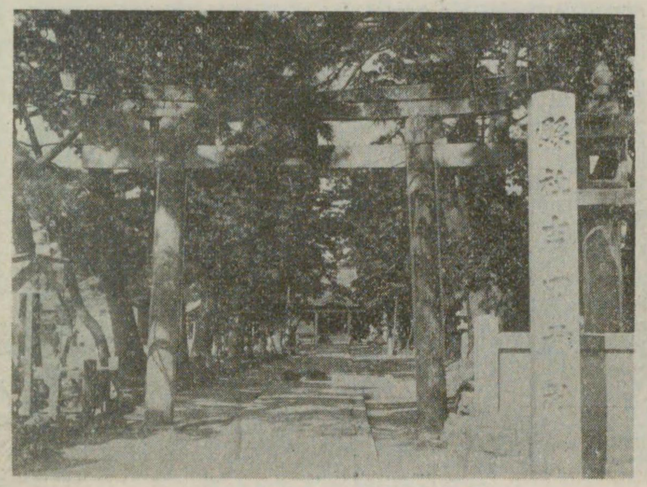
縣社 吉田神社

（關屋町）

祭神は素盞嗚命で、もと天王社と稱した。天治元年の創立と謂はれ、牧野古白築城に方つて他の神社佛閣みな移轉を命ぜ

られたが、當社は城の鎭護として其のまゝ現位置に留り世々武將の厚き崇敬を受けたものである。

社寶には天文以來の棟札、古文書等を襲藏してゐる。七月十五日に行はれる例祭は吉田の祇園祭と稱して頗る古雅である。舊時は社領三十石を有してゐた。



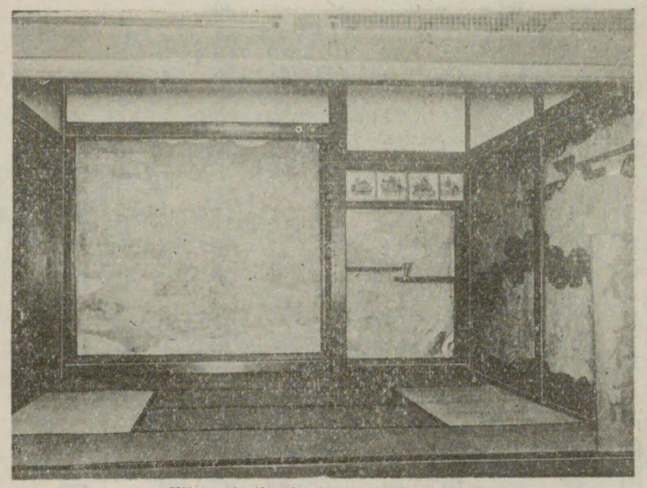
吉田神社

縣社神明社

（中八町）

もと宮下町にあつたのを明治十七年二月今の所に遷座されたものであるが、牧野古白築城以前の鎭座と謂はれるこの地の最古の社である。毎年二月十五日に執行される例祭は、天狗の面を被り或は烏帽子小具足着けた武者姿のものが赤鬼に扮せる者を追ひ拂ふので、俗に鬼祭と稱し風俗の奇古な祭として知られてゐる。

維新前には朱印三十石を有し、明應以來の棟札を數多所藏してゐる。



悟眞寺大書院内御座の間

悟眞寺

（關屋町）

淨土宗に屬し、貞和五年善良上人が足利義詮に請ふて建立したものであるが、永正二年吉田城築造の際、寺域が城地となつて現地に移された。

大書院は御隱御殿と稱し、長篠の役に德川家康が此の部屋に隱れたと謂ふ、明治十一年十月明治天皇北陸東海御巡幸の

際御駐泊あらせられた聖蹟で今史蹟に指定されてゐる。

高師原

むかしは高師山と稱し、南は太平洋岸から東は遠州濱名湖畔に及ぶ廣大な勝地であつたが、その後ち年と共に開拓せられて今は草山と小松原に名殘を留めて高師原と呼ばれてゐる。東海道本線は隆起する此の丘陵を横斷し、車窓の眺めに一段の趣を添へてゐる。

一帶の地層は洪積層で帶赤黃褐色の土壤から成り、土中に高師小僧と稱する褐鐵鑛を豐富に產する、之は樹根の周圍に酸化鐵が沈澱して生じたもので、外觀小僧の形をなすところから此の名を得たのである。

大正悠記地方風俗舞歌

松風のこゑいやたかし高師山
わけても今日は千世よはふらむ

主なる官公署、學校、銀行、工場、會社一覽

（官公署）

豐橋市役所	西八町	豐橋警察署	中八町
豐橋聯隊區司令部	東八町	豐橋財務出張所	西八町
步兵第十八聯隊	西中兩八町裏	豐橋健康保險出張所	花田町
工兵第三聯隊	同	愛知縣蠶業取締所豐橋支所	同
豐橋陸軍教導學校	畑町	同 繭檢定所	同
農林省水產試驗場豐橋分場	神野新田	愛知縣製絲試驗場	前田南町
豐橋稅務署	東八町	豐橋林產物檢查出張所	西八町
豐橋商工會議所	花田町	豐橋土木工區事務所	同

（學校）

愛知縣豐橋中學校	中柴町	豐橋市立高等女學校	旭町
同 第二中學校	牛川町	同 商業學校	東田町

（銀行）

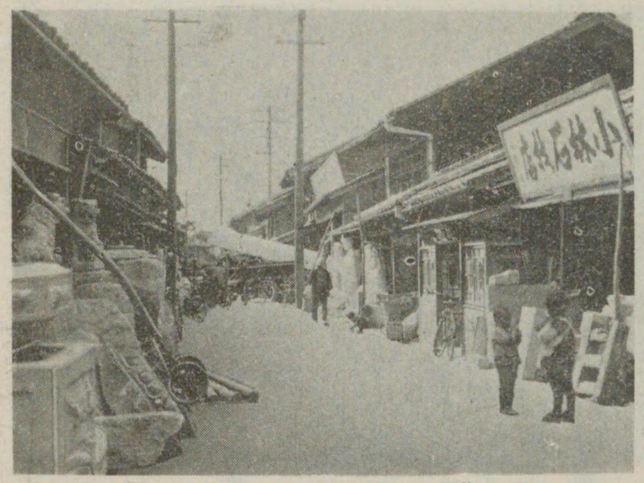
株式會社三河銀行	小柴通	株式會社三州貯蓄銀行	花園町

豐橋市

（工場・會社）

鳳來寺鐵道株式會社	花田町	大津屋株式會社 花田町
株式會社豐橋米穀取引所	同	株式會社川清商店 同
豐橋瓦斯株式會社	同	田口鐵道株式會社 同
豐橋電氣株式會社	同	津具金山株式會社 同
豐橋委託運輸株式會社	同	マルケイ東海倉庫株式會社 同
豐橋電氣軌道株式會社	東田町	福谷殖產株式會社 萱町
株式會社豐橋魚市場	魚町	渥美電鐵株式會社 花田町
東三運輸倉庫株式會社	同	三州絹紡株式會社 本町
東陽倉庫株式會社豐橋支店	花田町	蠶糸周旋株式會社 花田町
豐川電氣株式會社	同	昭和自動車株式會社 本町
豐川鐵道株式會社	同	株式會社鈴木商店 松葉町
朝鮮蠶糸株式會社	東新町	

岡崎市



花崗町

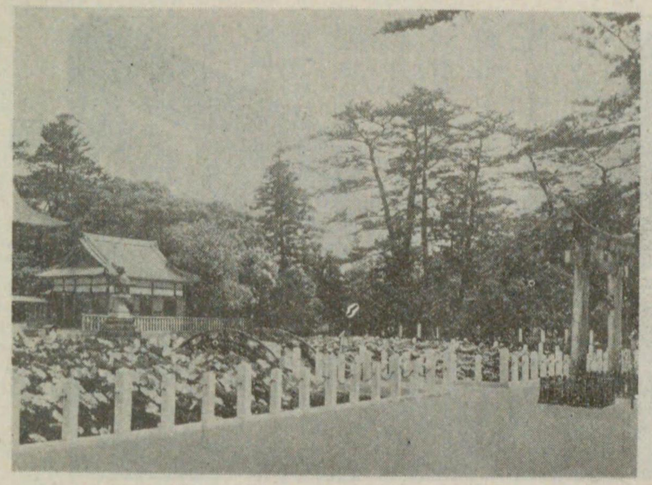
東海道線　岡崎驛
名古屋線　東岡崎驛・岡崎公園驛
三河線
省營バス

四十七方粁の市域と七萬七千の人口を有する歴史上回顧深い都會であると共に、近年は工業都市として躍如たるものがある。

產業に於ては纖維工業最も盛で內綿織物の一千百萬餘圓、蠶糸の五百餘萬圓、人絹糸の五百餘萬圓、紡績の二百萬圓等特に著しきものである。この他特產物八丁味噌は特異の佳味を有ち販路は全國に及び、煙火の製造も盛でその生產額は縣內の四割を占む。また堅牢と優美を誇る所謂三州釜は逐

年需要增加し、その年產額は四十六萬圓を超えてゐる。

附近からは俗に岡崎石と稱する良質の花崗岩を產出し、石碑、石燈籠等の製作亦盛である。



伊賀八幡宮

縣社　伊賀八幡宮

（伊賀町）

文明年中岩津城主松平信光が安祥城を陷れ之に移つて後ち、岩津と岡崎の中間、伊賀河畔の地に氏神として八幡宮を齋き祀り伊賀八幡宮と號した。代々岡崎城主の尊崇厚く舊時は社領四百五十石を有し城下第一と稱せられた大社である。

境內は老樹多くその間に並び建つ本殿、拜殿、幣殿、隨身門は五彩を施して輪煥の美を盡し、石鳥居、神橋と共に何れも國寶に指定されてゐる。

縣社　六所神社

（明大寺町）

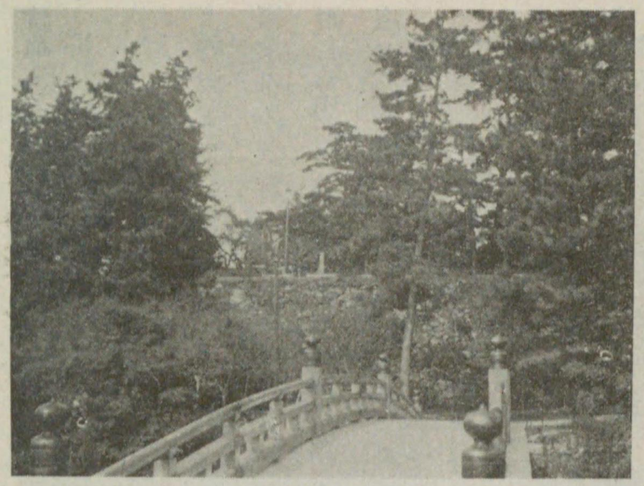
齊明天皇の勅願により六所大神を勸請し、神領の御寄進があつたと傳へる。爾來世々武將の崇敬厚く、殊に松平廣忠は當社を產生神として尊崇し神領を寄附した。本殿、幣殿、拜殿、社務所、樓門等佳麗を極める建物は寬永年中德川家光の造營にかゝるもので、今國寶に指定されてゐる。

岡崎城阯

（岡崎公園）

城阯は矢作川と菅生川が西南二方を取圍んだ丘陵の上に在る。大正八年舊城主本多氏より寄附をうけて、今市有の公園となつてゐる。本丸の跡には德川家康と本多忠勝を合祀する縣社龍城神社が鎭座し、二之丸及び三之丸阯には岡崎

圖書館其他の建物があり、蒼古の石垣、城濠、老樹など何れも往昔を偲ぶに足るものがある。また近年數百本の櫻樹が植えられ花候に一段の異彩を添へる。



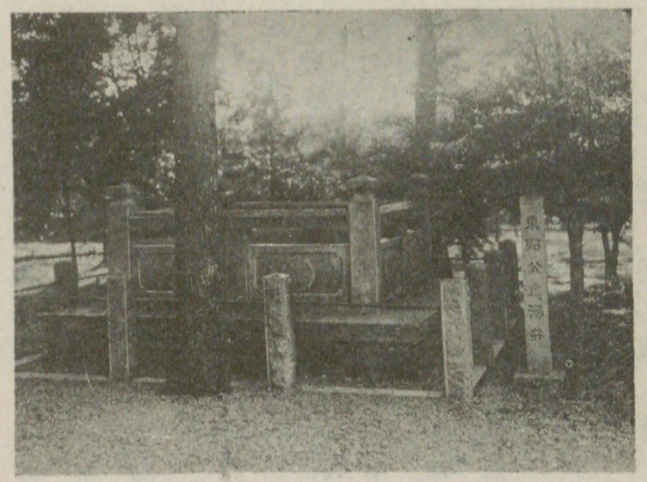
岡崎城址

この城は康正元年西郷稠賴の築いたもので、其の後大永四年安祥城主松平清康移つて居城した。清康の子が廣忠で其の子が家康である。

家康は天文十一年十二月二十六日此の城で産れ、此處を根據として、遂に德川幕府三百年の基礎を確立するに至つたので、德川氏にとつて最も意義の深い城趾である。

天正十八年關東移封の後ちは田中吉政入城し、慶長五年關ヶ原役後本多氏之に代り、正保二年には水野氏が吉田城から移つて居ること數代に及んで城の造營が全く完成した。

寶曆年間に至り下總古河の松平氏移つて居城したが、明和六年石州濱田の城主本多忠肅と交替し、忠肅の後子孫相傳へ代々五萬五百石を領して維新に至り廢城と共に建物は取り壞されたが、遺蹟の大部分は破壞を免れ今尚礎石が殘されてゐる。



家康產湯の井戸

菅生の川祭

（康生町）

菅生神社の川祭は毎年七月十九日の夜に行はれる。當夜は菅生の清流に數艘の鉾船を浮べ、三層の樓を築いて數百の提灯を點じ樓上に管絃を弄しつゝ流れを上下

し、之に相呼應して壯者は船上より本場三河の粹を集めた各種の煙火を間斷なく打ち揚げ頗る美觀である。殊に金魚と稱する特種の煙火は恰も金魚の群るが如く鱗影閃々と流れを溯つて奇觀を呈し、數萬の群衆は兩岸に、或は急造の棧敷に置酒して之を觀覽するを例とする。

小豆坂古戰場（美合町和合）

戰國時代に屢々合戰の行はれた處で、いま小豆坂古戰場の碑石が建てられてゐる。最初の會戰は天文十一年八月十日今川義元が織田信秀に破れた戰ひで、信秀の將士が拔群の勇武を顯はし小豆坂七本槍と稱揚された。續いて此の復讎戰とも見るべき戰が同十七年三月十日に行はれ、義元は見事に信秀を擊破した。

一帶の丘陵地は松樹繁茂し、血草野など稱する地もあつてそぞろに往時の激戰を偲ばしめる。

愛知縣種畜（美合町）

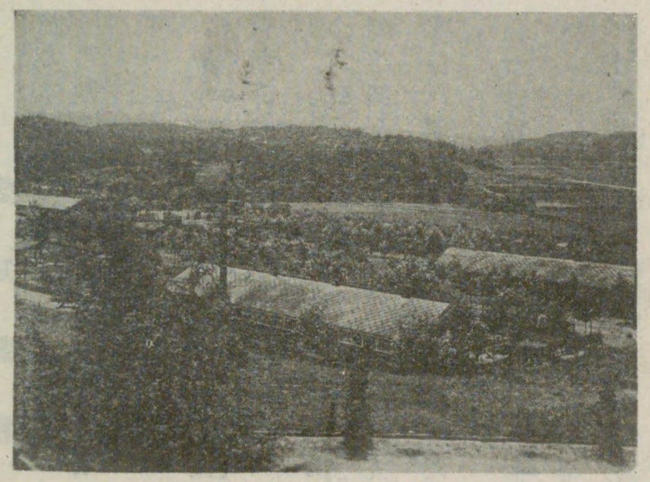
元農商務省愛知種馬所の用地並に建物を讓り受け之に諸般の設備を加へて大正十二年十月開場したもので、現在五十六町五反二畝歩の敷地を有する。

初めは專ら牛馬豚に關する施設を行ふに過ぎなかつたが、昭和二年に至つて產卵能力檢定事業を開始した。尋いで同五年特別會計となし、爾來獨立豫算を以て農業部、教育部（以上二部は昭和九年分離す）育牛部、養豚部、養鷄部、緬羊部を設けて各種の試驗研究を行ひ、その農場の經營と相俟つて今や有畜農業の合理的模範種畜場となつた。

愛知縣追進農場（美合町）

本農場は農林省の農村振興方策に順應して農村の中堅となるべき青年を養成せんと、愛知縣種畜場の教育部及び農業部を分離して昭和九年八月開場したも

のである。場内の建物二十二棟と十四町歩の農場を使用し、各種農作物の栽培調製、加工販賣、家畜家禽の飼養管理、畜産加工等の實習を行はしめて有畜農業の經營に必要な技能を體得せしめてゐる。



農林省岡崎種鷄場

農林省岡崎種鷄場

（伊賀町）

昭和三年四月の創立で、敷地十五町四反歩、建物四十六棟を有する。事業は鷄の改良蕃殖並に飼養管理、孵卵及び育雛、種雛及び種卵の配付、鷄の產卵能力檢定、飼料作物の栽培、養鷄の指導奬勵、養鷄技術の傳習等多岐に亘り、その管轄區域は本縣外二府九縣に及んでゐる。

ガラ紡

明治初年僧臥雲の創始にかゝり、矢作川の支流に沿ふて發達した特殊紡績である。之は水力運轉の彈綿機により襤褸綿、糸屑、綿布等の裁屑を水に曝して製造せる彈綿を和紡機にかけて紡綿するもので、その總生產額は四百五十萬圓に達するが、内三百八十萬圓は本市に於て生產し、他は幡豆、碧海、額田、寶飯、東加茂の六郡に亘つて生產される。種類は絹糸、紬糸、綿糸の太糸で、主として綿毛布、足袋底、帶芯等の原料に使用せられ、販路は全國に及んでゐる。

主なる官公署、學校、銀行、工場、會社一覽

（官公署）

岡崎市役所　籠田町
農林省岡崎種鷄場　伊賀町
岡崎少年刑務所　康生町
岡崎市
岡崎商工會議所　連尺町
岡崎税務署　康生町
岡崎警察署　同

岡崎財務出張所	康生町	岡崎森林事務所	康生町
愛知縣種畜場	美合町	岡崎林產物檢査出張所	同
同 追進農場	同	古部用水改良事務所	柱町
愛知縣蠶業取締所岡崎支所	明大寺町	岡崎土木工區事務所	康生町

（學校）

愛知縣岡崎師範學校	六供町	岡崎市立高等女學校	六供町
同 岡崎中學校	明大寺町	同 商業學校	明大寺町

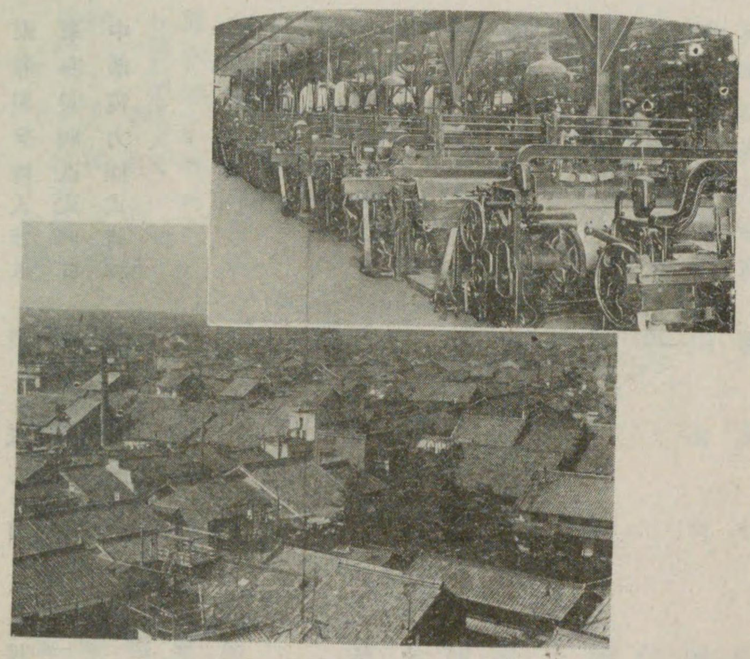
（銀行）

株式會社岡崎銀行	傳馬町	株式會社岡崎貯蓄銀行	連尺町
同 額田銀行	康生町		

（工場・會社）

伊勢屋株式會社	兩町	株式會社岡崎米穀取引所	康生町
服部鑄造株式會社	羽根町	岡崎繭糸株式會社	井田町
日清紡績株式會社岡崎工場	針崎町	岡崎證券株式會社	籠田町
同 戸崎工場	戸崎町	岡崎織布株式會社	元能見町
日清レーヨン株式會社美合工場	美合町	妻木電氣株式會社	籠田町

東海製藥株式會社	羽根町	株式會社三龍社	上六名町
東海製綱株式會社	連尺町	三河製糸株式會社	新川町
中部電力株式會社	籠田町		

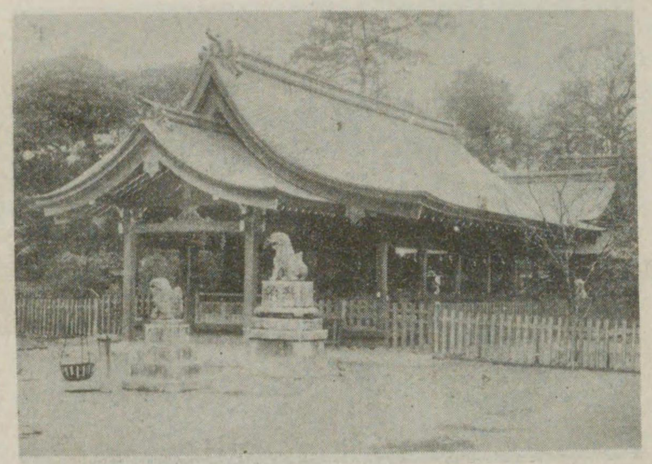


一宮市街と毛織物工場の一部

一宮市

東海道線　尾張一宮驛
名古屋線（東一宮驛・西一宮驛
　　（新一宮驛

八方籾の市域と五萬三千の人口を有する尾北第一の都會で、尾州織物の主産地として普く世に知られてゐる。近年交通、通信機關の整備すると共に商工業は倍々盛となり、會社數二百七十九、工場數二百九十八の多きを算ふるに至つた。隨つて産業は工業を第一としその生産額は三千三百萬圓に上る。而してその首位にある織物は一千五百五十萬圓を占めてゐるが、殊に毛織物は近年縣營檢査の實施以來其の品質頗る向上し輸入品と殆んど遜色なき發達を示した。



眞清田神社

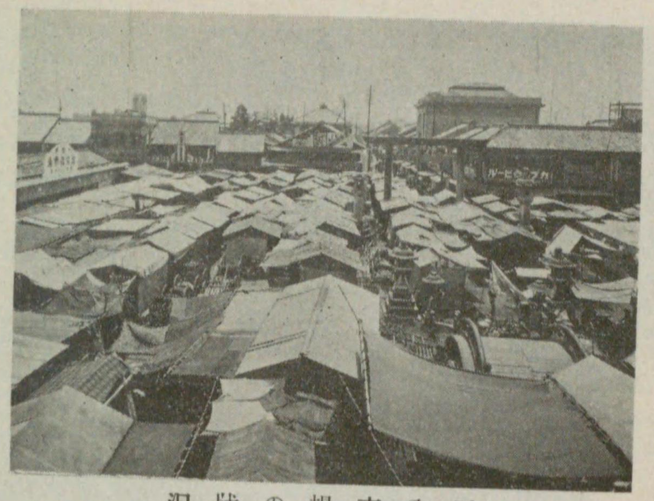
國幣中社　眞清田神社

（一宮市）

尾張一ノ宮で、祭神は尾張國造の祖火明命である。市の中央に在つて、兆域一萬四千五百餘坪を有し、宏莊なる殿宇並び建つて深嚴を極め、熱田神宮に亞ぐ大社である。享德四年兵火に罹つたが長祿元年再建せられ、永正、寛永兩度の修繕を經、最近に至つて大改築が行はれた。入母屋造

の樓門と切妻造の西門は應永年間の建築と謂はれてゐる。神寶の主なるものは國寶の舞樂面十二個を始め、神鏡、刀劍、古鈴、高麗犬、美事な境内の古繪圖等である。

例祭は四月二十二日であるが、陰暦三月三日に行はれる桃花祭は頗る大掛りなもので、神輿の渡御には數百の飾馬や警固の騎士が供奉して盛觀を極める。



三八市場の狀況

三八市

毎月三、八の日に開かれる市で、その起源は享保十二年の昔にある。當時に於ける市場區域は中町、傳馬町に限られ、商品の如きも生糸、綿絲、米穀、青物類の集散に過ぎなかつたが、年と共に繁榮して地域も擴まり、現在では眞清田神社の門前を中心に全市に及び、殊に門前、中町は肩摩轂擊の雜踏で商賈の聲は喧噪を極め、比類なき偉觀を呈する。營業種目は織物、糸類の卸賣大量取引を始め染料、太物、古道具、家具、魚鳥、家禽等百餘種に達し、市場に來往する者、近郊は云ふに及ばず遠く阪神地方、靜岡方面より蝟集し、その取引高は七千萬圓を超えてゐる。

主なる官公署、學校、銀行、工場、會社一覽

(官公署)

一宮市役所人形町	一宮財務出張所市役所内
一宮税務署大字一宮	愛知縣蠶業取締所一宮支所神山町
一宮商工會議所南石野	一宮土木工區事務所新町
一宮警察署大字一宮	

（學校）

愛知縣一宮中學校　北園通り……一宮高等女學校　宮西通り

（工場・會社）

長谷川毛紡株式會社　川田町……大日本紡績株式會社一宮工場　天道町

東邦瓦斯株式會社一宮營業所　上本町通……艶金興業株式會社一宮工場　寺屋敷

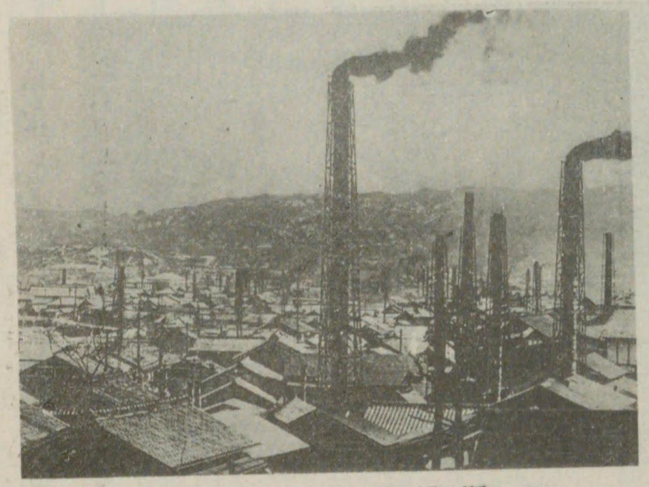
東陽倉庫株式會社一宮支店　明治通……株式會社山一商店本町通

東洋紡績株式會社一宮工場　天王前……丸吉絹糸株式會社　傳馬町通

片倉製糸株式會社一宮製糸所　松降通……株式會社森林商店本町通

株式會社丹菊染色整理工場　本町通……森菊毛織株式會社　野黒

瀬戸市



瀬戸市街を望む

瀬戸線　尾張瀬戸驛
省營バス

陶磁器が今日セトモノの名によつて代表される如く、瀬戸市の發展は全く窯業にかかつてゐる。現在市域二十四方粁、人口四萬八千を有し、煤煙は常に空を掩ふて自ら他都市と異る雰圍氣が漂ふてゐる。又家屋は築窯の關係上從來多く山腹に建てられてゐたが、近時石炭窯の隆興と共に漸時平坦部に進出して街衢を成すに至つた。

明治四十三年縣下に陸軍特別演習の行はれた際、東宮に在らせられた大正天皇には演習御見學の御途次、陶器學校へ行啓、親

しく陶技を台覽遊される所があつた。

陶磁器製造狀況

次いで織田信長は永祿六年自ら此の地を視察して大いに陶業に保護を加へ、

陶業

窯業の起源は遠く奈良朝の世に遡ると謂はれてゐるが、瀬戸燒を現今の如く盛大ならしめたのは、鎌倉時代に宋の陶法を究めて歸朝せる加藤春慶が此の地に窯を造つたのに端を發してゐる。

春慶の作は後世古瀬戸と稱して珍重せられ、その手法は爾後數代の間踏襲されて來たが、文明年間志野宗信による所謂志野燒の獨創があつた。

名工六人を選んで窯印を與へた。後世之を瀬戸の六作と稱してゐる。また天正十三年には古田織部正が自己創案の意匠を工人に授けて茶器の製作をなさしめた。所謂織部燒である。かくの如く瀬戸の窯業は絶大の保護と熱心なる茶匠の指導によつて一大躍進を見たが、慶長年間關ヶ原合戰の影響で不況に陷り居を他國に轉ずる者漸次多きを加へた。こゝに於て藩主義直は美濃に逃散せる陶工を此の地に召喚して居宅、窯場を與へ、之に補助金交付、課役免除の特典をも加へ、又御燒物御用を指定するなど專らその保護奬勵につとめたので、祖業は再び隆盛に赴きその名聲は遽かに昂められた。その後文化四年に至り加藤民吉が染付燒の磁器製法を創めたので、爾來陶業より磁業に轉ずるもの多く、また藩主は瀬戸燒を藩の專賣品と定め、御藏元と稱する指定商人に製品の廻送を委ねて斯業の啓發につとめた。然るに明治維新以後は藩の保護を離れて自營自立となり、之が却つて活動の自由を得て爾後一段の盛況を加へると共に交通、運輸通信の發達に乘じて販路は益々擴張せられ、セトモノの名は廣く海外に及び、

今や生産額は一千二百萬圓に垂んとしてゐる。

焚き休むかまとの上や春の月　卓池

藤四郎作陶製狗犬（深川神社所藏）

郷社　深川神社

祭神は天忍穗耳命外七神でもと八王子社と稱した。延喜式神明帳所載の山田郡深川神社は當社であるとされてゐる。

陶祖藤四郎は深く本社を崇敬し靈驗によつて良質の陶土祖母懐を得たと謂はれ、今國寶に指定されてゐる神寶の陶製狛犬一個はその製作寄進にかかると傳へられる。尚寶物には永享十年當社へ寄進の在銘梵鐘がある。

境内社に陶祖を祀る陶彦社がある。

加藤春慶の碑と民吉の墓

加藤春慶の碑

春慶の碑は字郷にある。慶應三年その遺德を顯彰せんと明倫堂督學阿部伯孝の撰文を彫して墓前に建設せるもので、高さは約一丈、六角陶製の極めて珍らしいものである。

また文化年中この地に磁器を創成せる加藤民吉の墓は字前側の鷹場山麓に現存してゐる。

印所の粘土採掘

印所に於ける粘土採掘作業狀況

製陶の原料である粘土は往昔から市の附近各所に產出するが、就中此の地に採掘されるものは木節、蛙目と稱する全國にも珍らしい優良な粘土である。

此の採掘所は從來瀬戸陶磁器工業組合に埋藏の儘拂ひ下げて採掘せしめてゐたが、縣有產物の保護管理上種々支障を生じたので、大正十五年より縣直營をもつて統制ある採掘を行ひ、その粘土は組合の手を經て一般需用者に配給し、製陶業の圓滑なる發達を圖つてゐる。

砂防事業

市の中央を東西に貫通する瀬戸川の水源地に於ける山林は、陶土の濫掘樹木の濫伐に依つて逐年荒廢し、而かも風雨の侵蝕するにまかせられてゐたゝめ降雨毎に多量の砂礫流出して漸く水害を頻發するに至つた。明治十一年本縣は之れが對策を講じ、國營に依る砂防事業を申請して一部の工事に着手したが、事業は數年後に休止せられた。その後は本縣に於て僅に之れを維持する有樣であつたが、同三十三年根本的計畫を樹立し、爾來巨額の縣費を投じて着々工事の完成につとめたので、近年は松樹著しく繁茂して美林となつた。

萩御殿と稱する地域は東宮にあらせられた大正天皇が明治四十三年の秋、工事台覽遊ばされた場所で、今記念碑が建てられてゐる。

主なる官公署、學校、銀行、工場、會社一覽

（官　公　署）

瀨戸市役所
商工省陶磁器試驗所瀨戸試驗場　……瀨戸警察署
瀨戸少年院

（學　校）

愛知縣窯業學校　……愛知縣瀨戸高等女學校（市外水野）

（會　社・工　場）

瀨戸運送株式會社　……瀨戸權現土地株式會社

愛知郡

鳴海絞作業狀況

鳴海町

名古屋線　鳴海驛

人口一萬二千を有し、名産鳴海絞の特産地として知られてゐる。この絞染は慶長十五年名古屋城造營の時細川家の醫師三浦玄忠が此の地に留まつて製法を傳へたといはれ、最近砦平に開祖三浦之碑が建てられた。斯業は今に盛で木綿絞、シルケツト絞、リンネツト絞、上麻絞等の種類があり、年産額は百五十萬圓に達してゐる。

此の地は舊幕時代東海道五十三次の一驛として繁榮したものであるが、往古は北方古鳴海が交通の衝に當つたといはれる。附近に東海一を誇る鳴海球場があり、その近くの字雷には貝塚がある。

夫木集　景綱

なるみ潟汐干に浦やなりぬらん
上野の道をゆく人もなし

鳴海かた潮のみちひの度毎に
道ふみかふる浦の旅人　讀人不知

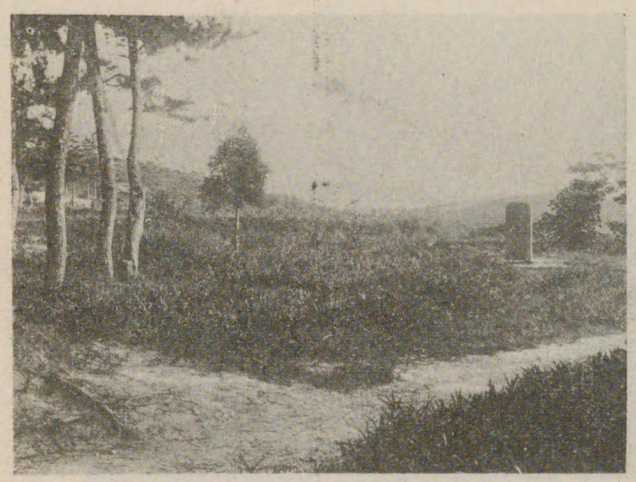
主なる學校、工場

名古屋藥學專門學校、名古屋遞信局遞信講習所、合資會社山田自動織布工場

桶狹間古戰場

（豐明村大字榮）　名古屋線　桶狹間驛

永祿三年駿河の大守今川義元が大兵を率ゐて上洛を企て、五月十九日織田信長の奇襲に遇つて一敗地に塗れたる古戰場で、東海道に沿ひ、三方丘陵に圍まれた窪地である。



桶狹間古戰場（右に見ゆるは古碑）

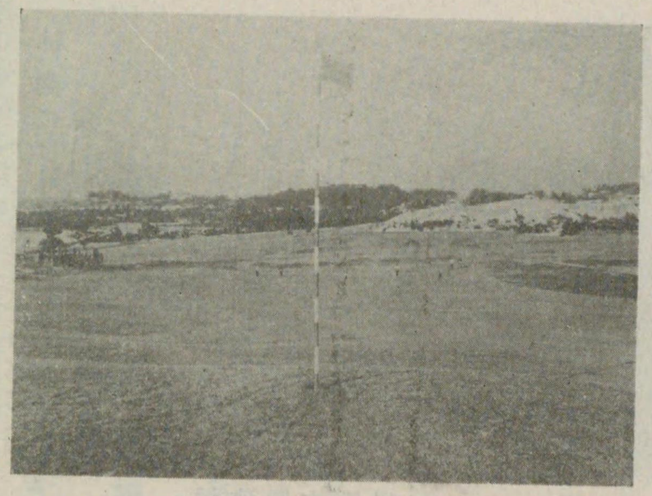
此處には今川治部大輔義元墓と刻した古碑の立てる墳丘があり、其の東方約十間の所に尾張藩の儒官秦鼎の撰文にかゝる文化六年建設の桶狹間弔古碑がある。又松林の中に士大將塚と稱する五墓の小碑があり、西方の丘上には今川方の部將松井兵部宗信の墓もある。尙東北字前後の丘上には今川方士卒二千五百有餘の遺骸を埋葬したと傳へる戰人塚がある。

和合ゴルフ・リンクス

（東鄉村大字和合）　乘合自動車

縣道擧母街道に沿ふて名古屋市東方十六

料の地點にある。



スクンリ・フルゴ合和

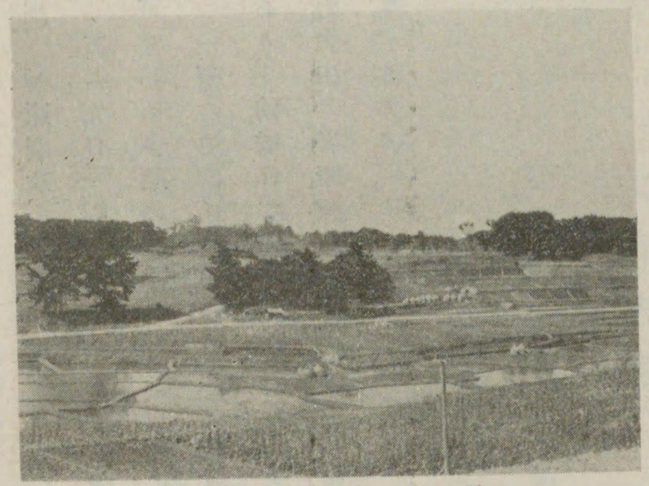
面積十六萬四千坪で、コースは頗る變化に富み、米國のパイン・バレーコースに相似するといはれる中部日本隨一のゴルフ場である。

音聞山

（天白村大字八事）乘合自動車

八事丘陵の東端にあつて遠く伊勢、美濃の連峰を模糊の間に望む景勝の地である。

明治二十三年陸海軍聯合大演習の行はるるや、その四月二日畏くも明治天皇親しく此處に諸軍を御統監あらせられ、越えて大正二年十一月十三日陸軍特別大演習に當り重ねて大正天皇の御野立所となつた聖蹟で史蹟に指定されてゐる。今記念の櫻が植えられ「御統監之所」と刻む記念碑が建てられてある。



長久手古戰場

大正四年大嘗祭悠紀地方風俗歌

君か代を千代もとよはふ松風の
音も絶えせぬ音聞の山

長久手古戰場

（長久手村）乘合自動車

天正十二年豐臣、織田の兩軍が小牧山に對陣するに及び豐臣方の部將池田信輝が岡崎を衝かんと企て却つて家康の爲めに大敗した處である。秀吉は秀次を主將とし信輝及森長可を之に從はしめ、更に堀秀

政を援軍として出發せしめた。家康は小牧山に在つて之を知り、先づ大須賀康高、榊原康政、本多康重を發せしめ、自ら織田信雄と共に進發した。

五月九日、兩軍は此の地に衝突し、數刻に亘る激戰に豐臣方は信輝父子、長可を始め多數の士卒戰死し、遂に家康方の勝利に歸した。

一帶の地は丘陵起伏し、老松散在する處に池田勝入及其の子之助戰死の碑があり、稍離れて森長可の碑がある。附近には家康が本陣を置いた富士ヶ根始め色金山、岩崎城阯、首塚等この戰に關した史蹟多く、そゞろに懷古の情を唆るものがある。

東春日井郡

小牧町

名古屋線　小牧驛・新小牧驛

人口一萬三千を有し、地方に於ける商業交通の中心である。産業は工業、農業、蠶業等その主なるものとし、總生産額四百六十萬圓に達するが、內工業最も盛で年産三百萬圓を超え、その多くは織物類である。

主なる官公署、學校

小牧稅務署、愛知縣蠶業取締所小牧支所、愛知縣繭檢定所小牧支所、愛知縣小牧中學校、株式會社服部商店小牧工場

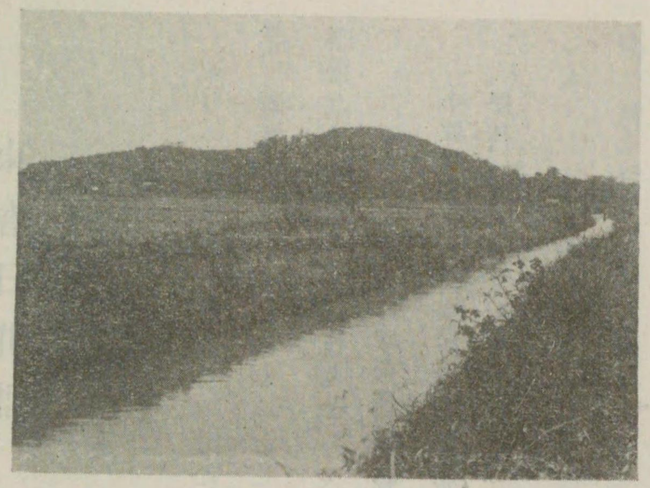
小牧山（小牧町）

平野の中に孤立する標高八十五米の山で、欝蒼として樹木に包まれてゐる。

山上に立てば遠く勢濃の繻峰や飛信の連山を展望し、景勝の地點である。

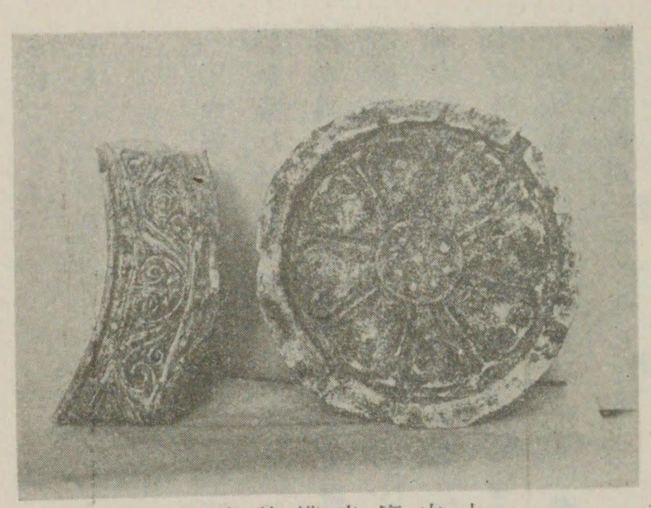
永祿年中織田信長は美濃攻略に備ふるため、此處に城を築いて清洲より移つたが、稻葉山を襲つて齋藤龍興を走らしめるに及び、本據を其處に移したので、此處は勢ひ廢城となつた。

尋いで天正十二年三月豐臣秀吉、織田信雄と隙を生ずるに至り、德川家康は信雄に味方して此の山の遺構を修築して之に據つた。四月に入つて僅かに小衝突があつたのみで兩軍待機の姿勢となり、長久手の一戰に家康勝利を得るに及んで、十一月遂に和議が成立し城砦を毀ち爾來全く廢墟となつた。



小牧山

その後德川時代尾張藩の管理に屬し諸人の入山を禁じたが、明治六年に至つて本縣は之を小牧公園として公開した。然るに同二十二年再び舊主德川氏の所有となり、登山に制限が加へられたが、昭和二年以後は小牧町の管理に移されて公開せられた。同年十一月陸軍特別大演習に際し、その十八日畏くも今上陛下親しく御登攀あらせられた。今史蹟に指定されてゐる。



大山廢寺塔阯古瓦

大山廢寺塔阯（篠岡村大字大山）

中央線　高藏寺驛＝乘合自動車＝自動車

峰の中腹にある、長徑一・四五米、短徑八八糎、表面に輪廓の彫込ある心礎と自然石の礎石十六個が原位置に存し、附近

に奈良朝時代の遺瓦が散在してゐる。嘗ては銅佛の發見があり、今史蹟に指定されてゐる。

密藏院

（篠木村大字熊野）　中央線　鳥居松驛＝自動車

天台宗延暦寺末で、嘉暦三年僧慈妙が此の地に來つて當寺を建立し、七堂伽藍を營むだものである。文祿四年豐臣秀吉寺領を寄附し、德川氏に至つても同樣寺領を與へた。元和五年名古屋城內三之丸に東照宮が造營せらるゝに及んで、住持珍祐が其の別當に補せられ、爾來明治維新に及び神宮寺の廢せられるまで兩寺兼帶で、その上城內の靈廟をも管理してゐたから、德川時代に於ける此の寺の勢ひは大したものであつた。

本尊藥師如來と多寶塔は共に國寶に指定されてゐるが、其の他に佛像、古文書、佛畫類を多く藏してゐる。

龍泉寺

（志段味村大字吉根）　瀨戸電線　小幡驛＝乘合自動車

庄內川の流れに臨んだ丘上に建てられ、廣濶な平野を視野に抱く景勝の地である。寺は天台宗に屬し尾張四觀音の一として知られてゐる。本尊は寺內の多羅々池より出現されたと傳へる馬頭觀音で、龍神が一夜のうちに堂舍を營んで龍泉寺と名づけたと謂ふ。

天正十二年長久手合戰のとき豐臣方の陣所となり諸堂宇、寺寶悉く烏有に歸したが、慶長三年僧秀純によつて再興せられ、元和三年には藩祖義直より寺田が寄進された。

所藏の木造地藏菩薩立像には嘉元元年無住作の銘があつて、仁王門と共に今國寶に指定されてゐる。

守山町

瀬戸電線　守山口驛

人口一萬三千を有し、矢田川を隔てゝ名古屋市に接してゐる。近年名古屋市運の隆昌に伴つて町勢は著しく進展し、今やその郊外住宅地として又工場地帶として面目を一新した。主要なる産業としては工産の百三十萬圓、農産の五十萬圓がある。

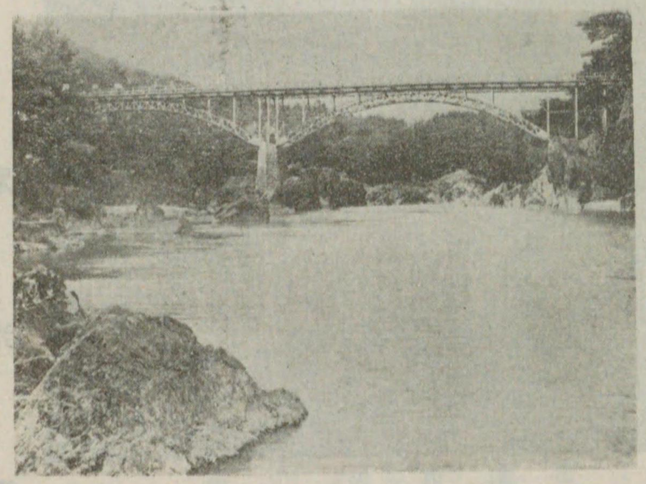
主なる會社、工場

株式會社關西製絨所、龍泉寺土地株式會社、龍泉寺自動車株式會社

森林公園

（旭村、志段味村）瀬戸線　三郷驛＝自動車

名古屋市郊外に未だ森林の自然美を利用する公園がないので、縣は本郡旭村から志段味村及瀬戸市の一部に亘る八百餘町歩の縣有山林の美化計畫をたて、一大森林公園を設立することになつた。



玉野川

此の地は瀬戸電鐵と中央線に挾まれ、尙東方の縣道には省營バスの利便もあつて交通に惠まれた上、なだらかに起伏する丘陵とその間に散在する幾多の池沼とが融和して自然の景勝地をなしてゐる。

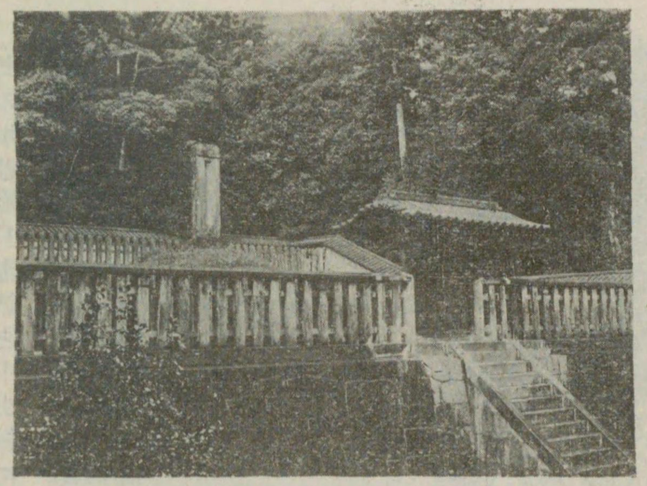
玉野川

（品野町）中央線　定光寺驛

庄内川の上流を玉野川と云ひ景勝を以て稱へられてゐる。殊に鹿乘橋の附近から城嶺橋までの間は最も趣致に富み、兩岸に迫る山々が四季の景觀に一段の變化を添へてゐる。

定光寺

（品野町）中央線　定光寺驛



徳川義直廟

城嶺橋を越へて山裾より谿谷を縫ふて密林の畫猶寂しき山路を登れば五六町にして定光寺の本堂に達する。

この寺は建武年間處齊平心の創草で、貞和年間には七堂伽藍完備の道場となつたが、その後一時衰退したのを慶安三年喝堂之が再興に着手し、承應元年に至つて完成した。之より先き元和年間藩主義直が遊獵して始めて此の山に登り、四圍の景勝を愛して廟地と定め、爾來屢々此の山に遊んで寺門再興に力を添へたが、慶安三年五月江戸藩邸

に薨ずるに及んで遺骸を此の寺に葬つたものである。舊時は寺領三百五十石を有し、境地の勝と共に名刹として早くから世に知られた。寺寶の銘助重、銘守家の太刀二口は佛殿と共に今國寶に指定されてゐる。

義直の廟宇は寺後の山上に在る。承應元年夏竣工したもので、明の歸化人で義直に仕へた陳元贊の經營になつたと云はれてゐる。獅子門を入ると其處に磚の敷かれた支那趣味の拜禮所があり、更に進んで唐門を入ると封土の上に陳元贊の書にかゝる二品前亞相尾陽侯源敬公墓と刻した支那式の位牌形墓碑が立てられてゐる。また墓側の一段低いところには殉死した家臣五名と其の臣四人の墓石がある。

西春日井郡

枇杷島と青物市場

東海道線　枇杷島驛
名古屋線　西枇杷島驛

もと琵琶島とも書いた。治承のむかし、尾張井戸田に謫流された藤原師長が後ち許されて歸洛のとき、愛する横江某の女に此處まで見送られたが、女は惜別の情に堪えず「四ツの緒のしらべも絶えて三瀬川沈み果てぬと君に傳へよ」の辭世を殘し、かたみの琵琶を抱いて河水に身を投じたと謂はれ、その遺骸を琵琶と共に河中の島に葬つたと傳へられてゐる。

その後この中の島が東海道と中仙道を結ぶ美濃街道筋に當るといふので、藩主義直が檜の良材を以て此處に大小の二橋を架設した。爾來この橋は明治維新に至るまで車の通行を禁止せられたが、またこの島は爾來景勝の地として著はれ、諸家の遺せる吟詠も尠くない。

枇杷島青物市場狀況

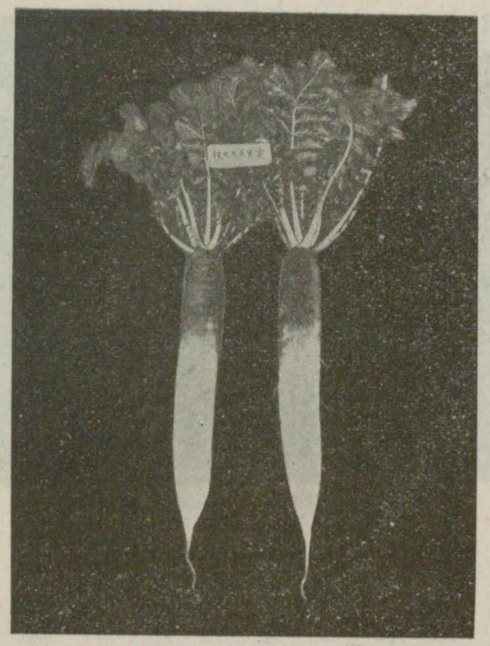
この風景と共に古來有名なのは蔬菜青物の市場である。

此の市場は德川幕府と尾張藩の保護の下に問屋三十八軒を維持し二百餘年の間營業權を獨占して明治維新に至つたもので、現在一ケ年の取扱高は五百萬圓に達し、中部日本に於ける蔬菜果實市場の首位にある。その特色は仲買人を存在せしめず蔬菜果實を問屋から直ちに小賣商若くは消費者に供給することで、遠近より蝟集する數千の人々の雜踏と車輛數千の轟擊する喧囂のさ中に飛ぶが如き集散の光景は眞に奇觀である。

市人にこの笠うらう雪のかさ　　芭蕉

西春日井郡

宮重大根（西春村）



宮重大根

宮重大根は慶長の頃から廣く尾張地方に栽培されてゐるが、その原産地が大字落合字宮重で、而かもこの地のものが特に優秀とせられたところから此の名を得たものである。維新前に於ては藩主より御所及び幕府へ献上したと謂はれ、風味の美なることは全國第一と稱せられる。

清洲町

東海道線　清洲驛
名古屋線　清洲驛

もと城下街として繁榮したものであつたが、慶長十五年遷府と共に町家亦名古屋に遷り街衢は概ね田畑と化した。當時の落首に「思ひよらざる名古屋が出來て花の清洲は野とならふ」とあるを見てもその變化が如何に急激であつたかが想像される。

現在人口四千五百を有し、附近一帶は蔬菜の主要産地として知られて養鶏亦盛である。

主なる官公署、銀行、會社

愛知縣農事試驗場清洲分場、愛知縣種畜場清洲分場、株式會社清洲銀行、悌愛株式會社

清洲城址（清洲町大字清洲）

此の城は應永年間尾張の守護斯波義重が始めて築き代々家臣に之を守らしめた。其の後四代の孫義統が天文二十二年家人織田信友に弑せられたので義統の子義銀は織田信長に援を求めた。そこで信長は信友を誅し、義銀を本丸に置いて自ら二之丸に移り住した。然るに永祿年中義銀は密かに謀つて信長を害せん

としたので、信長は之を追放して自ら本城に據ることになつた。信長の沒後は第三子信雄が城主となり、次で後ち豐臣秀次、福島正則居城し、慶長五年に至つて德川家康の御四子松平忠吉此處に轉じ、其の早世するに及んで家康の第九子義直が甲斐より此處に移り、五十二萬石を領した。

清洲城趾

かくの如く此の城は足利の初政以來尾張の治城であつたが、外廓は五條川にとりまかれて屢々氾濫するので遂に遷府の令が發せられ、慶長十五年二月名古屋に移されて廢墟となつた。今城趾として見る可きものは東海道本線に沿ふ舊本丸趾と稱する一堆の岡丘があるのみで其の上

に弘化年中清洲代官武田晨業が五條川の底から掘り出した古城の遺石に「右大臣織田信長公城跡」と刻んだ碑と、文久二年林國次郎の建てた齋藤咄堂撰文の「清洲城墟碑」とがある。

新川の開鑿

庄內川は降雨毎に河水が氾濫するので藩主德川宗睦は自ら里民の窮狀を視察し、藩吏人見彌右衛門、水野千右衛門に命じて之が救濟策を講ぜしめられた。爰に於て千右衛門は專ら工事に當ることゝなり、先づ味鋺堤を五合目まで切り下げて溢水を大蒲林の沼に落し、更に喜惣治、比良の間を堀割つて之を西に流し、海部郡榎津を經て海に落す巨川の開鑿に成功した。世に之を新川開鑿の御普請といふ。爾來庄內川增水の調節をなすと共に惡水疏通の便をも扶け、沿岸の住民は全く水害から救はるゝに至つた。後世その功を賞し比良新橋の附近に頌德の一大碑石を建設した。

丹羽郡

布袋町

名古屋線　布袋驛

人口八千を有し、産業は從來農蠶業を以て第一となしてゐたが、時代の趨勢と交通機關の整備は近時工業方面にも一進路を開き、今や工産額は三百六十餘萬圓に達して産業總産額の八割五分を占めてゐる。

主なる宮公署、學校、會社

布袋警察署、愛知縣蠶業試驗場、愛知縣丹羽高等女學校、株式會社佐橋谷商店、日本レイヨン織物株式會社、株式會社山茂杉商店

木津用水

藩祖德川義直の令により開鑿したものと謂はれ、犬山町木津から木曾川の水を堰入れ、大口村大字小口に於て之を三流に分ち、丹羽、葉栗、東西春日井の四郡二十三ヶ町村を潤してゐる。古木津用水は小牧町を過ぎ、西春日井郡を經て新川に至り、新木津用水は其の東方樂田村及味岡村を經、鳥居松村に至つて八田川に合し、更に勝川町に於て庄内川に注ぐ。又五條川用水は大口村より岩倉町地内に至り矢戸川に合流する。而して古木津用水は流程六里、新木津用水は之より稍短く、五條川用水約三里で、その灌漑面積は五千三百餘町歩に達してゐる。

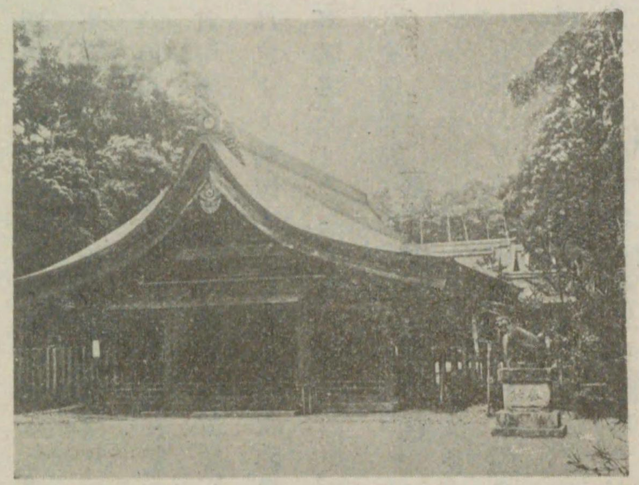
國幣中社　大縣神社

（樂田村）　名古屋線　樂田驛

尾張二ノ宮で本宮山の麓に鎭まり、大縣神を祀る延喜式神名帳の名神大社である。社傳に從へば垂仁天皇二十七年の鎭座で、天武天皇の朱鳥年間再建し、清和天皇の貞觀中修理せられたが、永正元年火災に罹り、同十五年に織田彈正左衛門久長によつて再建されたといふ。

現在の本殿、祭文殿及び廻廊は萬治三年藩主光友の奉建に係り特殊な構造を爲してゐる。舊時は社領二百石を有してゐた。

本宮山は標高二百九十三米を有する尾張第一の高峰で眺望に富み、頂上に大縣神社の奥宮がある。



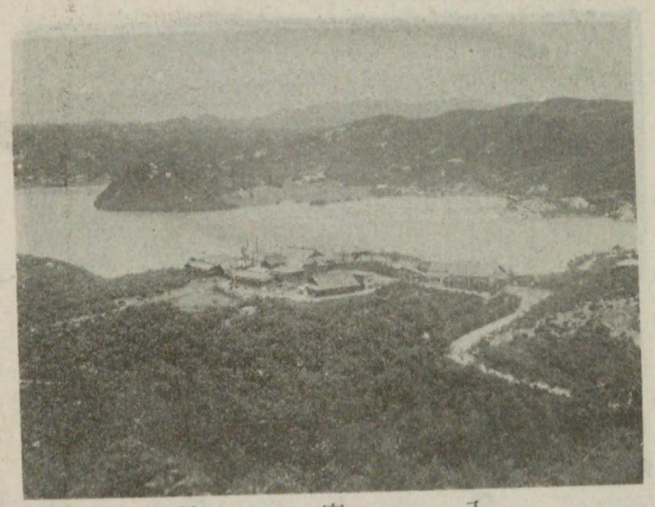
大縣神社

入鹿池（池野村）

名古屋線　羽黒驛＝乘合自動車

入鹿池はもと虫鹿庄入鹿村と稱し、安閑天皇の朝に屯倉の置かれた所と謂はれる。慶長の頃、江崎善左衛門外五名の者が此處に堤を築いて湖沼を造れば必ず尾張平野に灌漑の利便を得られやうと企畫し、寛永七年工事に着手、同十二年完成したもので、當時の開墾地は八百餘町歩に達した。その後明治元年出水の爲め堤防決潰し名狀すべからざる慘狀を呈したが、同十五年復舊工事全く成り、現在灌漑耕地は一千六百餘町歩に及んでゐる。

漫々たる碧水を湛へる池は周回三里、面積五十餘萬坪を有し、四方山野に圍まれて明雅な趣致に富み、四季の行樂地として多くの遊覽客を吸引してゐる。



入鹿池

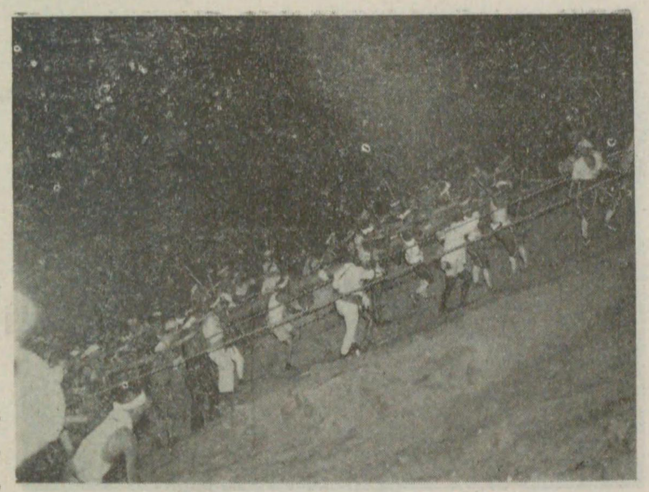
尾張富士と石上祭

（同　前）

尾張富士は標高二百七十七米を有し、山容の秀麗を誇るかのごとく入鹿池の

西に聳へてゐる。山頂には木花開耶姫命を祀る大宮淺間神社がある。往古は富士大明神と稱し、修驗十二坊等あつて榮えたといふ。

舊曆五月晦日から六月朔日にかけて行はれる石上祭は石を運んで山を高くすること、が神慮に叶ふとの信仰から始められたもので、數名或は數十百名を以て一團を作り、木遣音頭賑やかに峻坂をついて頂上に大石小石を擔ぎ上げる壯絶な奇祭である。



石上祭

ひとつばたご自生地

（池野村）

字西洞四十一番地に珍木ひとつばたごが生育する。之は木犀科の喬木で五月頃白色の細い花瓣の花が群つて咲く。朝鮮や亞細亞の東部には產するが、日本では古來稀に見る植物で、今天然紀念物に指定されてゐる。初め此の木は名が知れないので「なんじやもんじや」と云はれた。

犬山町

名古屋線　犬山口驛・犬山驛・犬山橋驛

尾張平野の盡くる處、木曾川の南岸に沿ふて人口一萬三千を有し、岐阜縣に通ずる要衝に當つてゐる。木曾川の絕勝が世に喧傳せられて以來觀光客陸續として集まり遊覽都市として著しき發展を示すと共に、近時上水道の完成、觀光施設の改善等も行はれて新興氣分の潑溂たるものが見られる。

特產としては犬山燒と葱冬酒がある。犬山燒は元祿頃の創始で風流雅致に富み、葱冬酒は慶長以來家傳の秘法によつて釀造せらるゝ珍酒である。

主なる官公署、學校、工場、會社、旅館

犬山警察署、愛知縣犬山高等女學校、帝國毛糸紡績株式會社犬山工場、犬山瓦斯株

式會社、犬山ホテル、彩雲閣(旅館)、迎帆樓(旅館)

犬山城

(犬山町)

犬山城

此の城は永享の初め斯波滿植が現地の南方木之下に築いたのを、織田信康の時現地に移したと傳へられる。小牧戰役には池田信輝の襲撃を受け豐臣秀吉の入城を見た。慶長五年關ヶ原合戰の後ち德川氏の有に歸し、義直が尾張に封ぜらるゝに及んで傅平岩親吉が城主となり、次いで元和三年成瀨隼人正正成代つて傅となり、三萬五千石を

領し城主となつた。爾來子孫繼承して明治維新に至り、明治二年正肥の版籍奉還後、僅かに天守閣を殘して他の建物は悉く取毀たれた。その後城地は一旦縣有公園となつたが、同二十八年舊藩主子爵成瀨正肥に讓渡し、爾來成瀨家の管理に屬して公開されてゐる。

この天守閣はもと美濃兼山城のものを慶長年間石川光吉が木曾川を下して此處に築いたと謂ふ。外觀は三層樓であるが、內部は五階となり、上層の四邊には勾欄が設けられてゐる。

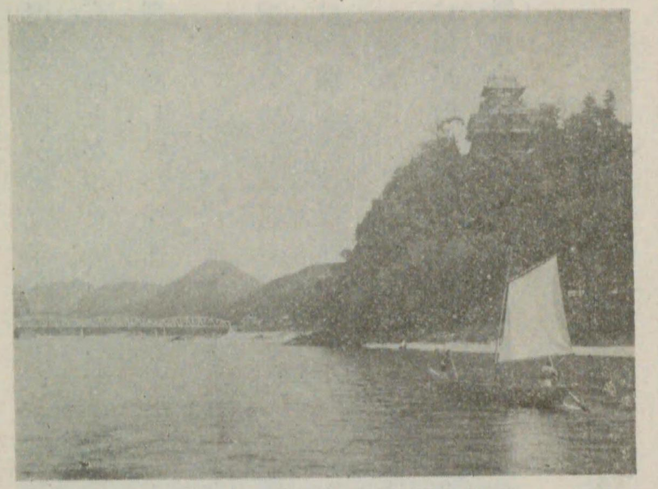
一度樓上に登臨すれば遙か惠那、駒、御嶽、伊吹等の重疊たる連峰を望み、近くは濃尾の平野を一眸に收めて脚下に烟るが如き木曾の清流を俯瞰する。而かも銀色の橋下を白帆の翼を擴げた扁舟が悠々上下する樣は宛然一幅の名畫である

木曾川の峽谷

名古屋線　犬山橋驛・ライン遊園驛

犬山より上流岐阜縣土田に至る間を俗に日本ラインといふ。地質は古生層で

主として角岩硅岩を以て構成され、赤に、青に、所謂五色を呈する岩石は表面に茫だしく褶曲を生じ、それより風化して生ぜる岩塊が樣々な曲線を描いてゐる。恰も老獅子の咆哮するが如く、或は巨人の怒號するが如く、その姿は千狀萬態である。而かも其の水あくまで清く水量豐かで、一度上流より舟を驅つて激流奔湍を下れば風景の變化妙幻は眞に迎接の遑がない。是等景の變化多い風景に慣れる頃、眼界は忽ち一轉して俄かに靜平、而かも汪洋たる大江が展開する。鬱蒼たる丘上には犬山城が屹然と聳立し、碧潭に浸す容影は宛然鶴が双翼を擴げた樣である。



木曾川と犬山城

自然の美と此の壯嚴なる人工の粹に接して初めて日本ラインの眞價を知るのである。近年は鵜飼も行はれ一層の興趣が添へられてゐる。

古き城は立てり靜かに山上の　　與謝野晶子

若葉そよぎの薫する雨に

大正十五年預選

犬山の城の白壁さやかにも

うつりて淸し木曾川の水　　片野宅郎

古知野町

名古屋線　古知野驛

人口一萬六千を有する。產業は古來養蠶盛で、その生繭生糸の集散は近時勃興せる工業と相俟つて益々商況を盛ならしめてゐる。その生產額を示せば工產六百萬圓、蠶業百五十萬圓である。

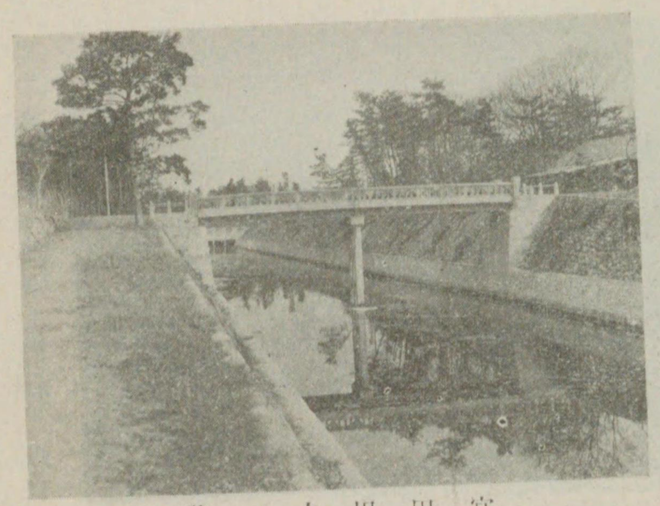
また往昔から行はれる月六齊の市は生糸、織物、日用雜貨等の取引多く雜踏

を極めてゐる。

主なる官公署、學校、工場、會社

愛知縣蠶業取締所古知野支所、瀧實業學校、寺澤絹織物株式會社、中村製絲合名會社、株式會社服部商店古知野工場

葉栗郡



宮田用水々路

宮田用水（宮田町）

名古屋線　古知野驛＝乘合自動車

二三町の間隔を置き木曾川堤に東、西の兩樋門を設けて水路を開鑿せる尾張最初の用水である。

西元杁は初め慶長十四年大野村（今淺井町大字大野）地内に設けたのを寛永五年今の地に移したもので、その水路を大江用水と稱し、東元杁は寛永十九年の創設で、その水路を新磐若用水と云ふ。この兩樋門を

以て灌漑する區域は葉栗、丹羽、中島、西春日井、海部の五郡に亘りその面積は一萬二千町歩に及んでゐる。

曼陀羅寺（宮田町前飛保）

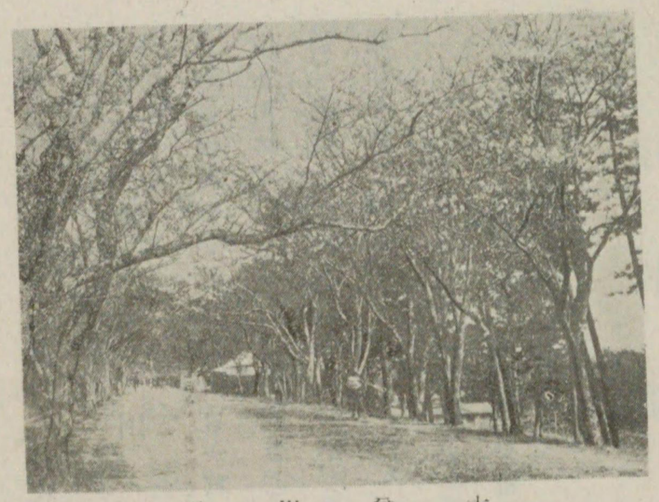
名古屋線　古知野驛＝乘合自動車

曼陀羅寺（右本堂左の瓦屋根は曼陀羅堂）

淨土宗の寺で、元德元年後醍醐天皇の勅願に依つて創建せられ、初め圓福寺と稱したが、寛正三年曼陀羅の靈異に依つて今の名に改めたと謂はれてゐる。天文十年後奈良天皇から勅願寺の綸旨を賜はり、同二十年織田信長伽藍を修理し、次いで豐臣秀吉も伽藍の修理を爲し寺領を寄附し、更に藩主德川氏より二百三十餘石を附せられた。

寺域は廣大で清楚閑雅の趣に富み、入母屋造檜皮葺の本堂や曼陀羅堂その他古雅な堂塔が配置よく並び建つて尾北に於ける名刹たるに恥じない。

寺寶には書畫、古文書、古器物など多く、木絹本着色の淨土五祖像と朝鮮鐘は今國寶に指定されてゐる。



木曾川堤

木曾川堤の櫻

東海道線　木曾川驛＝乘合自動車

草井村、宮田町、淺井町、葉栗村、北方村の五ヶ町村に誇る木曾川堤防の櫻並木で、目通四尺以上のもの約三百本を始め、總計二千本が數尺を隔てゝ植えられてゐる。樹種は彼岸櫻と枝垂櫻が最も多く、花

候には長堤三里のあひだ、所々に花のトンネルを現出して頗る壯觀を呈する。今名勝及天然紀念物に指定されてゐる。

木曾川町

東海道線　木曾川驛

木曾川の東岸に沿ふ人口一萬二千の都邑で、尾西織物工業地帶の北部重要地點を占めてゐる。織物の主なるものは毛織物の六百萬圓、絹綿交織物の二百萬圓、綿織物の百萬圓であるが、この他産業中主なるものとしては蠶糸の百二十圓がある。

主なる工場、會社

長谷川毛紡株式會社工場、水新毛織株式會社、株式會社神田商店、岐阜毛織株式會社、合名會社玉榮社

中島郡

稻澤町

東海道線　稻澤驛
名古屋線　國府宮驛

人口一萬四千を有し、東海道線と名古屋鐵道に挾まれて貨物の集散多く、商況は活氣を呈してゐる。産業の主なるものとして織物の七十五萬圓、農産の九十五萬圓があるが、殊に農産中蔬菜類は年産五十萬圓の多額に上つてゐる。

大字松下に國衙屋敷と呼び古瓦の出土する所があつて、國府廳舍の阯と傳へられてゐる。尾張國司のことは日本書紀天武天皇の條に、尾張國司小子部連鉏鉤のことが見えてゐる。其の後多くの國司が任命せられたが、就中大江匡衡は最も優れた國司で、此の地に學館を創設し自ら教授になつたといふ。今「尾張國學之阯」の標識が建てられてある。

主なる官公署、學校、銀行、工場、會社

稲澤警察署、稲澤高等女學校、愛知縣稲澤農學校、株式會社稲澤銀行、稲澤電燈株式會社、水谷毛織株式會社工場

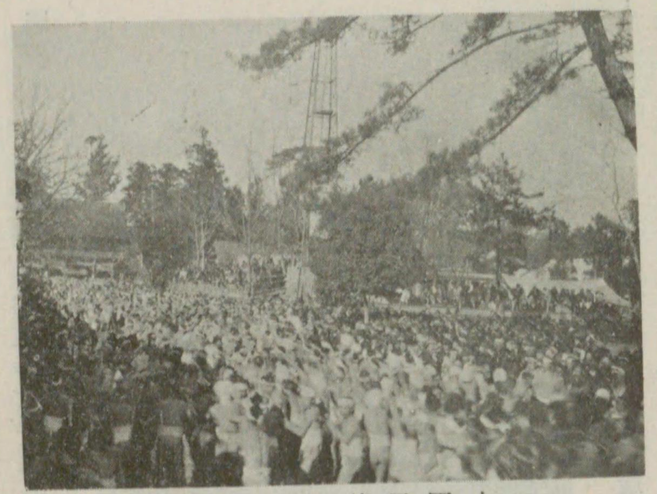
縣社　尾張大國靈神社

（稲澤町大字國府宮）　名古屋線　國府宮驛

大國主神荒魂を奉齋する延喜式内の社で、寶龜二年官符を下して社殿を造營し、仁壽三年官社に列せられ、平安朝の頃は尾張總社に當てられた。社叢は美しく社殿、拜殿、祭文殿、廻廊、樓門等孰れも神寂びた古雅な建築である。

舊曆正月十三日に行はれる直會祭は俗に儺追祭と稱し、人身御供の遺風を留めた裸祭として全國に著名のものである。

むかしは往來の人を捕へて儺負人として一國の災厄を負はせ、祠官や長追の人々が白刄を振りかざし追拂ふと云ふ亂暴な祭であつたが、寛保四年尾張藩から堅く禁止せられて以來、志願者の中から四十二歳厄年の屈强な男を選んで之に當らしめ、選ばれた儺負人は祭日の一ヶ月前から修秡潔齋して、當日未明惠方に當る社の中に遁がされ、それを捕人の者がつれだしてくるのであるが、それと見るや、幾千の裸體は之に觸れて厄を拂はうと、近寄つて犇めく。此の揉み合ひ、押し合ふ樣は實に天下の奇觀である。



大國靈神社の裸祭

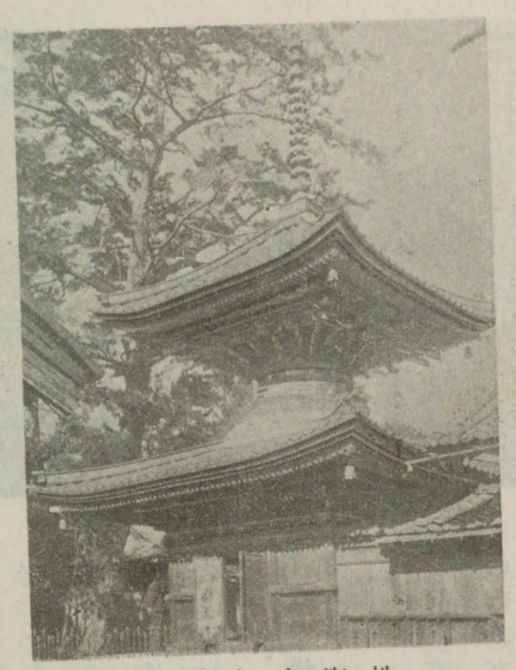
性海寺

（稲澤町大字大塚）　名古屋線　奥田驛

眞言宗の寺で、弘法大師が熱田神宮參籠の砌創立したと謂はれてゐる。その後建長年間領主長谷部源政が熱田大宮司家出身の良敏を中興開山とした。

良敏と協力して諸堂宇を建立し、

愛染明王を祀つた俗に愛染堂と云はれる多寶塔は室町時代の優秀な建築で、國寶に指定されてゐる。所藏の古文書類多く、又鎌倉時代の製作にかゝる須彌壇、廚子等貴重なものがある。

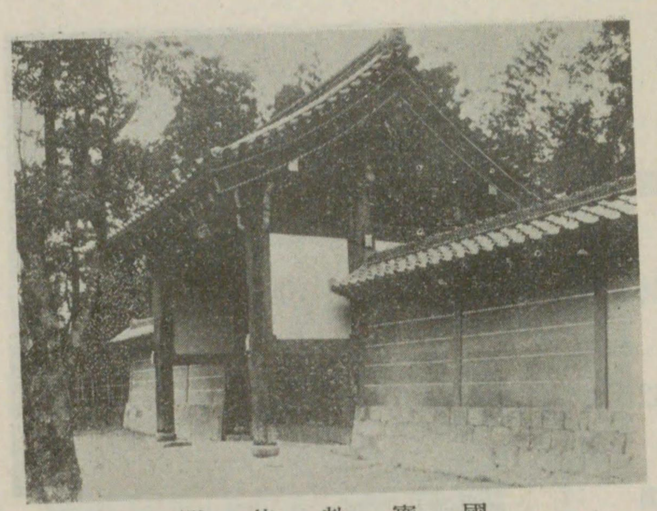


性海寺多寶塔

妙興寺（大和村）

名古屋線　妙興寺驛

大應國師を開山とする臨濟宗妙心寺派の巨刹で、曾ては後光嚴天皇の勅願寺であつた。近世に至つて火災の爲め多少舊觀の失はれた憾みはあるが、依然として法燈隆昌で、室町時代の建造にかゝる勅使門始め、木造大應國師の坐像一軀、絹本着色の佛涅槃圖一幅、紙本着色の足利義教の畫像一幅は今國寶に指定されてゐる。梵鐘には永和二年在銘のものと、享德二年のものとがあり、其の他累代の綸旨、院宣、教書等數多の寺寶がある。



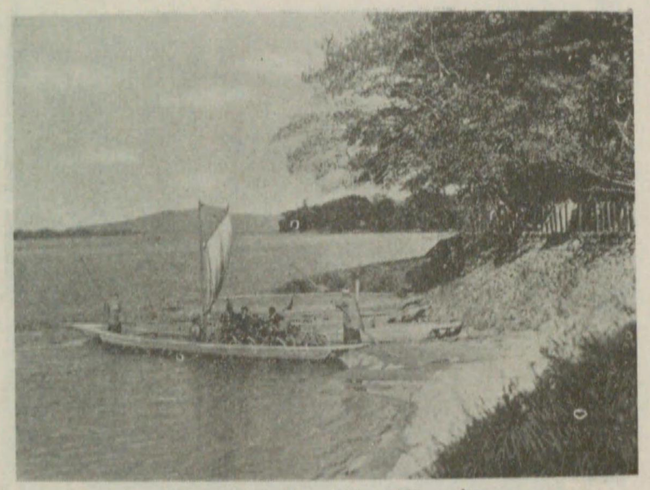
國寶　勅使門

起町

名古屋線　起驛

人口二萬餘、木曾川の東岸に沿ふて發達せる縣内屈指の機業地である。斯業の起原は明らかでないが、遠く慶長頃の創始と謂はれ、現在三百に餘る工場に於て生産され年産額は四千二百五十萬圓に達してゐる。その主なるものは毛織物、絹綿交織物、綿織物であるが、内毛織物最も盛でその生産額は三千七百萬圓を占めてゐる。

この地はまた徳川時代、東海道と中山道を結ぶ美濃街道の渡船場としての宿驛をなしてゐたので、今尚舊時の俤が存してゐる。



起驛渡船場阯

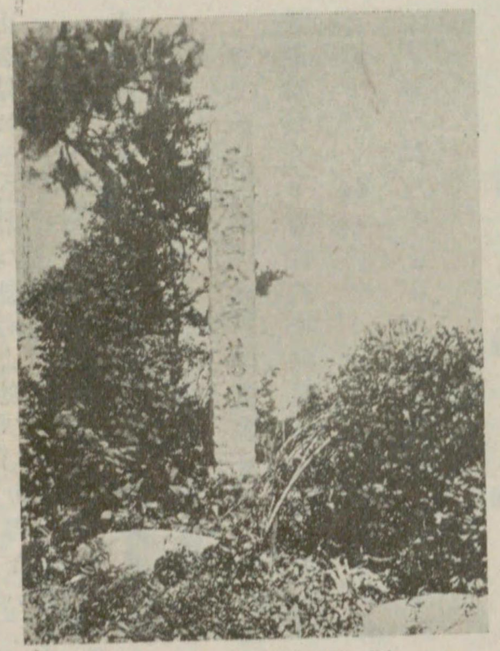
おこしの驛に宿りて
旅衣きその川へにやとりして
すゝしき瀬々の月を見るかな

主なる學校、工場、會社

愛知縣起工業學校、艶金興業株式會社、蘇東興業株式會社、木九織物合名會社、株式會社國島商店、株式會社小留商店、株式會社伊芳商店、ふじや毛織株式會社、合資會社新興染絨工場

祖父江町

人口一萬二千の都邑で、近年機業も盛であるが、由來この地は地味豊かで庭園樹、果樹苗、盆栽、土當歸、欵冬等園藝植物の栽培に適し、その生産額も尠くない。殊に庭園樹の移出多きことは全國に冠絶してゐる。



尾張國分寺阯

尾張國分寺阯

（明治村大字矢合）

東海道線　稲澤驛＝乘合自動車

いま國分寺と稱する寺が存在して寺寶に國寶もあるが、往時の寺阯は其の南

方の畑中に殘り「尾張國分寺阯」の標識が建てられてある。附近から古瓦の出土を見るが全體の遺構は窺ひ知り得ない。

隣接の大字法花寺に國分尼寺があつたといふが、今その遺阯として見るべきものなく、僅かに此の地にある法華寺といふ寺名にその名殘を止めてゐる。

海部郡

津島町

名古屋線　津島驛

人口二萬二千を有して尾西地方に於ける商工業の中心をなし、六十八の會社と六十の工場を包有してゐる。産業は織物を主とするが、毛織物殊に盛で其の年産額は二千五百四十萬圓に達してゐる。

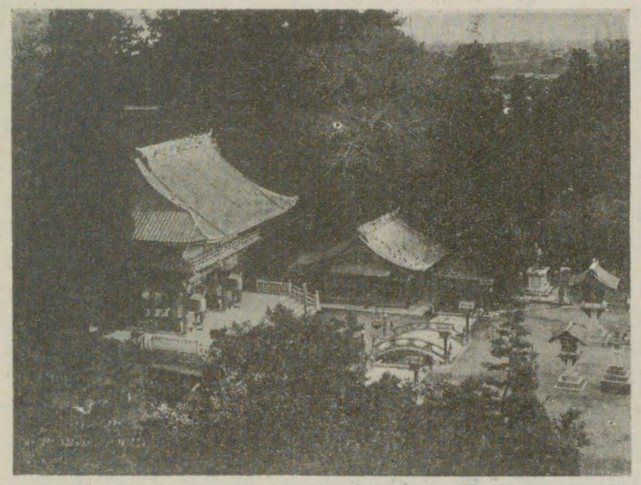
また蓮根は此の地の特産物として知られ、年産六萬二千貫に上る。

主なる官公署、學校、工場、會社

津島稅務署、津島警察署、津島財務出張所、愛知縣毛織物檢査所津島支所、津島土木工區事務所、愛知縣津島中學校、愛知縣津島高等女學校、東洋紡績株式會社津島工場、株式會社富永商店、合名會社遠山商店、片岡毛織株式會社、艶金興業株式會社津島工場、津島染色整理株式會社、合名會社伊藤長七商店、東陽倉庫株式會社津島支店

國幣小社 津島神社

（津島町） 名古屋線 津島驛



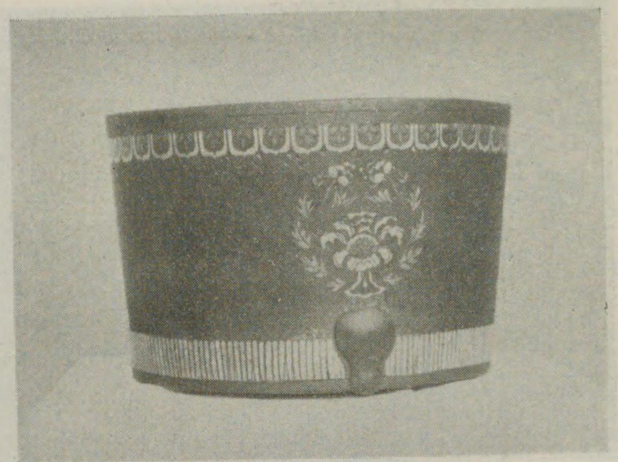
津島神社

祭神は素盞嗚尊である。牛頭天王の日本總社といはれ、南北朝の頃、後龜山天皇の勅命によつて大橋三河守定省が社殿を造進したと傳へられてゐる。

織田信長は社殿を造營し、神領を寄せ或は祭式を復興するなど種々尊崇の誠を効した。天正年間の建造にかゝる丹塗の本殿は今國寶に指定されてゐる。

德川時代には歷代藩主の崇敬厚く、一千二百石の神領が附せられてあつた。欝蒼たる神域には本殿以下莊嚴なる殿宇が並び建

ち、頗る森嚴である。



梶常吉作香爐

社寶の銘眞守の太刀一口と銘長光の劔一口は今國寶に指定されてゐる。

舊曆六月十四日の宵から十五日の朝にかけて行はれる船祭は、古來特色ある祭典の一つとして著名で、五艘の祭船が松原をかすめて漕ぎくる光景はまさに一幅の繪畫である。

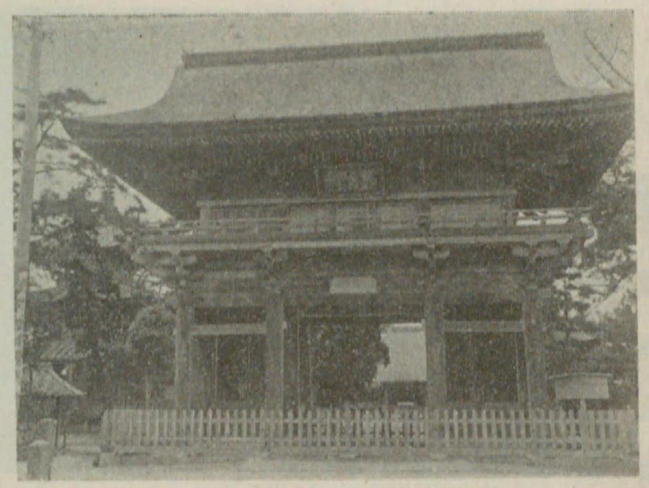
七寶燒開祖 梶常吉碑

（七寶村大字遠嶋） 名古屋線 七寶驛

常吉は尾張藩士梶市右衞門の次子で、文政年中服部村に住して鍍金を業とした。一日古書を繙き偶々七寶の語があつた

ので、之にヒントを得和蘭製の七寶皿を打ち碎いて製法の研究に沒頭し、遂に精巧なる七寶燒に成功したのである。而して製法を林庄五郎に傳へ、更に同村内の人々にも傳へて克く今日の隆盛を見るに至つた。

常吉は明治十六年九月八十一歳を以てこの地に病沒した。今八幡神社の境内にその記念碑がある。



國寶　仁王門

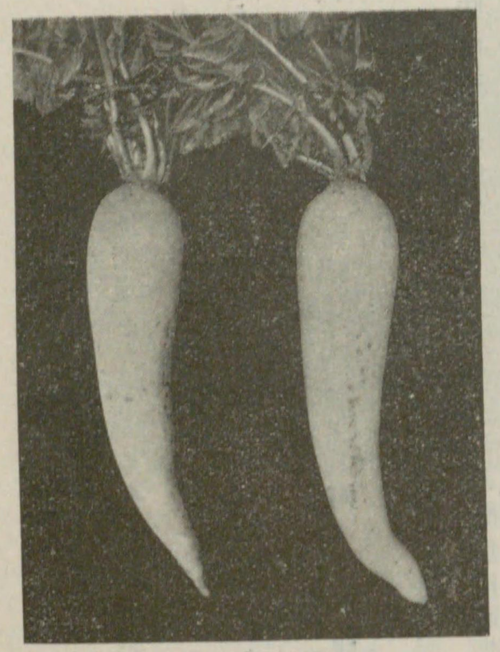
甚目寺（甚目寺町）

名古屋線　甚目寺驛

目龍麿が漁獵の砌り海中から紫金の聖觀音像を得、一宇を建立して之を安置し新義眞言の智山派で、推古天皇五年に甚

その姓に依つて甚目寺と稱したと謂ふ。天智天皇御不豫の時、當觀音に祈願して靈驗があつたので勅願寺とせられたと傳へられ、爾來庶民の信仰厚くやがて一大伽藍を營むに至つたが、其の後荒廢し、建久七年聖觀によつて再興せられたものである。最近明治六年の火災と二十四年の濃尾地震に遭つて大いに舊觀を損したが、建久再建當時のもので梶原景時の奉行に因ると傳へる三間一戸樓門はよく災異を免れて今國寶に指定されてゐる。

寺寶には紙本著色の不動尊像と兆殿司作と謂はれる絹本着色佛涅槃圖の國寶がある。



方領大根

方領大根

（甚目寺町大字方領）

大字方領を原産地となすところからこの名を得たもので、廣く各地に栽培されるが、海部、西春日井、愛知の三郡に最も盛である。大なるものは周圍一尺、目方三貫に達するものもあつて食膳に珍重されてゐる。

蟹江町

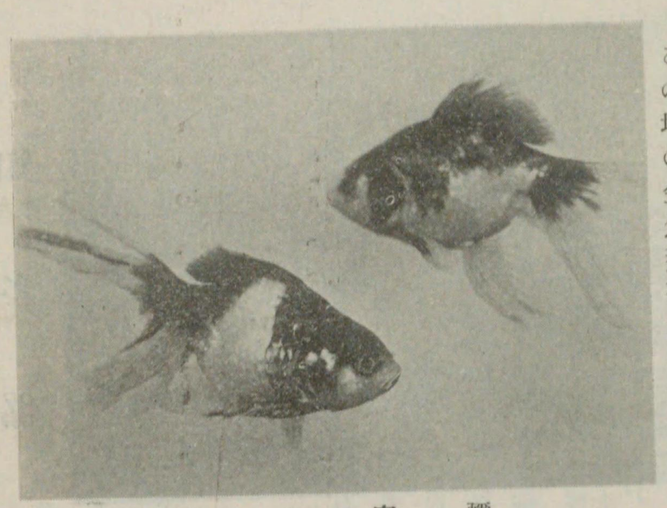
關西線　蟹江驛

一萬一千の人口を有し、特産として味淋、無花果、簾、線香等がある。就中味淋はこの地の風土と水質がその醸造に適して品質の優良を以て知られ、年産額は一千八百石に達して縣内の首位にある。

彌富町

關西線　彌富驛
名古屋線　彌富驛

人口七千を有し、彌富金魚の名によつて著はれてゐる。



彌富金魚

この地の金魚養殖は明治初年以來のことであるが、爾來年と共に隆盛に赴き、現在に於ては奈良縣郡山と伯仲し、金魚の生産地として名聲を馳せてゐる。種類は朱分金、和金、硫金等で、年産一千萬尾を超え遠く米國、濠洲方面まで輸出されてゐる。

また近時勃興せる工業は逐年隆盛に赴き、その生産額は一千四百萬圓に達した。この外農業亦盛で、特産枇杷、無花果の産額も尠くない。

主なる官公署、工場、會社

彌富警察署、昭和毛絲紡績株式會社彌富工場

知多郡

半田港

半田町

武豐線　半田驛
名古屋線　知多半田驛
知多線　半田口驛

人口一萬八千を有する郡内の主邑で商工業の中心地をなし、市況は頗る活潑である。衣ヶ浦に臨む半田港は港頭常に帆檣林立し、四千萬圓の移出入が行はれてゐる。工業の主なるものは綿糸一千二百萬圓、綿織物一千百萬圓、ビール百三十萬圓、製麥粉四十萬圓、醬油及溜四十八萬圓、清酢三十五萬

圓、味噌三十萬圓、清酒三十萬圓等で、總産額は三千餘萬圓となる。

主なる官公署、學校、銀行、會社、工場

半田税務署、半田警察署、半田財務出張所、半田土木工區事務所、愛知縣半田中學校、愛知縣半田農學校、半田商業學校、株式會社中埜銀行、株式會社中埜酒店、株式會社中埜酢店、株式會社龜甲富中埜醬油店、東洋紡績株式會社知多工場、株式會社殿島屋製粉所、中埜産業合名會社、株式會社万三商店、半田合同運送株式會社、半田臨港線株式會社、半田倉庫株式會社、丸豐合資會社、合名會社伏見屋商店、東邦瓦斯株式會社半田營業所、大日本麥酒株式會社半田工場

半田大本營と御野立所

（半田町）

明治二十三年三月縣下に陸海軍聯合大演習の行はれた際、明治天皇には半田町字北條小栗富次郎方を大本營として同月三十日御泊輦あらせられた。

舊館主要建物は昭和五年雁宿公園内に移築されたが、阯地は今中埜産業合名會社敷地内に其のまゝ保存されてゐる。

御野立所は同三月三十一日畏くも雨中に立たせられて御觀戰遊ばされたところで衣ヶ浦を雙眸に收める景勝の丘上にあつて孰れも今史蹟に指定されてゐる。

龜崎町

武豐線　龜崎驛

衣ヶ浦に臨む人口一萬六千の都邑である。産業の主なるものは織物、清酒、大豆粕等でその生産額は九百七十萬圓に達するが、就中織物最も盛で綿織物の如きは六百八十五萬圓に上つてゐる。

また龜崎港に於ては一年間三百四十萬圓の移出入が行はれてゐる。

主なる工場、會社

合資會社山田商店、合資會社新見商店、伊東合資會社、日清製油株式會社龜崎工場

縣社神前神社と乙川御野立所

（龜崎町）　武豐線　龜崎驛

神前神社は神武天皇の御遺蹟として、往古安曇氏が神倭磐余彦尊を奉祀したと傳へる社である。境内は古松多く月見の地として、三月十五日の潮祭と共に古來有名で、境内には月見亭が設けられてゐる。

大正の悠紀殿御屏風の四季の一景は此の境内を野口小蘋の筆に依つて描かれたもので、其の歌は

萬代もかはらぬかけをかめ崎の
なみにうかへて月てりにけり

乙川御野立所は明治二十三年三月三十一日、明治天皇には畏くも篠を亂す猛雨の中を馳驅あらせられ、暫時當所に御馬を立たせ給ふて陸海軍大演習を御統監あらせられた。今史蹟に指定せられてゐる。

大府町

東海道線　大府驛

人口一萬一千を有し、東海道本線より武豐線を分岐する交通上の重要地點を占めてゐる。

産業の主なるものとしては農産の八十萬圓、工産の五十萬圓、畜産の十七萬圓がある。

主なる工場、會社

森織布株式會社、愛知トマト製造株式會社工場

有松絞（有松町）

名古屋線　有松裏驛

有松絞作業狀況

有松町は人口二千四百を有し、古來有松絞の名に依つて著名である。

有松絞は慶長年中武田庄九郎の創始したもので、時代の好尚に適し藩主の保護をうけて逐年發達し、殊に元祿の華奢な世を迎へては奇拔な模樣染など考案せられて一段の精巧を加へた。その後盛衰もあつたが近年意匠の考案、品質の改良等に努めた結果その業績著しく上り、販路も擴張せられて現在年産額は二百二十餘萬圓に達してゐる

昔より千代の契りや有松の
千しほ八千しほくゝりそめけん　秀鷹

大高町

東海道線　大高驛

人口五千を有し、土曰、ソース、ケチヤツプ、清酒等を産出するが、殊にソースの製造盛で、その生産額は全國の八割を占めてゐる。

附近には鷲津、丸根の二砦や大高城阯など桶狹間戰役に關係深い史蹟があり、氷上山には宮簀姫命を祀れる熱田神宮の攝社氷上姉子神社がある。

主なる工場、會社

大日本紡績株式會社大高工場、日本トマト製造合資會社

横須賀町

名古屋線　尾張横須賀驛
知多線　太田川驛

伊勢灣に臨む人口一萬の都邑である。この地は寛文年間二代藩主光友が潮湯治の爲め別邸を設けて以來繁榮したといはれ、今に市況盛で產業の主なるものとしては工產の二百七十萬圓、農產の七十萬圓、水產の三十萬圓がある。

主なる學校、工場、會社

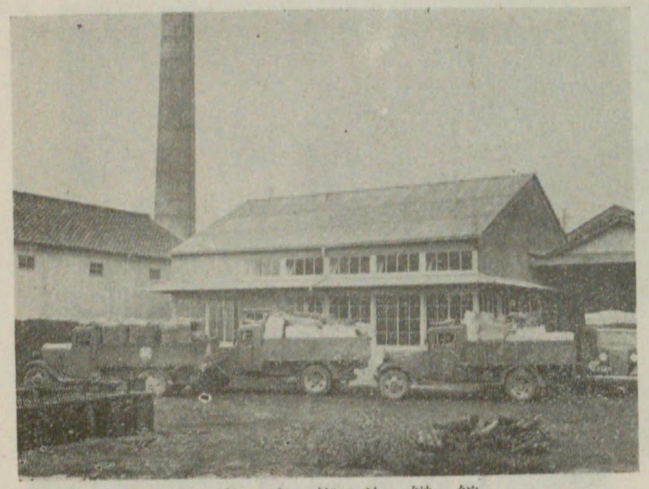
横須賀警察署、横須賀高等女學校、大津屋株式會社工場、雀印織布合名會社

八幡町

名古屋線　古見驛

人口一萬の都邑で產業は工業の六百二十萬圓、農業の六十萬圓、水產の五十萬圓等その主なるものである。就中工產中綿織物殊に盛で年產額は五百萬圓に達せんとしてゐる。

岡田町



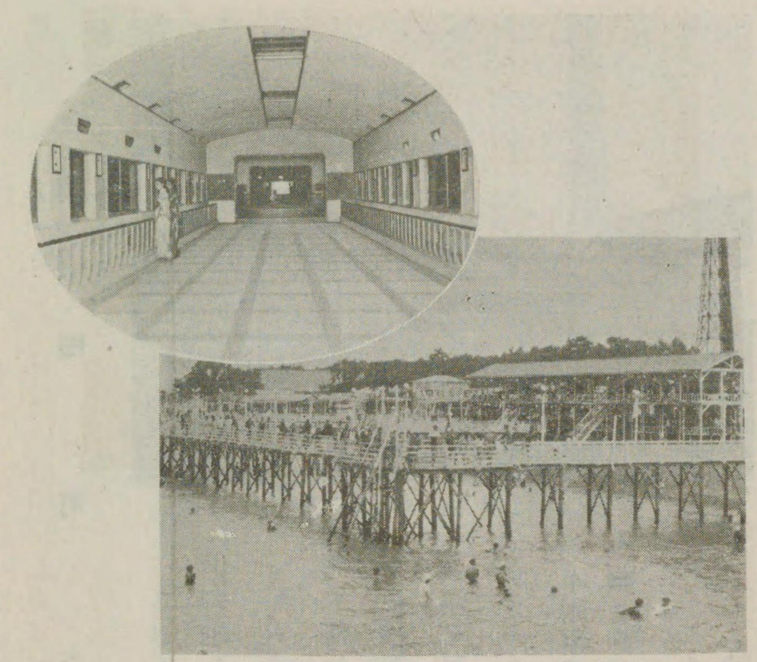
綿織物搬出狀況

名古屋線　古見驛＝乘合自動車

人口五千を有し、知多木綿の主要產地として知られてゐる。その起原は明らかでないが、遠く慶長頃の創業と謂はれ、現在に於ては知多晒、岡木綿、捺染岡、金巾、天竺、細布等の產出多く、その生產額は二千萬圓を超えてゐる。

主なる工場、會社

中七木綿株式會社、中央木綿株式會社、岡田織布株式會社



新舞子海水浴場と水族館の一部

大野・新舞子海水浴場

附水族館

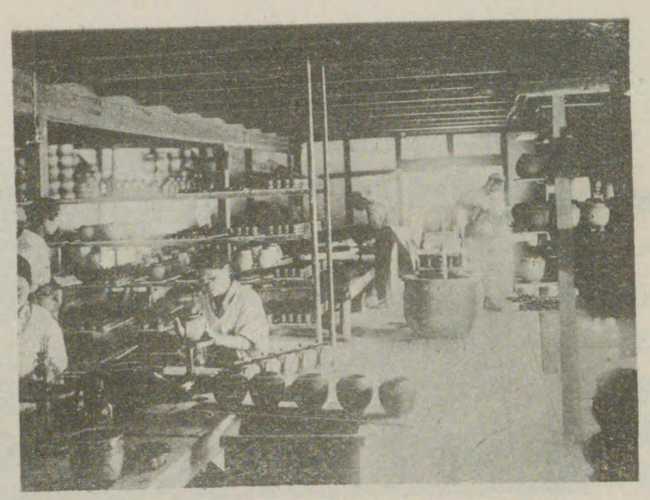
（大野町・旭村）

名古屋線　新舞子驛
大野驛

大野及び新舞子の海岸は所謂青松白砂の長汀で、紺青の波上遙か鈴鹿の連峰を望み其の風光は佳絶、波は靜かで遠淺をなし海水浴場として都人士の人氣を集めてゐる。

水族館は東京帝國大學農學部附屬新舞子水産實驗所内に

在る。昭和十一年七月實驗所の開設と共に開館したもので、科學の粹を蒐むる設備と規模の壯大を誇り、大小百三個の魚槽に淡水魚、鹹水魚、熱帶魚等約二百種を放養して一般に有料を以て公開してゐる。



陶磁器製造狀況

常滑燒（常滑町）

名古屋線　常滑驛

常滑燒は常滑町を中心に北は鬼崎村、南は西浦町附近より産出する陶業品の總稱で、その起原は遠く天武天皇の朝僧行基の創始にかゝると謂はれてゐる。

その後總心寺の住持青利なる者鐵砲窯を發明し、天保五年には鯉江方壽が眞燒窯を創造した。現在の登窯は之に多少の

改良を加へたものである。爾來製陶業は著しく發達したが、明治五年に至り鯉江高司が土管を創製して斯業に一段の進展を加へた。越えて同三十三年常滑陶器組合の事業として歐洲式石炭窯を築造したが、間もなく伊奈初之亟は石炭窯と眞燒窯を折衷する新窯を築いて燃料の節約に成功し、次いで澤田四郎兵衞が小規模の鼈窯を築いて從來の大窯、眞燒窯の如き共同使用の不便を除くなど種々な改良が加へられてよく今日の盛大を致した。その主なるものは陶磁器、陶管、瓶、甕、火鉢、タイル、テラカッタであるが、內陶磁器、陶管のみでも年額五百萬圓を超え、その林立せる煙突と煤煙はよく斯業の活動を示してゐる。

主なる學校、工場、會社

愛知縣常滑工業學校、常滑實科高等女學校、伊奈製陶株式會社、陶榮株式會社、常滑製陶株式會社、常滑合同運送株式會社、日本陶業株式會社

鵜ノ山の鵜蕃殖地

（小鈴谷村大字上野間）　名古屋線　河和口驛＝乘合自動車

鵜ノ山繁殖地に於ける鵜の棲息狀態

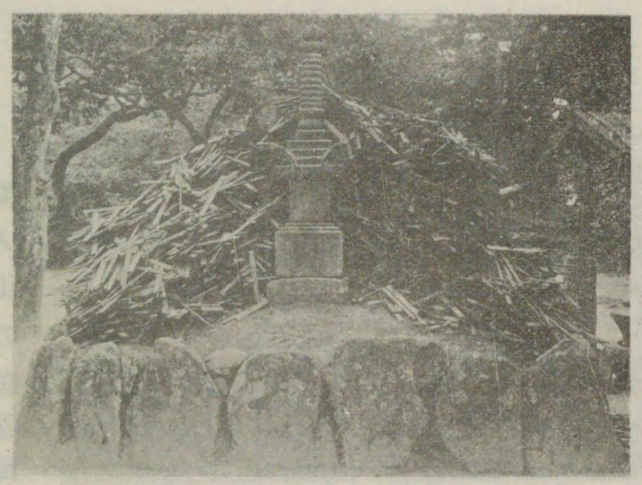
天保初年以來鵜の生息地で、季節によつて其の數に增減はあるが、最も多きときは三千羽を超える。これ等の鵜は二町歩の松樹林を塒として、西浦及東浦の海に、又風波の荒い時は近接の池に餌を求め、毎年二千羽に餘る雛が蕃殖し奇觀を呈する。いま天然紀念物に指定されてゐる。

大御堂寺（野間村）

武豐線　武豐驛＝乘合自動車

俗に大坊と稱せられる眞言宗の寺で、天

武天皇の御代の創建にかゝり、白河天皇の承暦年中に勅願寺となつて大御堂寺と命名されたと傳へられてゐる。吾妻鏡に依れば平治の亂に長田忠致に弑せられた源義朝の墳墓が荊棘の掩ふ所となつて人の訪ふものなきを悲しみ、平康頼が水田三十町を寄附し、小堂を建立してその冥福を祈つた。次いで源頼朝は平家を滅ぼすに及び、文治六年亡父の墓に詣ふで、菩提の爲めに大法要を營んで七堂伽藍を建立し、父の靈を慰めたといふ。その後享祿四年と慶長五年の再度兵燹にかゝり荒廢したが、藩祖義直の時に至つて大修理が加へられた。



源義朝の墓（堆く積まれたるは奉納の木太刀）

寺寶に此の寺の由緒を物語る義朝最期之圖二幅がある、之は元和年中義直が狩野探幽に命じて畫かしめ、自ら其の繪解を書いて寄せたものであるといふ。

境内に源義朝、鎌田政清夫妻、織田信孝等の墓があり、附近には義朝及び長田父子關係の史蹟がある。

内海町と其の附近

名古屋線　河和口驛＝乘合自動車

内海町は六千の人口を有し、夏季は海水浴に、キャンプに賑ひ附近には愉快なサンドスキー場や礫浦の勝地がある。

礫浦は翠松茂る山を負ひ、遙か伊勢の連峰、菅島、神島、伊良湖岬を雲煙の間に眺める景勝の地で、天照大神が戯れに此の地に投げさせ給ふたとの傳説をもつ百

礫浦の礫岩

餘個の礫石が二百數十米に亙つて點在してゐる。之は半島地層の基底をなす花崗岩や片麻岩が風化して生じた礫を第三紀時代に粘土を以て膠結し、此の礫を含む頁岩を生じたものであらう。

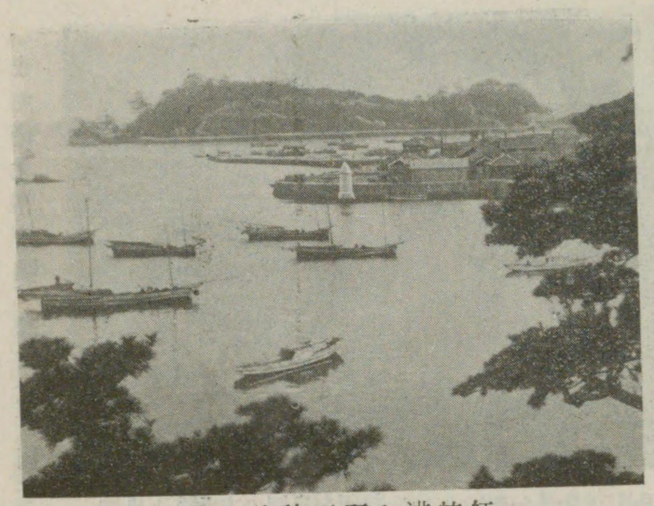
サンドスキー場は眞白な微粒の硅砂から成る標高六十五米の砂丘で、緩急さまゞ〳〵のスロープや變化あるレースコースがあり、四季を通じてスキーの快味を享樂することが出來る。

豐濱港

（豐濱町）　名古屋線　河和驛

彎狀をなす須佐灣内の良港で、伊勢海に於ける唯一の避難港をなし、また寶飯郡三谷港、渥美郡福江港と共に縣下三大漁港と云はれる。

此の地の漁業は凡そ百年前、師崎の海上奉行千賀志摩守が打瀨網を此の地に試みて以來著しく發達したもので、現在漁獲高は三十餘萬圓に達し附近には養漁池の設備がある。



師崎港と羽豆神社々叢

鄕社　羽豆神社と羽豆城阯

（師崎町）　名古屋線　河和驛＝乘合自動車

建稻種命を祀る延喜式内社で、社傳に依れば白鳳年中の鎭座といふ。社地は半島の最南端に突出して三面海に臨んでゐる。

社叢は、樹木に觸るれば神罰を被るといふ傳說もあつて嘗て斧鉞の加へられたことなく、全山「うばめがし」よく繁茂し、それが潮風を受けて姿態面白くさながら樹枝のトンネルを見る奇觀がある。その間「いぶき」の自生するものがあり、又暖地性海岸植物も生育して附近の山相とは全く趣を異にし、いま天然紀念物に指定されてゐる。

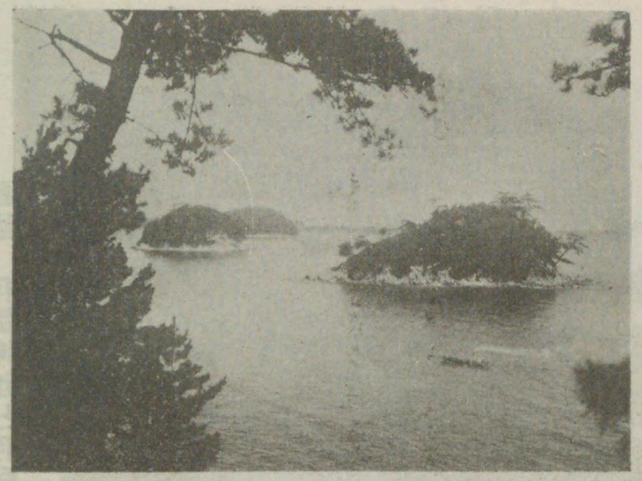
また南北朝の頃、熱田大宮司千秋季氏が此の地に羽豆城を築いて王事に勤め、南朝方の策源地として活動したことは著名であるが、其の遺阯は明らかでない。今境内に羽豆城阯の碑が建てられてある。

神のます羽豆のみさきの磯邊には
浪のしらゆふかけぬ日そなき　成昌

篠島（篠島村）

名古屋線　河和驛＝乘合自動車＝渡船

師崎の海上四粁のところに横はる周回一里、人口二千五百の小島で、史蹟と風光の美によつて著名である。此の島は初め伊勢國に屬し神宮の所領であつたが、後ち尾張國に屬した。



篠島より北方の屬島を望む（手前より小磯・小手・築見の諸島）

往時は海上の驛路として繁盛し、平安朝の頃從五位上篠島王居住して地方政治が行はれ、當時坂上田村麿來つて築城を謀議したが、その擧に及ばなかつたと傳へられてゐる。南北朝の頃、後村上天皇が未だ親王でお在しませし延元三年九月伊勢の大湊から出帆せられて東國に向はせらるゝ途上、颶風の爲に親王の御船は此の島に漂着し姑く御滯留あらせられたといふ。遺蹟は今東山の丘上に在つて篠島聖蹟の標柱が建てられてゐる。また親王が命じて穿たしめられたと傳へる井戸は四方切石を以て圍み、傍に帝井碑が建てられてある。尙他に石器時代、古墳時代の遺蹟や清正の枕石、室町末期の青石塔婆等がある。

この島をめぐり木島、築見島、中手島、小磯島、野島、廣龜など碧瑠璃の盤上に浮び、その間に往き交ふ眞帆片帆が一段と風光の美を添へる。

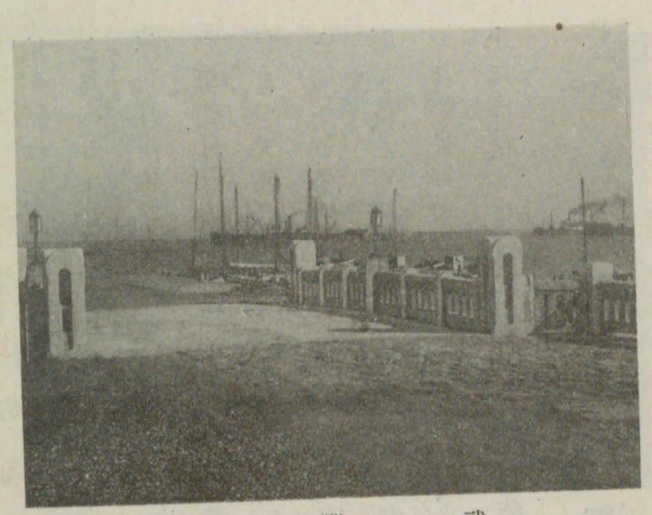
武豐町

武豐線　武豐驛

人口七千を有し、製材、火藥製造、土管製造等各種の工場多く、大小の煙突

林立して他の都邑と異る雰圍氣が漂つてゐる。産業は工業を主とし生産總額は二百餘萬圓を超えてゐる。

この港は名古屋港と共に本縣に於ける開港場である。最近に於ける出入貨物の主なるものは穀物、石炭、木材、爆發物、礦油、肥料等で、其の總價額は三千萬圓を超え、また出入の船舶數六千五百餘隻、其の噸數五十八萬噸に達してゐる。



會社工場

武豐港

主なる官公署、會社、工場

國立蠶業試驗場武豐支場、蠶業取締所武豐支所、吉中醬油株式會社、帝國火藥工業株式會社武豐製造所、合資會社丸文商店、日本陶業株式

長尾山の聖蹟

（武豐町大字迎戸）　名古屋線　知多武豐驛

長尾山は武豐驛の西約五百米の地點、標高三十二米の岡丘で、衣ヶ浦を一眸に收むる勝地である。

聖蹟は陵腹に在る鳳翔閣と頂上の御野立所とで、明治二十年二月二十三日畏くも明治天皇、昭憲皇太后兩陛下行幸啓あらせられ、御晝餐、御少憩の後ち山頂に玉歩を枉げ陸海軍對抗演習を叡覽遊ばされた所である。また皇太子にあらせられた大正天皇には同二十四年八月二十二日伊勢の二見港より還御の際と三十四年六月八日近海御順航の際と、再度此の地に行啓あらせられ、鳳翔閣にて午餐を召されるなど屢々光榮に浴した聖蹟で、今史蹟に指定されてゐる。

御心にかなひますらん長尾山
はるの霞のかゝる景色は

杉皇后宮太夫

成岩町

名古屋線　成岩驛

半田町の南に接續する人口一萬四千の都邑で、産業は工業を以て第一とする。その主なるものは綿織物、製麥粉、清酒、味噌、油類で總生産額は七百萬圓を超えてゐる。また商業は近年交通機關の整備するに伴つて著しく活氣を呈し、養鷄飼料の取引の如きは年額五百五十萬圓に達して全國第一と稱せられる。

主なる學校、工場、會社

愛知縣知多高等女學校、株式會社竹内商店、北村木綿株式會社、尾張製粉株式會社

碧海郡

安城町

東海道線　安城驛
碧海線　南安城驛

此の地はもと荒寥たる一寒村に過ぎなかつたが、明治十八年明治用水の完成以來農業方面に於て各種の施設が行はれると共に交通の利便も得て急激な發展を遂げ、僅か半世紀の間に人口二萬四千を算して一躍郡内の首邑となつた。主要農産物たる米、麥、果菜の年産額は二百五拾萬圓に達し、副業とする養鷄の收益は三十萬餘萬圓を下らず、また三河西瓜、三河梨の生産額もその聲價と共に昂められつゝある。

尙此の地の農業施設が恰も北歐の丁抹に相似するといふので、各地から毎年二萬餘人の視察者が吸引されてゐる。

主なる官公署、學校、銀行、會社

安城警察署、安城財務出張所、愛知縣農事試驗場、蠶業取締所安城支所、愛知縣安城農林學校、愛知縣青年學校教員養成所、愛知縣安城高等女學校、安城女子專門學校、安城碧海女子職業學校、株式會社碧海銀行、株式會社碧海貯蓄銀行、愛知乾繭倉庫株式會社、帝國製絲株式會社、愛三製絲株式會社

安城の農業（安城町）

今日日本デンマークの名によつて普く天下に紹介された碧海郡農業の中樞をなせる安城の農業の特色は、所謂多角形農業で、その經營が組織的且つ共同的なることにあるが、その根幹をなすものは實に勤勞的精神である。明治十八年明治用水開鑿事業の完成以來、此の精神はよく荒漠の地を美田となし、時代の進運に伴つて今日の發展を見るに至つた。而して之が指導的生産機關としては安城町農會があり、また經濟機關としては部落の産業組合がある。

即ち同農會に於ては一、組織的なる事、二、合理的なる事、三、共同的なる事、四、自助的なる事の四大綱領に則り、農家をして米麥作を中心に、養蠶、養豚、養鶏及び西瓜、蕃茄、大根、梨等の栽培並に是等農産物の加工をも併せ經營せしめて勞力の分配、收入の均等を圖ると共にその基礎團體たる部落の農事改良實行組合をして自覺的助長に努めしめ、又部落の産業組合とも連携し、互に運用することによつて斯業の助成向上につとめてゐる。

安城の農耕狀況

隨つて安城の農業を知らむとするには一に農會と産業組合の施設に據らねばならない。

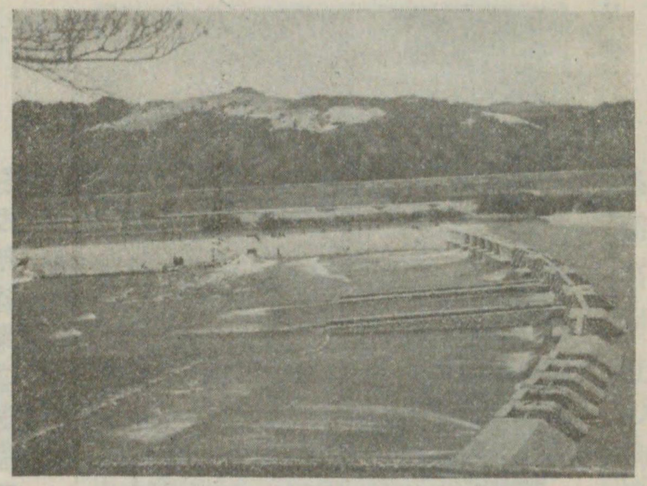
現在農會は四千百五十名の會員と六名の職員を有し、二萬圓の經費を以て普通農事を奬勵する外、農業青年の指導、農

民精神の訓練、農繁期托兒所の設置、農業圖書館及農道館の經營等の諸事業を行つて目的達成に努めてゐる。

又産業組合は極めてよく發達し、毎部落に組織せられて今やその數十三を算へ、組合員は二千八百餘名に達してゐる。尙本組合は信用、販賣、購買、利用等の組合をも兼ね諸般の施設は遺憾なく整備してゐる。

明治用水

本郡は概ね平野をなすが水利に乏しく乾燥甚だしきため、農民の困苦は實に名狀し難いものであつた。文化の頃、明治村の都築彌厚が西加茂郡猿投村から矢作川の水を分派する計畫を建て幕府に申請して天保三年工事に着手したが、翌年病に殪れてその計畫は中止せられた。かくて明治に至り明治村の農岡本兵松、伊與田與八郎が彌厚の計畫を踏襲して之を遂行せんと企て、明治十二年工事に着手し、西加茂郡擧母町大字今に取入口を設けて十七年六月全部の完成を見たのである。幹線は高濱に至る本線と刈谷に至る西線と米津に至る東線の三線であるが、その支渠を合すれば延長四十餘里に達し、往年の不良土は概ね美田と化して、灌漑面積は現在一萬町歩に亜んとしてゐる。



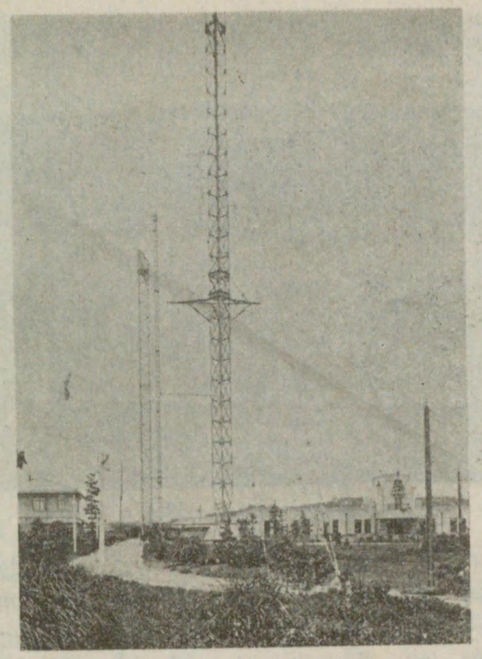
明治用水々源地　（所在地西加茂郡擧母町大字今）

明治十八年關係町村の農民は安城町大字今に明治川神社を創立し、高靈産神並水分神を祭神として彌厚始め明治用水開鑿の功勞者を合祀し、同四十二年鄕社に昇格した。

傍の東海道松並木の間には彌厚の偉功を不朽に傳へんとする記念碑がある。

對歐無線電信送信所

（依佐美村）　三河線　小垣江驛

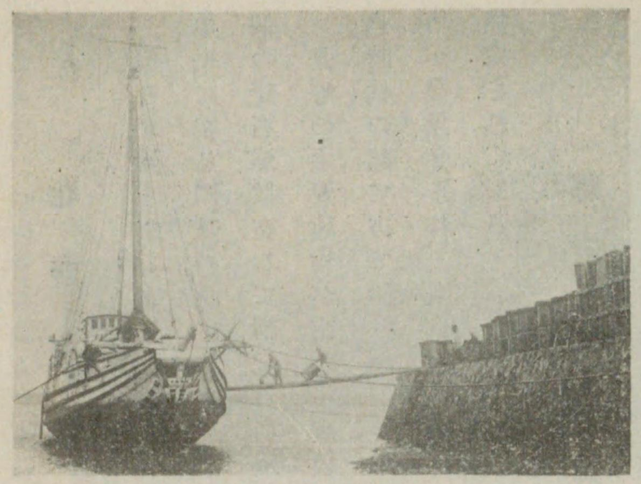


對歐無線電信依佐美送信所

此の送信所は三重縣四日市受信所と相呼應して歐洲の大無線電信局と直通無線通信を行ふ本邦唯一のものである。長波長送信裝置一組と短波長送信裝置五組の設備があつて、名古屋郵便局外信課の電氣裝置による操作運用により二百五十米の鐵塔からロンドン、パリ、ベルリン、ワルソー、ジュネーブ、ローマの各直通々信局に向つて電波が送りだされるのであるが、二列八基の大鐵塔は高さに於て東洋一を誇るものである。

高濱町附近の陶業

三河線　高濱驛



高濱に於けるる土管積出狀況

高濱町始め新川町及大濱町に於ける陶業の隆盛は近世のことであるが、製瓦は比較的古い事で餘業として焜爐、土鍋等も製出されてゐた。明治維新後に至りこれ等製品は需要の範圍を遽かに擴めて遂年產額を增加し、現在は瓦、土管など最も盛に製出せられ、生產額は二百六十五萬圓に上つてゐる。尙新川町の銅燒は一見古銅器と紛ふほど精巧なものである。

北野廢寺阯

（矢作町大字北野）　名古屋線　矢作驛＝自動車

南を正面とする方二町餘の境域の周圍には僅かに土壘が殘つてゐる。正面の中央に在る門阯の北には巨大な塔心礎及金堂の土壇が殘り、更にその北には數個の礎石が散在して講堂の名殘を留めてゐる。

是等の主要建物が南北一直線上に配置されたことは、大阪の四天王寺式の飛鳥時代の建て方で餘り類例を見ないものである。尙寺阯から珍らしい磚佛や土塔が發見せられ、奈良朝の頃巨大な寺院の在つたことが偲ばれる。いま史蹟に指定されてゐる。

縣社　知立神社

（知立町大字知立）　名古屋線　知立驛

鷓鴣草不葺合尊を祀る延喜式内社で、蝮除けの神符の出る社として有名である。仲哀天皇元年の創建と謂はれる三河の大社であるが、天文十六年戸田直光の兵燹と元龜元年の火災に遭つて一時甚だしく衰頽した。其の後刈谷城主水野信元之を再建し、元和二年には水野忠清が修覆して今に至つてゐる。永正六年建立の多寶塔は幾度かの災厄を免れ、いま國寶に指定されてゐる。

知立神社境内

八橋

（知立町大字八橋）　三河線　八橋驛

この地は往昔官道に當つて野路の宿と稱し、北を流れる逢妻川は幾筋かの細流であつたといふ。

仁明天皇の朝、一人の寡婦が此の川の邊りに來て、海苔を採らんと對岸に渉つた。後に殘された二兒は母を慕ひ誤つて

溺死したので、母は悲嘆の餘り尼となり、衆人の通行の利便と愛兒供養のために此處に八つの橋を架した。之から地名も八橋と謂はれたと傳へてゐる。

伊勢物語に『その澤に燕子花（かきつばた）いと面白く咲きたり、それを見てある人の曰く「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて旅の心を讀め」といひければよめる

からころもきつゝ馴れにしつましあれば
はるばるきぬるたびをしぞ思ふ

と詠めりければ云々』とあることからかきつばたの名所ともなつた。

其の後官道が變り、宿驛が知立に移つて後も八橋の故事と共に杜若は著名で、永く詩歌や繪畫の題材として人口に膾炙せられた。今無量壽寺境内の園池にその名殘の杜若がある。

さゝかにの蛛手あやふき八はしを
ゆふぐれかけてわたりぬるかな

阿佛尼

刈谷町

東海道線　刈谷驛
三河線　刈谷町驛

近時東海道線と三河鐵道がこの地に會し交通機關の完備すると共に貨物の集散に著しき進展を示したが、工業方面にも一大躍進を遂げて大工場は至る所に設置せられ、今や人口二萬を算して純然たる商工都市となつた。

工業の主なるものは自動織機の八百萬圓、綿織物の六百萬圓、綿糸の六百萬圓、紙製品の六十萬圓等で、その生産總額は二千三百七十萬圓に達し、本町總生産額の九割八分を占めてゐる。

最近に於ては國産自動車の製作も開始された。

主なる學校、工場、會社

愛知縣刈谷中學校、愛知縣刈谷高等女學校、刈谷高等裁縫女學校、中央紡織株式會社、豐田紡織株式會社刈谷工場、株式會社豐田自動織機製作所、三河鐵道株式會社、泉合資會社、太田商事株式會社、東海紙袋株式會社

刈谷城阯

（刈谷町大字刈谷）　三河線　刈谷町驛

刈谷城はまた龜城とも云はれ、天文二年水野忠政が知多郡緒川城から移住して初めて築城に着手し、その子信元に至つて竣成したものである。桶狹間の戰後信元の弟信近が此の城を守つて織田氏に通じたため駿河勢に攻められて戰死したが、兄信元は再び之を奪ひ還した。然るに織田信長は佐久間信盛の讒を信じて天正三年德川家康に命じて信元を殺さしめた。それより此の城は信盛の領するところとなつたが、天正八年に信元の季弟忠重に附與された。忠重の歿後は嫡子勝成、次子忠清、相次いで相續したが、軈て忠清吉田に轉封の後は松平、稻垣、阿部、本田、三浦等の諸氏相代つて之を領し、延享四年土井利德西尾城から移つて二萬三千石を食む。爾來世々相繼いで維新に及び、明治四年廢墟となつた。

幡豆郡

西尾町

名古屋線　西尾驛
碧海線　西尾驛

舊時の城下を中心に發達した町で、現在一萬九千の人口を擁する郡内の主邑である。近時交通機關の整備と共に商工業は著しく發達した爲め、貨物の集散常に夥しく市況頗る盛である。工業は織物を第一とし其の產額は三百八拾萬圓を超え本町總生產額の七割五分を占めてゐる。特產物としては西尾茶と西尾燒がある。茶の栽培は古く元祿時代から行はれ、その精製品は宇治、靜岡に拮抗すると謂はれてゐる。尙大字上町字八王寺に繩文土器の出土する貝塚がある。

主なる官公署、學校、圖書館、工場、會社

西尾警察署、蠶業取締所西尾支所、愛知縣西尾中學校、愛知縣西尾蠶絲學校、愛知縣西尾高等女學校、岩瀨文庫、合資會社鳥山呉服店、天桂織布株式會社、西三織布

株式會社、吉見合資會社

西尾城阯

（西尾町）

鎌倉幕府の時吉良の祖足利義氏此地に來り、城を創築して城下を西條と稱した。爾來子孫相繼いで十五代三百四十餘年間吉良氏の居城であつたといふ。

永祿三年今川氏眞牧野成定をして之を守らしめたが、家康に追はれて城は家康の臣酒井政家の領する所となり、西尾と改稱した。

次で岡崎城主田中吉政之を兼有し、其の後本多、松平、本多の三氏を經て寛永十五年太田氏城主となり、井伊、增山、三浦と城主を替へ、明和元年松平乘祐が山形から移つて六萬石を領し世襲して維新に至つた。

城阯には御劔八幡宮鎭座し、一部は今公園となつてゐる。

平坂町

名古屋線　平坂驛
三河線　三河平坂驛

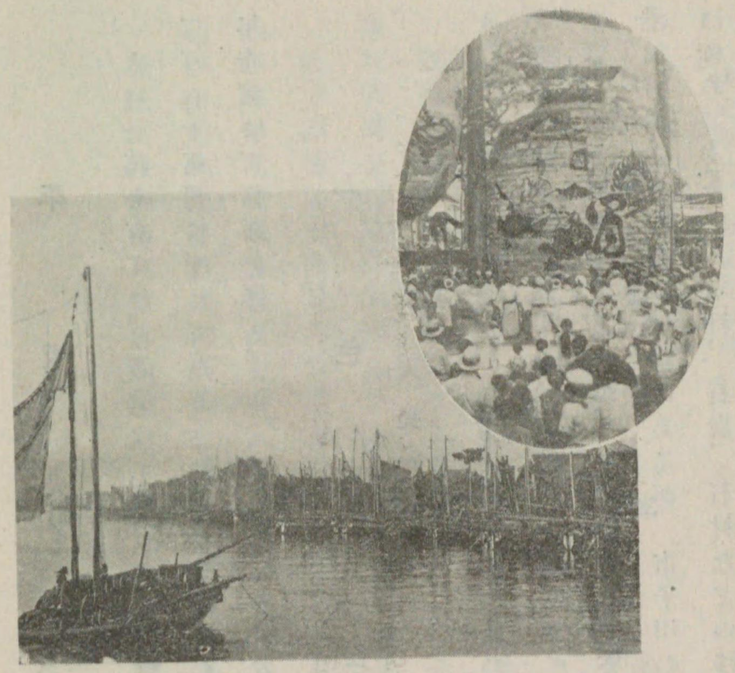
人口一萬を有する。產業は工業、農業、蠶業を主なるものとし、總生產額は三百六十萬圓に達してゐる。就中工業は最も盛で、鑄物の製造殊に多く、その年產額は百萬圓を超え、和式紡績の如きも五十萬圓に上つてゐる。

一色町

附　大提灯祭

三河線　三河一色驛

人口一萬七千を有し、地方に於ける物貨の集散地として市況は活氣を呈してゐる。產業の主なるものは漁業の一百萬圓、農業の九十萬圓、蠶業の八十萬圓、工業の七十萬圓等であるが、この他製鹽業亦盛でその年產は十數萬圓に及ぶ。港は海岸より二粁の地點にあるが、市子川の入江を利用するため船舶の碇泊には極めて安全で、木材、石炭、石材などの移入が行はれてゐる。



一色港と大提灯祭

毎年八月廿六、七の兩日郷社諏訪神社で行はれる大提灯祭はもと海魔除けの大篝火から起つたと謂はれ、當日町内六つの各組から二張宛の彩色せる大提灯が献燈されるのであるが、各組は常に提灯の大を競ひ、遂に今に見る直徑三間半、長さ五間半の大提灯となつた。夏の夜祭として屈指のものである。

天竺社

（福地村大字天竺）　名古屋線　一色口驛

此の地は今矢作古川の堤の下にあるが、往古は海濱であつたと傳へられてゐる。

天竺神

延暦十八年七月何れの國の者とも知れない異様な服装の一人の男が、小船に乘つて此の地に漂着した。年齢は二十計りで身長五尺五寸自ら天竺人と稱して常に一弦琴を彈じて哀れな聲で歌つてゐた。その荷物の中から綿の種子を發見して之を植栽したのが我が國に於ける棉栽培の最初で、やがて三河木綿の起原をなしたといふ。

後世里人がこれを新波陀（にはだ）の神として社を建て天竺社と稱した。

金蓮寺

（横須賀村）　名古屋線　上横須賀驛

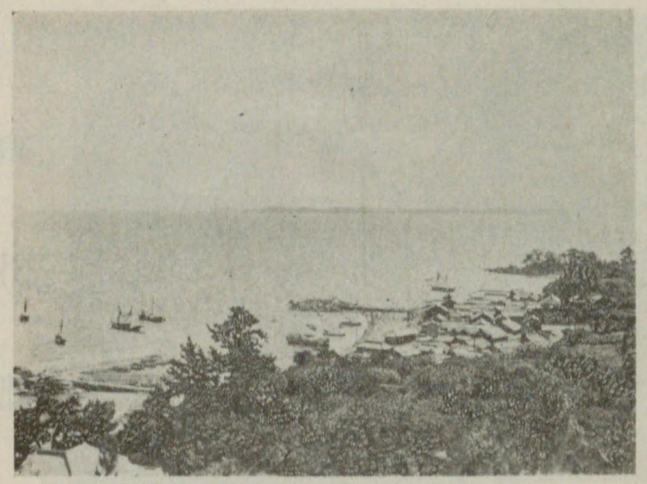
もと眞言宗であつたが、後ち曹洞宗に轉じた。

文治年間の建立と傳へる三間三面の阿彌陀堂は所謂三河七御堂の一で、いま國寶に指定されてゐる。鎌倉時代の建築として貴重なものである。三河七御堂とは寶飯郡八幡村の財賀寺、同大塚村の丹野御堂、同蒲郡町の長泉寺、南設樂郡鳳來寺村の鳳來寺、豐橋市の赤岩寺、渥美郡二川町の普門寺と此の寺で、何れも賴朝の命を奉じて地頭安達藤九郎盛長が造營したと謂はれてゐる。

吉田町

名古屋線　吉良吉田驛
三河線　三河吉田驛

未だ交通不充分の時代には水運によつて僅かに物資の集散が行はれるに過ぎなかつたが、鐵道の敷設せられて交通機關の整備するに隨ひ商況は漸次活氣を呈するに至つた。現在人口七千を有し、産業は農業、水産業最も盛で總産額一百萬圓を超えてゐるが、内製鹽は此の地の特殊産業として知られてゐる。



宮崎海岸

吉田港は矢崎川の河口にある關係上、三河灣唯一の避難港として殊に暴風時に於ける船舶の輻輳夥しく、また風光美を以て知られる宮崎海岸は潮水清澄な海水浴場として古くから著名である。

附近には海に面して山腹に建稲種命を奉祀せる縣社幡頭神社がある。その本殿は三間社流造の室町時代の建築で、今國寶に指定されてゐる。

額田郡

瀧山寺本堂

瀧山寺（常磐村大字瀧）

名古屋線　東岡崎驛＝乘合自動車

朱鳥年間の創建と謂はれ、嘗ては七堂伽藍を具備し多くの僧坊を有する天台宗の巨刹であつたが、今は仁王門、本堂其の他二三の堂宇を存するのみである。貞應元年の再建といはれる五間五面の單層四注造の柿葺の本堂（藥師堂）と文永四年の建立と傳へる三間一戸樓門（仁王門）とは鎌倉時代に於ける優秀なる建築で、孰れも國寶に指定されてゐる。

もと境内の東照宮は將軍家光の建立にかゝる所謂權現造丹青塗の莊麗なもので、いまは獨立して鄕社常磐神社となつてゐる。社寶の德川家光寄進の銘長光の太刀、德川家綱寄進の銘正恒の太刀は今國寶に指定されてゐる。

大樹寺多寶塔

大樹寺（岩津町大字鴨田）

三河線　大樹寺驛

淨土宗鎭西派に屬し、舊寺領七百石を有した巨刹である。文明七年岩津城主城主松平親忠の創建で勢譽上人を開基とした。爾來松平氏代々

の菩提所並に祈願所となり、天文三年松平清康七堂伽藍を造營し、寛永年間德川家光更に之を修築したが、安政二年火災に罹り、其の多くが烏有に歸した。現在の建物は多寶塔と樓門を除いて他は悉くその後に建造されたものであるが、その多寶塔は天文四年清康の建立といはれ今國寶に指定されてゐる。其の他寺寶には寺僧祖洞が家康の爲に敵兵を追ひ拂つたといふ大貫木を始め德川關係のものが多く、又書院の襖繪は全部冷泉爲泰の筆になれるもので、世に知られてゐる。

寺域内には親忠以下清康に至る三河八代の墳墓がある。

信光明寺

（岩津町大字岩津）　三河線　岩津驛

淨土宗に屬し、維新前には百二十石の寺領を有した。文明十年の建立にかゝる三間三面の入母屋造柿葺の觀音堂は今國寶に指定されてゐる。

寺内には德川氏の祖岩津城主松平信光の墓があり、高月院、大樹寺と共に松平氏の菩提所として由緒深い寺である。

眞福寺

（岩津町大字眞福寺）　三河線　岩津驛＝自動車

聖德太子の創建と傳へる天台宗の古刹である。本尊は藥師如來で、本堂には推古天皇の御宇本尊の出現したまひしといふ靈泉がある。舊時は三百石の寺領を有し、境内廣く今尙伽藍は整備してゐる。堂前には永祿元年在銘の鰐口が懸けられ、寺寶には古い時代の本尊とも思はれる塑造の佛頭等がある。

西加茂郡

擧母町

三河線　擧母驛・上擧母驛

人口一萬四千を有し、交通の發達と共に工業は漸次發展の傾向を示しつゝあるが、依然蠶業と農業盛んでその生産總額は二百三十萬圓に上つてゐる。また西郊の砂山から産出される浮石砂は年産額六百萬貫に達する。

この地は往昔衣の里と稱し名勝の地であつたといひ、これに關する詩歌の殘されたものが多い。

立かへり猶見てゆかんさくらはな
　衣の里ににほふさかりは　　具氏
夜をかさね深山立出てほとゝきす
　衣の里にきつゝ啼なり　　爲盛

主なる官公署、學校、會社

擧母警察署、蠶業取締所擧母支所、安永川沿岸排水改良事務所、擧母土木工區事務所、愛知縣擧母高等女學校、西加茂製絲株式會社、東海絹糸株式會社

擧母城阯（擧母町）

等しく擧母城といふが時代に依つて位置を異にし、中條氏時代、慶長寛延時代、安永以後と三回に亘つて城地の變更が行はれた。

最初の中條氏時代は大字金谷字外鍛で延慶年間中條景長此の地に築き、その子秀長以下數代相續いで居城したが、後ち織田信長の有に屬し、永祿四年佐久間信盛の兼有する處となつた。城阯は鐵道工事の爲めに舊態を失ひ僅かに濠の形が殘つてゐる。

慶長九年三宅康貞此の地に封を受けて大字擧母字舊城に居住し、後ち木多忠則を經、寛延二年内藤政苗が上州安中から移つて二萬石を領し其の舊地に築い

て居城したが、安永五年その子學文が宇童子山に新城を築き之に移るに及んで廢墟となつた、今尙櫓臺、石垣等現存して其の遺構が見られる。學文の築いた新城は政俟、政成、政優と相繼ぎ維新に至つて廢せられたが、其の城趾には土壘や櫓臺が現存し、濠は水田となつてその面影を留めてゐる。

長興寺

（擧母町大字長興寺）　三河線　上擧母驛＝自動車

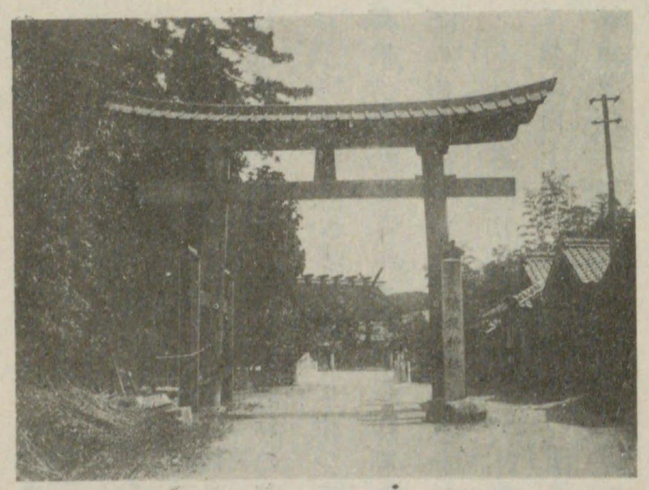
建武二年領主中條秀長の創建と稱し、臨濟宗に屬してゐる。もと塔中十八院を有し輪奐の美を盡せる巨刹であつたが、永祿の兵亂に灰燼となつたので織田信長が其の臣與語正勝に命じて再建せしめたと謂ふ。

寺寶の內絹本着色涅槃圖一幅は紙本着色織田信長畫像と共に今國寶に指定されてゐる。信長の畫像は其の風貌を窺ふものとして普く世に知られてゐる。

境內には中條秀長墓と稱する寶篋印塔がある。

縣社猿投神社

（猿投村大字猿投）　三河線　猿投驛＝乘合自動車



猿投神社

大碓命、景行天皇、垂仁天皇の三柱を祭神とする延喜式內社で、白鳳年間の創建と傳へる。

本社は字本城にあり、猿投山上の宇茂吉に東宮、同字鷲取に西宮がある。擧母城主中條氏は最も當社を尊信して多くの神田を寄附し、豐臣秀吉も山林竹木伐採禁止の朱印を出し、德川家康亦慶長七年先規に依つて七百七十六石を寄進してゐる。

社寶には國寶の波平行安在銘の兵庫鎖太刀を始め、傳八幡太郎楯無の鎧、嘉元二年

の勅額其の他多くの古文書等がある。

猿投山と御陵墓

（猿投村大字猿投）　三河線　猿投驛＝乘合自動車＝徒歩

標高六百二十九米、西三河に於ける雄峯で山上に大碓命御墓がある。大碓命は景行天皇の皇子で日本武尊の御兄に當らせられる。景行天皇五十二年此の山に登らせ給ひ、不幸毒蛇に中つて薨去され此處に葬り奉つたと傳え、古くから御廟所と稱して垣が設けられてゐたのを明治八年御墓所と定められ、爾來宮内省の所管として今に守部が置かれてゐる。

山中には東西の二流がある、東は猿投神社の附近を流れ、西は廣澤谷を流れて共に南下してゐるが、その溪流中の球狀花崗岩には岩面に鮮明な菊花狀の斑紋が現れてゐる。俗に菊石と稱せられるもので、今天然紀念物に指定されてゐる。此の他樹蔭に產する冬蟲夏草の一種で「かめむしたけ」と稱する珍奇な植物等もある。

登山道は此の二流に沿ふた東西の二道であるが、西は東の急峻なるに反して坂路緩やかで路傍の變化にも富んでゐる。

舞木廢寺塔阯

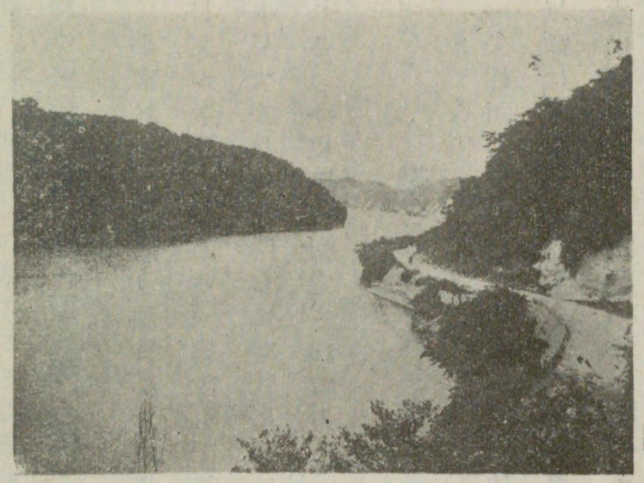
（猿投村大字舞木）

表面蛇目形に彫り込まれた直徑一・七六米の塔の心礎が在り、附近に多數の布目瓦が散亂してゐる。傳說も記錄も殘つてゐないが、瓦の文樣、礎石の構造より見て奈良朝を降らぬ時代に於て相當大きな佛寺の營まれてゐたことが推知される。今史蹟に指定されてゐる。

勘八峽

（猿投村、石野村）　三河線　平戸橋驛

矢作川の上流平戸橋からもと枝下用水取入口の間を總稱して勘八峽といふ。以前は兩岸に屹立する巨岩に水勢激し、左岸の欝々たる御料林勘八山の翠松河水に映じて其の風景の美を誇つたものであるが、十年前御料林は伐採せられ、



勘八峡（ダムの上流を望む）

又平戸橋の上流數町の處に三河水力發電所の堰堤が築かれて完全に河水を堰き止めたので、今は以前の風景とは全く趣を異にしてゐる。

堰堤の上流は一大長湖となり、兩岸の樹影は深潭に映じて閑雅な風致をなしてゐるが、その下流は急勾配で涸谷の磊々たる巨石は往時の水勢を思はせる。

東加茂郡

足助町

三河線　西中金驛＝乘合自動車

街は東西に長く足助川その中央を流れて南方に巴川と合流してゐる。人口三千の都邑に過ぎないが、交通の要路を占め貨物の集散地として商況亦盛である。

街の南端には白鳳二年の創建と傳へる鄕社八幡神社がある。本殿は室町時代の建築で今國寶に指定されてゐる。また飯盛山麓の香積寺は應永年間の創立にかゝる禪刹で、境内には奇僧風外の碑がある。その門前を流れる巴川の畔一帶は之を香嵐溪と稱し、紅葉の名所として知られてゐる。

辭金城還飯盛山　風外

江上逢霜落　冷風拂老顏　仍知紅葉待　扶杖好還山

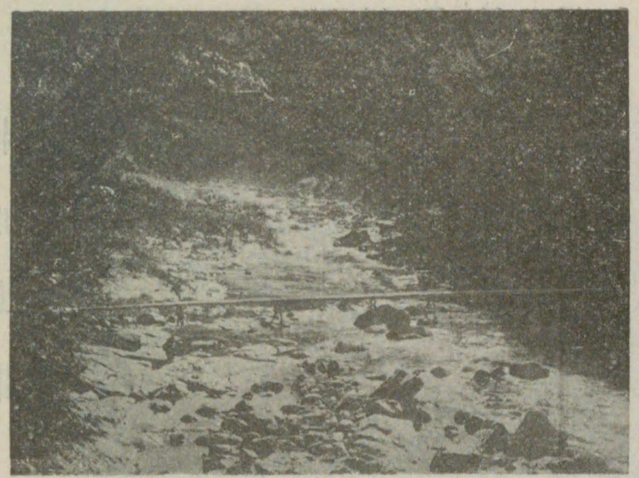
主なる官公署

東加茂郡

足助警察署、鹽業取締所足助支所、足助森林事務所、足助林產物檢査出張所

足助城阯

（足助町）

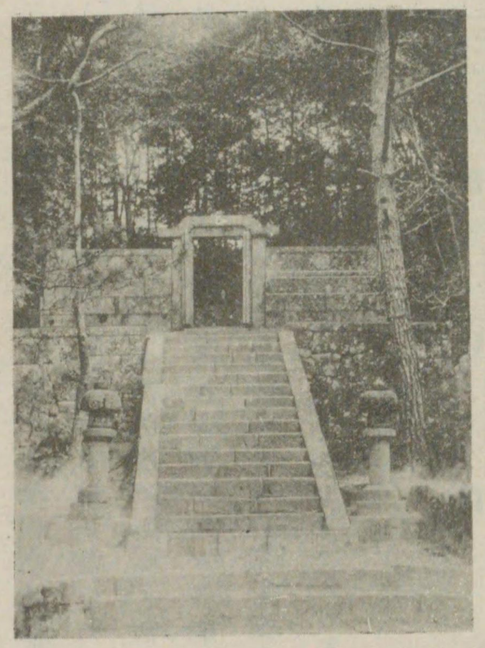


香嵐溪の紅葉

眞弓山の山上に在つて今は雜木繁茂し、眞弓山城墟の碑が建てられてゐる。此の城は足助重範の祖重長以來數代の居城であつたと謂ふ。重範は元弘元年笠置山に馳せ參じて奮戰した南朝の忠臣で、明治二十四年正四位を贈られ、昭和八年更に從三位を贈られた。今鄕社八幡神社の東に足助神社として奉祀せられてゐる。附近には眞弓山、飯盛山、城山、大觀音、臼木、黍生山、阿須利の所謂足助七城がある。これは足助氏滅亡後城主によりその根據を移動せしめたといふ。

高月院と松平氏墓

（松平村大字松平）　三河線　擧母驛＝乘合自動車＝自動車



松平氏の墓

高月院は淨土宗に屬し、正平二十二年足助重宗の二男寛立の創立と謂はれ、德川氏の祖先親氏が寛立に歸依して菩提寺としたと傳へてゐる。寺內の松平氏墓は西北の丘陵に據つて南面し、百餘坪の塋域に親氏、泰親及長親の母閑照院の寶塔三基が一列に並び、その周圍は石柵を以て圍まれてゐる。舊時は百石の寺領が附せられてゐた。寺寶には佛畫、佛像、古文書の類がある。

賀茂縣有模範林

（賀茂村）　三河線　西中金驛＝乘合自動車＝自動車

日露戰役記念として、基本財産の造成及造林の模範を示す目的を以て明治三十九年から杉、扁柏、黑松、落葉松等の植栽を行ひ、大正四年全部を完了したもので總面積は九百九十餘町歩である。初めは賀茂村の部落有林であつたが、大正五年縣が之を讓りうけ、爾來年々多額の事業費を支出して蔓切、枝打、除伐、間伐、防火線、刈拂等の各種作業を施行すると共に、林道の新設修繕、貯木場の新設、防火巡視等を行つてゐる。

北設樂郡

田口町

田口線　三河田口驛

人口四千を有する山間の都邑で、地方に於ける物貨の集散地として殊に木材の移出が多い。近年田口鐵道の開通によつて頓に活氣を加へ商況亦盛である。

この町に福田寺といふ臨濟宗の古刹がある。その創草は應永年間であるが、その後天正年中、野田城で銃丸うけた武田信玄が傷痍の身をおして當寺に來り遂に逝去したといはれ、境内には信玄の墓と稱する小五輪塔もある。

主なる官公署、會社

田口警察署、鹽業取締所田口支所、田口林產物檢査出張所、東豐商事株式會社

段戸の御料林と田峰觀音

（段嶺村）　田口線　田峰驛＝徒歩

段戸山は六千八百町歩の廣大な面積を有する御料林で良材を出す。林中には一千米を超ゆる高峰があり、珍稀な植物も多く、又溪流には山椒魚が棲息してゐる。豐川の上流、寒狹川は此處に源を發してゐるが、其の清らかな水と奇勝は仙境に遊ぶの感がある。

田峰觀音は文明二年城主菅沼氏の建立せるもので、本尊は行基の作と謂はれ、夫婦の契りや福德念願に靈驗あらたかなりとして賽者が多い。寺寶には文明十三年在銘の梵鐘と永祿年間の制札がある。

乳岩及び乳岩峽

（三輪村大字川合）　鳳來寺線　三河川合驛＝徒歩

鳳來寺鐵道川合驛から北方約二粁の處に流紋岩質凝灰岩より成る乳岩山がある。山中の乳岩と稱する大洞窟は中央部の高さ約十米、幅十八米、深さ十六米で、上床から乳房狀の鐘乳石が垂下してゐる。此の他目藥岩、胎內潛、新穴等と稱する洞穴や天然の大石門がある。石門は高さ二十三米、奥行は五米乃至九米を有し乳岩山中第一の奇觀である。こゝから流れて三輪川に合流する乳岩川は河底全部が岩石から成る峽谷で、兩岸の翠綠は透徹する清冽な流れに和し、本縣屈指の勝地として、今天然紀念物及び名勝に指定されてゐる。

乳岩及び乳岩川（前に大きく見ゆる岩壁は棧敷で中央上稍の方に見ゆる岩乳は後の岩乳）

本郷町

三信線　三輪驛＝乘合自動車

山嶽を以て圍繞する人口二千の小邑であるが、本郡東部に於ける物貨の集散地として知られてゐる。その取引は木材、繭が殊に多く、又特產物、椎茸、串柿の移出も尠くない。

尙毎年一月字中在家（なかんざき）に行はれる花祭は傳統を誇る古典的な祭事として來觀するものが多い。

花祭

花祭は北設樂地方の十ケ町村、二十餘個所で年の暮から初春にかけて行はれる原始的な村祭である。

祭場の中央に籠を築きそれに榾を盛に焚き、其の焚火を圍んで花模樣の衣裳をつけた青少年が假面の鬼を中心に笛太鼓の囃しにつれて舞踊するもので、その曲目は大體十五六種に達し、前夜から翌朝まで舞ひ續けられる。これは古代神樂の形式の遺れるものとして近時世人の注意を惹くに至つた。

茶臼山

（豐根村大字坂宇場字川宇連）
鳳來寺線　三輪村驛＝乘合自動車＝自動車

三河と信濃の國境に跨る標高一千四百十五米の高峰で、縣下唯一の新時代噴火山である。

この山は初め玄武岩が噴出して新火山岩である富士岩の噴出する基底をなしたもので、玄武岩は次第に綠色粒狀の富士岩に移り化し、之が主體となつて茶臼山を構成してゐる。山中の轉石中には玄武岩質富士岩か富士岩質玄武岩か何れとも見定めのつかないものが多い。

川宇連の花ノ木

（豐根村大字坂宇場字川宇連）
鳳來寺線　三輪村驛＝乘合自動車

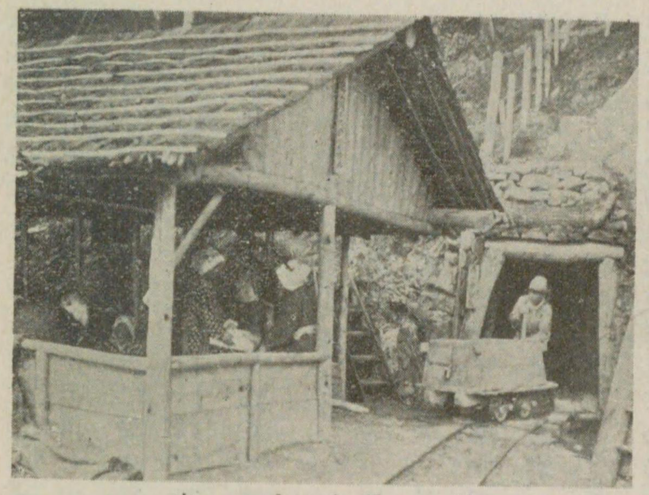
花ノ木は全國に類例の尠ない珍らしいものであるが、本縣と岐阜縣には比較的多く地方的特色を有する植物である。もみぢ屬の一種で四月上旬に花を開く。花は小さく濃赤紫色を呈するが、遠望すれば極めて美しく、里人は花ノ木と云はず蘇枋ノ木と稱してゐる。尹良親王を祀る神社の社域に群落をなして生育し、今天然紀念物に指定されてゐる。

津具金山

（下津具村）田口線　三河田口驛＝乘合自動車

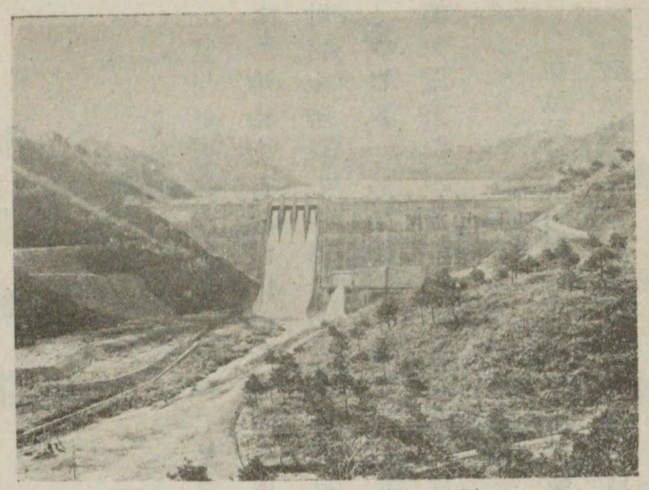
最初の採掘は遠く戰國時代、武田信玄が三河の地に侵入した時に遡つてゐる。此の地に金鑛を發見した信玄は直に甲州から坑夫、熟練工を派して盛に採取した。當時の所謂甲州金の一部は此の金鑛からとつたと謂はれ、その遺址と傳へるものが今に殘つてゐる。

その後永年廢坑の儘捨てられてゐたのを、明治、大正の兩時代に各一度試みられたが、製錬上の技術的困難にさへぎられて失敗に終り、昭和に至つて遂に成功、今や三十萬坪に餘る鑛區に日々鶴嘴の音をきく。



津具金山

愛すべきものがある。



黑田貯水池

黑田貯水池

（武節村大字黑田）

本貯水池は發電用として武節、段嶺の兩村に誇る舊段戸牧場の跡地を利用し字黑田に高さ三十六米、長さ百五十米の堰堤を築いて黑田川の水を堰き止めたので、四圍の岡丘は忽ちその陵脚を深く水中に沒して一大長湖となつた。池は周圍一里二十七町、海拔八百五十餘米で、丘陵が緩やかに水に迫つて柔らかな景觀を呈し、その風光には

南設樂郡

新城町

豐川線　新城驛

豐川の西岸に位し、人口七千を有して木材、繭の集散多く商況盛である。この地はもと菅沼氏七千石の陣屋のあつた所で古くから能樂が盛であつた。鄕社富永神社の境内にある能舞臺は享和二年幕府の舞臺を密かに摸して造營したと謂はれ、古い假面を多數所藏してゐる。附近に豐川の清流と櫻樹を以て誇る櫻ケ淵公園があり、その對岸には奇岩を以て知られる蜂ノ巢岩がある。

主なる官公署、學校

新城警察署、新城財務出張所、愛知縣蠶業取締所新城支所、新城林產物檢査出張所、新城土木工區事務所、愛知縣新城農蠶學校、愛知縣新城高等女學校

野田城阯

（千郷村大字豐島字本城）　豐川線　野田城驛

永正十三年菅沼定則の築くところである。天正元年武田信玄長篠より南下して本城を攻むるに際し、城主菅沼新八郎定盈善く防いだが衆寡敵せず、遂に開城するに至つた。

信玄は此の時城兵の奏する笛の音に牽かれてその狙撃の銃丸に當り卒するに至つたと傳へられる。城はこれより廢墟となつたが、今尙本丸の一部、濠壘の阯等が殘されてゐる。

驚倒暗中跳ニ銃丸一　野田城上笛聲寒
誰知七十二疑塚　不似一棺湖底安ノキニ　（大槻磐溪）

長篠城阯

（長篠村大字長篠）　鳳來寺線　古城阯驛

此の城は永正五年今川氏親の武將菅沼元成の創築せるもので、三輪川と寒狹

川の合流する突角の地を占め、左右兩面は自然の斷崖で背面に山を負ふた要害である。

長篠城址（三輪川（右）と寒狹川（左）との合流點を隔てて城址を望む）

元成五世の孫正貞は武田信玄に攻められて之に降り、天正元年七月德川家康に襲はれて遂に城を棄てた。家康は武田氏が之を奪還せんと計るを豫期し奥平貞昌を城主として大いに陣容を固めた。果せる哉天正三年五月武田勝頼一萬五千の大兵を率ゐて來り圍むところとなつた。甲軍は城の堅固にして容易に拔く能はざるを見て遂に柵を城外に廻して長圍の計畫を樹てた。然るに城中糧食に乏しく家康に援を請はんと鳥居强右衛門勝商が密かに重圍を脱出して岡崎に使し、歸途甲軍に捕へられて壯烈な最期を遂げしことは人口に膾炙する所である。

戰後貞昌は名を信昌と改め、翌四年新城に轉じたので、それより城は廢墟となつた。

遺址は鳳來寺鐵道に依つて二分せられたが、尚本丸、二之丸、三之丸彈正廓、野牛郭、瓢郭等の遺址が現存し、本丸は今公園となつてゐるが、其の他は宅地や田畑と化し、何れも史蹟に指定されてゐる。

附近には鳥居强右衛門墓を始め、此の戰役に關係した史蹟が頗る多い。

鳳來峽

（南設樂郡、八名郡）　鳳來寺線　湯谷驛

豐川の上流で、乳岩峽の下流から八名郡大野町附近に至る三輪川の沿岸一帶の峽谷を總稱して鳳來峽といふ。峽底は岩石を以て疊まれ、清麗な水は兩岸の翠崖と相映發して趣致に富み峽中奇勝亦多く、湯谷溫泉附近に於て殊に卓越してゐる。

鳳來寺山と鳳來寺

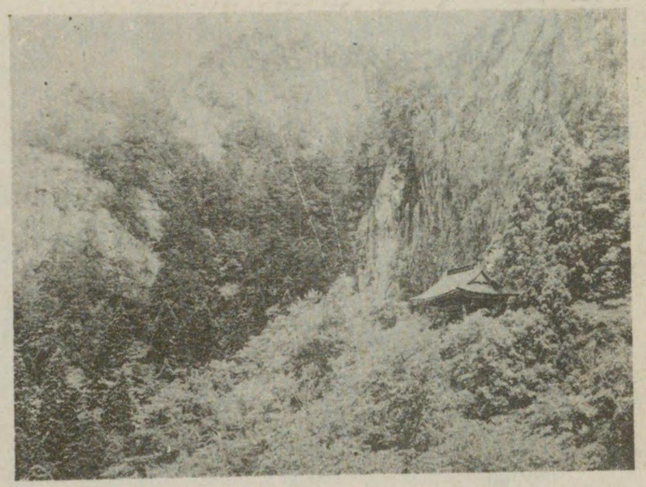
（鳳來寺村大字門谷）　田口線　鳳來寺驛

鳳來峽（左方家屋は湯谷温泉）

鳳來寺山は最高峰を瑠璃山と稱して標高六百九十米を有し、火山岩を以て構成してゐる。之は第三紀に海底に噴出した流紋岩の塊狀火山で、表面は海水の爲に冷却して、眞珠岩、松脂岩等を生じたが、後ち海底は陸地となり、風化水蝕の作用をうけて、流紋岩の一部が表面に現はれ、現時の山形を呈するに至つた。山勢は峻峭で巉岩聳立し往々數十米の斷崖をなす。

山腹に眞言宗に屬する古刹鳳來寺がある、その創建は文武天皇の朝に、利修仙人が天

皇の御惱を加持し奉つて靈驗著しきところから、勅によつて建立されたと謂はれ、本尊藥師如來は利修が七本杉を伐つて自ら彫刻せる尊像と傳へられる。其の後源頼朝に依つて再興せられ、所謂三河七御堂の隨一である。また豐臣秀吉より寺領三百石の寄進もあつたが、殊に德川廣忠は此の藥師佛を篤く信仰し、家康はその靈告に依つて產れたと謂はれてゐる。德川時代には寺領一千二百石を有し諸堂宇の造營もあつて頗る隆盛を極めたが、屢々火災に遭つて今は往時の盛觀を見ることが出來ない。



鳳來寺山

本堂に至るには山門のあたりから一千三百の石磴を踏むのであるが、その間削り立つ岩壁の間に旺時を偲ぶ累々たる僧

坊の石垣を見る。

本堂から少し離れて東照宮がある。今は獨立の鄕社となつてゐるが、社殿は所謂權現造の華麗なもので境域亦幽邃である。更に奥の院に登ると山氣は愈々澄明で、針葉樹の林相は寒地の景觀を呈してゐる。其處の突兀たる岩上に立てば眼下に豐川の蜒々と白く這ふ東三の平野から、渥美半島を越えて遙か蒼海杳渺たる太平洋が雙眸にあつまり、其の風景は實に雄大である。

山中を通じ、溪谷は花草羊齒の種類に富み、岩壁には石耳蘭等の岩生植物群生し、林中棲息の動物亦多く、佛法僧は殊に名高い。今名勝及び天然紀念物に指定されてゐる。

こからしに岩ふきとかる杉間かな　芭蕉

寶飯郡

御油の宿

御油と赤坂

名古屋線　本御油驛・赤坂驛

徳川時代孰れも東海道の一驛次として殷賑を極めた宿驛であつたが、鐵路の開けて以來その繁榮は漸次他に奪はれ共に人口一千數百の小邑となつた。然しながら街道筋の舊態は町家の外貌によく舊幕時代の俤を存し懷舊の情をそゝるものがある。

夏の月御油より出でて赤坂や　芭蕉

宮路山

（赤坂町）　名古屋線　赤坂驛

標高三百六十二米の山で、古來紅葉の名所として知られてゐる。持統天皇行宮の遺阯と稱するものは岳ヶ城に在るが固より定かでない。山頂は四圍の眺望に富み其處に草壁皇子の創建と謂はれる宮道天神が鎭座する。

まちけりな昔も戀し宮路山　　阿佛

おなじ時雨のめぐりある世を

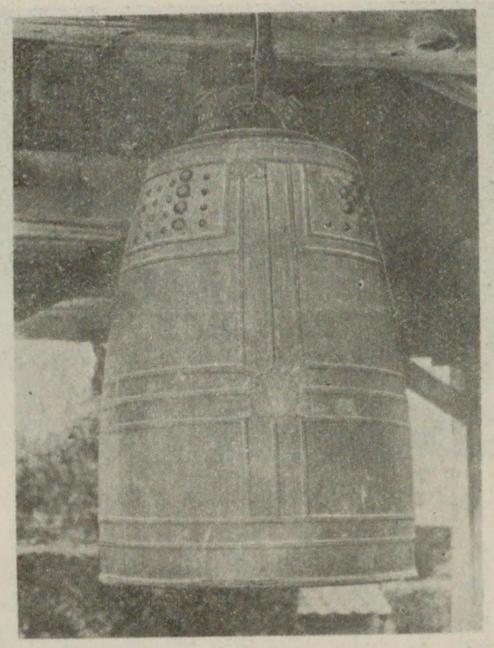
嵐こそ吹きこさりけり宮路山　　藤原孝標朝臣女

またも紅葉のちらで殘れる

三河國分寺

（八幡村大字八幡）　名古屋線　國府驛＝自動車

聖武天皇の御宇建立された三河の國分寺で、遺阯の大半は民家や耕地となり、一部に曹洞宗に屬する國分寺がある。この寺は永正年間僧機外の再興したもので、鐘樓に懸けられてゐる梵鐘は無銘であるが、國分寺創立當時の鑄造と思はれ、今國寶に指定されてゐる。寺域には大きな礎石が土壇の叢に殘り、西北には築垣の名殘が殘されてゐる。



國寶　梵鐘

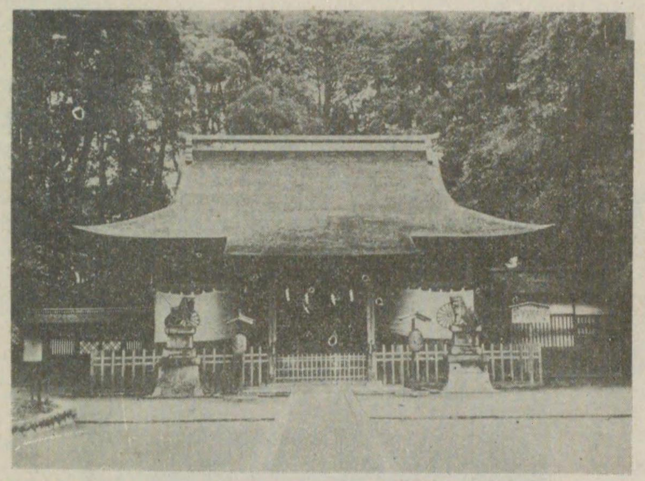
尙東北三四町の處に三河國分尼寺阯がある。其處に曹洞宗の寺が現存し、林叢中には土壇や礎石等も存して國分寺阯と共に今史蹟に指定されてゐる。

縣社　八幡宮

（同　前）

三河國分寺阯の西に隣接して鎭座する平安朝以來の古社で、舊時は百五十石の社領を有してゐた。社傳によれば源頼朝が厚く崇敬し社領を寄進したといふ。三間社流造の本殿は文明九年

の建造と傳へ、今國寶に指定されてゐる。



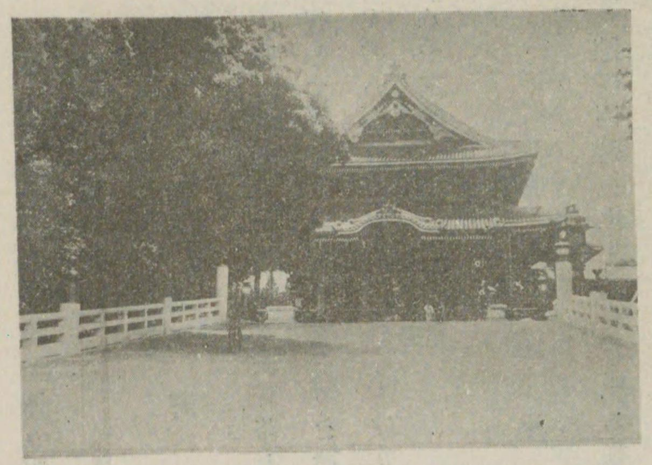
砥鹿神社

から掘出した銅鐸がある。

國幣小社　砥鹿神社

（一宮村大字一宮）　豐川線　三河一宮驛

大巳貴命を祀る三河の一ノ宮で、豐川流域の低地に沿ふた高臺に在る。社叢は老杉古檜繁茂し、極めて深嚴な神域である。奥宮は神社の北方約二里、標高七百八十九米の本宮山上に祀られてある。社傳に依れば文武天皇の大寶年中に草鹿砥公宣が神託に依つて奉祀したもので、舊時百二十石の神領を有した。社寶に天保二年北設樂郡田峯



妙嚴寺吒枳尼天堂（豐川稲荷）

豐川町

豐川線　豐川驛

豐川町は人口一萬を有し、産業に工産の五十萬圓、農産の四十萬圓、蠶業の二十萬圓等あるが、由來この地は豐川閣の繁盛を以て世に知られてゐる。

豐川閣とは嘉吉年間僧東海の創建にかゝる曹洞宗の巨刹妙嚴寺のことで、廣大なる寺域には宏莊なる諸堂宇が並び建ちその庭園亦優雅である。この寺の鎭守として吒枳尼天を奉祀したのが所謂豐川稲荷である。往昔武田、豐臣、德川の諸將が厚く之を信仰し屢々祈請をこめたといはれてゐる。

豐川驛から門前に至る四五町の間は土産物店など軒をつらね、賽者は陸續として踵を絶たない。

三河海苔

（前芝村）

嘉永六年前芝村の人杢野甚七が海濱に蛤を畜養せんと其の周圍に葦簀を立て廻して之に海苔の附着するを發見した。之が三河海苔養殖の濫觴である。爾來海苔の採取は漸次隣村にも波及して發達したが、前芝附近殊に盛で其の産額は八十萬圓に達してゐる。

縣社　菟足神社

（小坂井村大字小坂井）　豐川線　小坂井驛

穗の國造菟上足尼命を祀る延喜式内社で、白鳳十五年の奉齋といはれ、舊時は社領九十五石を有した。

此の社の祭禮については昔人身御供があつたといふ傳へがある。中古から猪や鹿を生贄として奉つた。大江定基が三河守として在任中、猪の生贄を見て興が覺め此の國を去らうとしたことが宇治拾遺物語に見えてゐる。今は一年の月數だけの雀を生贄として供へることになつてゐる。

社寶には應安三年の梵鐘、安元治承年間の奥書ある大般若經、古い懸佛、棟札、古文書などがある。

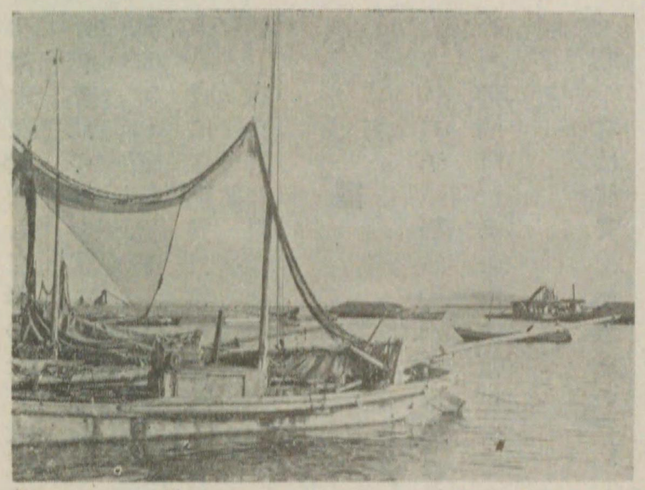
國府町

名古屋線　國府驛

人口六千の都邑で、東海道に沿ひ舊時東海道五十三次の一驛として殷賑を極めた御油町、赤坂町に續いてゐる。産業は蠶糸類が最も盛で生産額九十萬圓に達する。

此の地は往昔三河國廳の在つた所であるが、今其の跡地は明らかでない。

尙大字白鳥に鎭座する縣社總社は國衙に附屬せる社であつた。



三谷港

主なる學校、工場

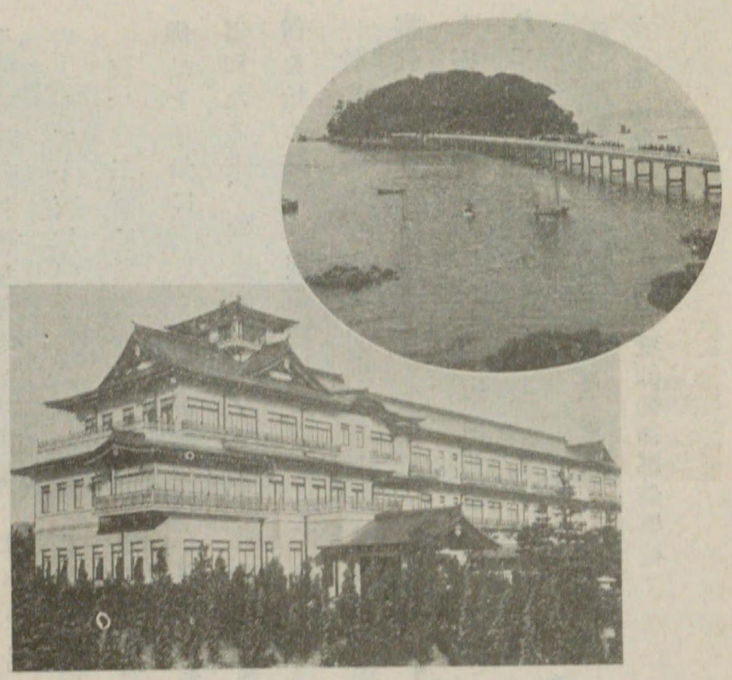
愛知縣國府高等女學校、竹木製油所

三谷町

東海道線　三河三谷驛

人口八千を有し、古來三河木綿の産地として、又鮮魚の集散地として産業方面に頗る活動的な町である。織物業は歐洲大戰後急激に發達して現在其の生産額五百萬圓に上り、漁業は遠洋漁業を合せ其の漁獲高四十萬圓に達してゐる。

是等の指導機關として三河染織試驗場と愛知縣水産試驗場がある。又特殊施設に同



蒲郡海岸と觀光ホテル

町機業の共同炊事場があつて作業狀態がよく統一されてゐる。

港は縣下三大漁港の一と稱せられる。

蒲郡町と海岸

東海道線　蒲郡驛

蒲郡町は人口一萬七千を有する。産業は織物最も盛でその生産額は一千三百萬圓を超え、また特産物蜜柑は年産八萬圓に達してゐる。

蒲郡驛の北方約一粁のとこ

ろに源義家手植と傳へる清田の大樟がある。この樟は東海に於ける代表的なものとして今天然紀念物に指定されてゐる。

海岸は三面に翠巒を負ひ、三河灣に臨んで遙か渥美半島に對し、大島、小島、佛島を遠景に、近く竹島が繪の如く浮ぶ。その風景は東海一と稱せられ、氣候溫和なる上、潮水清く、空氣も澄澈で避暑避寒に適し、國際觀光ホテル、常盤館を始め諸般の觀光施設が完備してゐる。

竹島は面積三百八アールの小島で、磴を登りつめた處に市杵姫命を奉齋する鄕社八百富神社がある。社叢は古來斧鉞が加へられなかつた爲め、全島は欝蒼と樹木に包まれ、對岸の樹相と趣を異にしてゐるので、今天然紀念物に指定されてゐる。

主なる官公署、學校

愛知縣果樹母木園、愛知縣蒲郡農學校

渥美郡

舊二川宿の本陣

二川町

東海道線　二川驛

一萬の人口を有し、産業は養蠶最も盛で蠶糸類の年産は百八十萬圓を超えてゐる。之に次いで農産の五十萬圓、工産の三十萬圓がある。

この地は古來交通の衝に當り、舊幕時代には東海道の一驛次として繁盛したもので、今尙街道筋に舊時の俤が偲ばれる。

岩屋觀音

（二川町大字大岩）　同　上

岩屋觀音

東海道線二川驛の西北側に花崗岩山の奇勝がある。その山巓に直立する觀世音の像は明和二年江戸下谷の講中に依つて建てられた丈餘の銅像で突兀する八十尺の巖上に安置されてゐる。山腹には千手觀音を本尊とする大岩寺がある。舊時は參勤交代の街道筋に當り賽者も多かつたが、今はさして盛でない。

昭和二年今上陛下豐橋に行幸の際畏くも御登攀あらせられた聖蹟で、景勝の地として知られてゐる。

普門寺

（二川町大字谷川）　東海道線　二川驛＝自動車

國寶四天王の一

行基の開基と傳へられる眞言宗の古刹で、もとは船形山の上方、今の元堂と稱する所にあつたが、安元年中燒失したので、文治年間其の東腹に當る現地に移して再興された と謂はれてゐる。藤原時代の製作にかゝる木造阿彌陀如來坐像一軀、同釋迦如來坐像一軀、同四天王立像四軀は久壽三年在銘の經筒一口及鴛鴦花唐草文の白銅鏡一面と共に今國寶に指定されてゐる。此の他

大治年間の跋文ある大磐若經の所藏もあつて、往古宏莊な堂閣伽藍の營まれてゐたことが窺はれる。徳川時代には百石の寺領を有してゐた。

東觀音寺（二川町大字小松原）

東海道線　豐橋驛＝乘合自動車

行基の開基と謂はれ、臨濟宗に屬する古刹である。鎌倉時代作の阿彌陀如來坐像と大永年間に造營された多寶塔は國寶に指定されて居る。其の他文治年間から建久年間に亘つて寫された大磐若經六百卷や文永八年地頭安達泰盛の施入した美事な掛佛もある。是等に依つて當代に於ける本寺の繁榮を知ることが出來る。舊時は百二石の寺領があつた。

田原町

渥美線　三河田原驛

田原灣に臨む人口一萬三千の町で水陸交通の要衝に當り市況盛である。產業は農產の七十四萬圓、セメントの四十萬圓、飴の四十萬圓、蠶絲の三十五萬圓を其の主なるものとする。

幕末の志士として知られた渡邊崋山は此所の藩士で、その墓は城寶寺の境內にあり、その邸阯は今池ノ原公園として保存されてゐる。尙大字吉胡字矢先の貝塚は豐富な遺物と三百餘體の人骨を出土した事で有名である。

孔子像（渡邊崋山筆）

主なる官公署、學校、工場、會社

田原警察署、愛知縣成章中學校、愛知縣田原高等技藝女學校、三河セメント株式會社

田原城阯（田原町）

明應年間戸田宗光の創築以來戸田氏五代の居城であつたが、天文の初め松平

清康に攻められて之に降り、同十六年今川氏に城を奪はれて一門は沒落した。今川氏は城代を置いたが、永祿七年本多廣孝に攻められて之を捨てたので之より德川氏の領するところとなつた。天正十八年池田輝政の臣某城代となつたが、慶長五年池田氏の姫路轉封と共に戸田尊次が之に代つた。其の後寛文四年に至り三宅康勝が擧母城から移つて一萬二千石を領した。爾來子孫相繼いで維新に至り、廢城となつたものである。

今本丸は兒島高德と三宅康貞を祀る縣社巴江神社の神域となり、遺構は比較的よく保存されてゐる。

伊良湖岬

（伊良湖岬村）渥美線　三河田原驛＝乘合自動車

渥美半島の尖端で、もと島であつたのが、後ち陸續きになつといはれる。西は神島を挾んで志摩の大王崎に對し煙波の間に志勢の山影をながめ、外海は杳渺たる太平洋で、洋上から打ち寄せる狂瀾の怒濤が岩壁を撞き萬雷の音を發して碎けるさまは名狀し難い壯觀である。

伊良湖岬の突端

此の岬の東方二粁のところに日出の石門があり、附近には濱おもと等の暖地性植物の群落地がある。

石門の北側、翠松茂れる山の中腹見晴臺に立てば沖ノ石門、赤龜、塔ノ下、天狗岩など脚下に碁布し、縹渺たる大洋は水天彷彿として氣宇頗る濶達、實に雄大な感に打たれるものがある。內灣は之に反し女性的な曲線を描く靑松白砂の海濱で大部分は今陸軍の試砲場となつてゐる。

また其處には歌人磯丸の墓がある。磯丸は此の浦の漁夫で中年から和歌を學び、遂に一家をなした人で、伊良湖の風景

が生んだ歌人とも云ふべきである。

萬葉集

潮騒に伊良湖の島邊榜く船に
　妹乘るらむか荒き島回を　　人麿

伊良湖さき浪より外による人も
　なきさにわふるあまの身そうき　　磯丸

鷹ひとつみつけてうれしいらこさき　　芭蕉

大正悠紀地方風俗舞歌

君か世のめくみうれしみいらこ島
　あまの子らさへうたふ聲する

福江町

渥美線　三河田原驛＝乘合自動車

渥美半島の先端に近い港市で人口一萬一千を有し、半島西部に於ける貨物の集散地として商況亦盛である。産業は農産の五十六萬圓、蠶業の四十七萬圓、工産の二十萬圓、水産の二十萬圓をその主なるものとし、近年養鰻も盛である。港は深く灣入する兎々田川の河口にあつて本縣三大漁港の一といはれ、その移出入貨物は水産物を始め蔬菜、肥料、木材等で其の價額百萬圓に達し、附近には陸軍試砲場がある。

また大字保美字平城にある貝塚は繩文土器と彌生式土器が混在し、多くの石器、骨角器及銅簇などが出土したので世に知られてゐる。

主なる官公署、工場、會社

蠶業取締所福江支所、立馬養魚株式會社、愛知商船株式會社

八名郡

阿寺の七瀧

（山吉田村大字下吉田字阿寺）
鳳來寺線　三河大野驛＝自動車

阿寺の七瀧（下より第一・二・三・四の瀧を見る）

阿寺より巢山に通ずる道路から北方の溪流に沿ふた山逕を一粁も登ると七瀧に達する。深山幽谷の懸崖にかゝる瀧は七段に折れ、白簾を垂れる如く或は白布を晒すが如く實に奇觀である。水勢急なる爲に瀧壺が深く浸蝕せられ深潭をなしてゐるものもある。瀧下の溪流に沿ふ道路の西岸に峙つ斷崖絶壁は佳景を呈し何れも第三紀の圓礫岩で、石楠、卷柏等を着し、今名勝及天然紀念物に指定されてゐる。

黃柳の自然林

（山吉田村大字黃楊野）
鳳來寺線　鳳來寺口驛＝自動車＝徒歩

黃揚野一帶は黃柳樹が多く自生する處から此の名が冠せられた。此の天然林は四十町歩に近い範圍に亘つて自生する珍らしいものであるが、從來十年目毎に廻り三寸以上のものが伐採されてゐたので、今その大木を見ることは出來ない。

富賀寺

（八名村大字中宇利）　豐川驛　新城驛＝自動車

大寶年間行基が彌陀、藥師、觀音、地藏の像を刻み、こゝに一宇を建立したと謂はれる。後ち南北朝の頃、足利尊氏が時の住僧眞應と從兄弟の關係から此の寺を祈願所となし、自筆の願文と寺領を寄せ、又堂塔七宇、宮祠十八社、坊

舍十八棟を建立したと謂ふ。其の後數度の火災に罹つて漸次衰頽し、今は僅かに本堂、護摩堂等數宇を止むるに過ぎない。

寺寶として由緒ある佛畫や永德年間の大般若寫經を襲藏してゐる。

縣社　賀茂神社

（賀茂村神山）
東海道線　豐橋驛＝乘合自動車

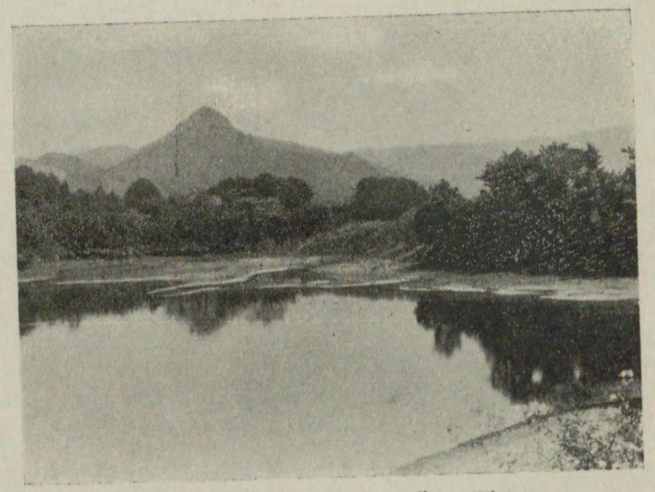
祭神は賀茂別雷命で、文治年間、源頼朝が社殿を再建し神領を寄進したと謂はれ、永祿十一年德川家康、遠州三方原へ出陣の際大旗を奉納して戰捷を祈り、また長篠の役にも祈願したと傳へられてゐる。

舊時は社領百石を有し、社寶の家康奉納の大旗は寛文年間に再調せられたものである。

石卷山

（石卷村大字石卷）
東海道線　豐橋驛＝乘合自動車＝徒步

三河に奇山なし唯だ一つ石卷山あるのみ、と林鶴梁が述懷したといはれる山で古生層の石灰岩より成る。山頂には天狗岩、雄岩、雌岩と稱する奇岩があり、その岩肌にはマルテンギセル、薄皮マイマイ等の陸棲介やステゴビル、マネキグサ、クモノスシダ等の植物が着生してゐる。



石卷山の遠望

中腹には鄕社石卷神社の奥宮がある。本社は山脚大字三輪に在つて、大巳貴命を祀れる式内の社で、舊時は吉田城の鬼門鎭護として代々城主から崇敬せられた。

附

錄

指定史蹟名勝天然紀念物國寶一覽表

一、史蹟名勝天然紀念物

種別	名稱	指定年月日	所在地
史蹟	百々陶器窯阯	大正十一年三月八日	渥美郡杉山村大字六連字一本木十一番地
同	三河國分寺阯	大正十一年十月十二日	寶飯郡八幡村大字八幡字本郷一番外七十筆
同	三河國分尼寺阯	大正十一年十月十二日	寶飯郡八幡村大字八幡字忍池百八番外十三筆
同	小牧山	昭和二年十月二十六日	東春日井郡小牧町大字小牧字八幡前六百三十三番ノ一外十二筆
同	二子古墳	昭和二年十月二十六日	碧海郡櫻井村大字櫻井字二タ子七番外十筆
同	姫小川古墳	昭和二年十月二十六日	碧海郡櫻井村大字姫小川字姫三十八番外三筆
同	北野廢寺阯	昭和四年十二月十七日	碧海郡矢作町大字北野字郷裏四十番外二筆

史蹟	大山廢寺塔阯	昭和四年十二月十七日	東春日井郡篠岡村大字大山字郷島四百十一番ノ内一反三畝十歩
同	舞木廢寺塔阯	昭和四年十二月十七日	西加茂郡猿投村大字舞木字丸根百七十九番及百七十七番ノ一ノ内一反五畝歩余
同	長篠城阯	昭和四年十二月十七日	南設樂郡長篠村大字長篠字市場四十五筆、字岩代十四筆
同	八幡山古墳	昭和六年五月十二日	名古屋市中區御器所町字北丸屋十九番及二十番地
同	名古屋城	昭和七年十二月十二日	名古屋市西區南外堀町、樋ノ口町、堀端町、上名古屋町、民有二十筆、國有六筆
同	明治天皇名古屋大本營	昭和八年十一月二日	名古屋市中區下茶屋町五十八番ノ内二千八十六坪五合八勺
同	明治天皇八町畷御野立所	昭和八年十一月二日	名古屋市南區熱田東町字濱新開一番ノ一外六筆
同	明治天皇半田大本營及舊阯	昭和八年十一月二日	知多郡半田町字雁宿二十七番ノ二、字北條二十四番ノ内
同	明治天皇長尾山御野立所	昭和八年十一月二日	知多郡武豐町字迎戸百二十七番ノ一外二筆ノ内
同	明治天皇厂宿御野立所	昭和九年十一月一日	知多郡半田町字厂宿六番地ノ内

史蹟	明治天皇乙川御野立所	昭和九年十一月一日	知多郡龜崎町大字乙川字天王西四十七番、四十八番ノ内
同	明治天皇東阿野御小休所	昭和十年三月二十六日	愛知郡豐明村大字東阿野字滑一番ノ一
同	明治天皇八事御野立所	昭和十年三月二十六日	愛知郡天白村大字八事字八幡山十七番ノ二
同	明治天皇下津御小休所	昭和十年三月二十六日	中嶋郡稻澤町大字下津字西下町五十八番地
同	明治天皇福田行在所	昭和十年三月二十六日	海部郡南陶村大字福田字七春七十四番地
同	明治天皇豐橋行在所	昭和十一年七月二日	豐橋市關屋町八十一番ノ内
同	明治天皇清水御小休所	昭和十一年十一月二日	名古屋市東區清水町三丁目五十八番、五十九番ノ内
同	明治天皇武豐御小休所	昭和十一年十一月二日	知多郡武豐町字里中二十九番ノ内
同	明治天皇黑田御小休所	昭和十一年十一月二日	葉栗郡木曾川町大字黑田字西町南六番ノ内
同	明治天皇前ヶ須御小休所	昭和十一年十一月二日	海部郡彌富町大字前ヶ須新田字野方七百十九番ノ内

史蹟	明治天皇西蜆御小休所	昭和十一年十一月二日	海部郡十四山村大字西蜆字古堤起十八番ノ内
同	正法寺古墳	昭和十一年十二月十六日	幡豆郡吉田町大字乙川字西大山二十五番ノ内
同	二子山古墳	昭和十一年十二月十六日	東春日井郡勝川町大字味美字二子四千七百四十二番外二筆
同	阿野一里塚	昭和十一年十二月十六日	愛知郡豐明村大字東阿野字長根四番、字池下百十四番
名勝	木曾川	昭和六年五月十一日	丹羽郡犬山町及城東村國有五十八筆民千九百四十四筆
名勝及天然紀念物	木曾川堤（櫻）	昭和二年八月十一日	葉栗郡草井村、宮田町、淺井町、葉栗村、北方村
同	鳳來寺山	昭和六年七月三十一日	南設樂郡鳳來寺村大字門谷字鳳來寺國有六筆民有一筆
天然紀念物及名勝	乳岩山及乳岩峽	昭和九年一月二十二日	北設樂郡三輪村大字川合字乳岩三十一番外四十筆
名勝及天然紀念物	阿寺ノ七瀧	昭和九年一月二十二日	八名郡山吉田村大字下吉田字七瀧一番及字ハダナシ一番地
天然紀念物	川宇連花ノ木自生地	大正十一年十月十二日	北設樂郡豐根村大字坂宇場字御所平六十九番、七十番ノ二十一

天然紀念物	ひとつばたご自生地	大正十二年三月七日	丹羽郡池野村字西洞四十一番ノ内一反八畝十八歩
同	大赤見本郷草自生地	昭和二年四月八日	無告示指定
同	清田ノ大樟	昭和四年十二月十七日	寶飯郡蒲郡町大字清田字下新屋九十一番地
同	八百富神社々叢	昭和五年八月二十五日	寶飯郡蒲郡町大字府相字竹島一千四百六十二番地
同	猿投山ノ球狀花崗岩	昭和六年二月二十日	西加茂郡猿投村大字猿投字白瀧、大字加納字廣澤、二筆
同	神明社ノ大椎	昭和七年四月十九日	幡豆郡三和村大字上永良字宮東
同	名古屋城ノ榧	昭和七年七月二十五日	名古屋市西區南外堀町六丁目一番地
同	曬稿ノ松	昭和八年四月十二日	幡豆郡横須賀村大字中野字曬稿
同	羽豆神社ノ社叢	昭和九年一月二十二日	知多郡師崎町大字師崎字明神山一番、二番、二番ノ一地
同	鵜ノ山鵜蓍殖地	昭和九年一月二十二日	知多郡小鈴谷村大字上野間字曾力外四字ニ跨ル地域

天然紀念物	法眼松	昭和九年一月二十二日	西加茂郡高橋村大字野見字於山百三番地
同	馬脊岩	昭和九年五月一日	南設樂郡長篠村大字豐岡、八名郡七郷村大字能登瀬大字井代
同	岡崎源氏螢發生地	昭和十年十二月二十四日	岡崎市乙川岡崎市ト額田郡河合村トノ境界ヨリ下流岡崎市大平町大平橋ニ至ル間ノ河川敷、鉢地川、龍泉寺川、山綱川、各河川敷中岡崎市内ノ部分全部
同	牛久保ノ大椋	昭和十年十二月二十四日	寶飯郡牛久保町大字下長山字西道貝津八十六番ノ一

二、國寶（寶物）

等級種類	品目	指定年月日	所在地及所有者
甲種三等美術工藝	金銅兵庫鎖太刀 一口 永仁七暦施入銘アリ	明治三十七年八月二十九日	名古屋市南區熱田新宮坂町熱田神宮
甲種四等美術工藝	菊蒔繪手筥 一合	同	同
甲種四等彫刻	木造舞樂面十一面 陵王一、納曾利二、還城樂一、崑崙八仙四、二ノ舞二、拔頭一	同	同

甲種四等繪畫	紙本着色法華經涌出品 一卷	同	同
刀剣種	太刀 一口 銘則國	明治四十四年四月十七日	同
刀剣種	太刀 一口 銘宗吉作	同	同
刀剣種	太刀 一口 銘備州長船兼光	同	同
刀剣種	脇指 一口 銘長谷部國信	同	同
刀剣種	短刀 一口 表ニ來國俊裏ニ正和五年十一月ノ銘アリ	同	同
刀剣種	太刀 一口 銘宗吉作	明治四十五年二月八日	同
刀剣種	太刀 一口 銘國友	同	同
刀剣種	太刀 一口 銘長光	大正十年四月三十日	同
刀剣種	太刀 一口 銘備州長船重光	同	同

刀丙種劍	劍	銘吉光 一口	大正十年四月三十日	名古屋市南區熱田新宮坂町熱田神宮
刀丙種劍	短	銘長谷部國信藤原友吉 刀一口	同	同
刀丙種劍	短	銘國光 刀一口	同	同
刀丙種劍	太	銘了戒嘉元三年三月日山城國住人九郎左 刀一口	大正十五年四月十九日	同
刀丙種劍	太	無銘 刀一口	昭和三年四月四日	同
刀劍	太	銘眞行 刀一口	昭和五年五月二十三日	同
刀劍	脇	指銘越前康繼 一口	同	同
刀劍	劍	銘定利 一口	同	同
刀劍	劍	銘爲清 一口	同	同
刀劍	太	銘元弘三年六月一日實阿作鎬地ニ文祿四年守勝ノ寄進銘アリ 刀一口	昭和九年一月三十日	同

丙筆蹟	紙本墨書後花園天皇宸翰 一幅 永享五年十二月十二日トアリ 附紙本墨書足利義教丙書 一幅 十二月十二日トアリ	大正九年四月十五日	同
彫刻	木造阿彌陀如來及兩脇侍座像 三軀	明治三十七年八月二十九日	名古屋市中區門前町七寺
甲種三等彫刻	木像持國天毘沙門天 立像 二軀	同	同
丙書籍	辛櫃入一切經	明治三十三年四月七日	同
甲種四等繪畫	絹本着色佛涅槃圖 一幅	明治三十七年八月二十九日	名古屋市中區門前町生寶院
丙書籍	紙本墨書古書籍 三種 漢書 食貨志 一卷 瑚玉集 二卷 天平十九年ノ奥書アリ	明治三十八年四月四日	同
丙書籍	紙本墨書古書籍 四種 古事記 賢瑜筆 三帖 將門記（殘缺） 一卷 承德三年正月ノ奥書アリ	同	同

	尾張國解文 一卷 七大寺年表（殘缺） 二卷 永萬元年十月ノ奥書アリ	丙種書籍	紙本墨書古書籍 五種 日本靈異記（上卷缺） 二卷 口遊 源爲憲撰 一冊 本朝文粹 弘長三年二月ノ奥書アリ 卷ニ、ニ 二卷 同上 卷ノ十四 一冊 倭名類聚鈔（殘缺） 冊三葉
		丙種書籍	紙本墨書古書籍 十六種 空也上人誄 源爲憲作 一卷 天治二年ノ奥書アリ 熊野三所權現御記文 一卷 延久二年八月ノ奥書アリ 熊野權現藏王殿造功日記 二卷 續本朝往生傳 大江匡房撰 一冊 建長五年十二月ノ奥書アリ 拾遺往生傳 三善爲康撰 三帖 後拾遺往生傳 三善爲康撰 三帖 正嘉二年七月ノ奥書アリ 三外往生記 沙門蓮禪撰 一帖 正嘉二年六月ノ奥書アリ 本朝新修往生傳 藤原宗友撰 正嘉二年正月ノ奥書アリ 一帖
			同
			同

	弘法大師御傳 二卷 元暦元年五月ノ奥書アリ 弘法大師傳 一冊 應安八年正月二十六日ノ奥書アリ 弘法大師傳記 一卷 貞和二年七月ノ奥書アリ 弘法大師行化記 一冊 貞和二年七月ノ奥書アリ 高野大師傳 一帖 弘法大師御入定勘決記 二冊 弘法大師御入定勘決抄 一冊 高野口決 一卷	丙種書籍	紙本墨書翰林學士詩集（零本） 一卷
		丙種繪畫	絹本着色騎馬武者像傳足利尊氏像
		丙種刀劍	太刀 一口 銘正恒 拵絲卷太刀
		丙種刀劍	太刀 一口 銘遠近、拵絲卷太刀 德川義直寄進
		甲種三等經卷	色紙墨書妙法蓮花經 卷第五 一卷
			明治四十一年四月二十三日
			明治四十二年九日二十一日
			大正一一年四月十四日
			大正十一年四月十三日
			大正九年四月十五日
			同
			名古屋市南區熱田田中町地藏院
			名古屋市西區茶屋町東照宮
			同
			名古屋市南區笠寺町笠覆寺

彫刻	木造無住和尚坐像 開山堂安置 一軀	大正三年八月二十五日	名古屋市東區矢田町長母寺	
甲種四等彫刻	木造舞樂面 十二面 陵王一、納曾利一、還城樂一、崑崙八仙三、童舞二、二ノ舞二、貴德一、散手一	明治三十七年八月二十九日	一宮市眞清田神社	
美術工藝四等	陶製狛犬 一箇	大正元年九月三日	瀨戸市深川神社	
彫刻	木造藥師如來立像 一軀	大正三年八月二十五日	東春日井郡篠木村大字熊野密藏院	
甲種四等彫刻	木造地藏菩薩立像 一軀 嘉元元年無住作ノ銘アリ	同	東春日井郡志段味村大字吉根龍泉寺	
丙種刀劍	太刀 銘 助重、拵一口 德川綱誠寄進 絲卷太刀	大正八年四月十二日	東春日井郡品野町大字沓掛定光寺	
丙種刀劍	太刀 銘 守家、拵一口 德川宗睦寄進 絲卷太刀	同	同	
甲種四等彫刻	木造藥師如來坐像 一軀	大正十一年七月十五日	西春日井郡師勝村大字高田寺高田寺	
彫刻	木造藥師如來坐像 一軀	昭和六年十二月十四日	丹羽郡犬山町大字犬山藥師寺	

彫刻	木造藥師如來坐像 藥師堂安置 一軀	昭和六年十二月十四日	丹羽郡西成村大字淺野禪林寺	
甲種四等繪畫	絹本着色淨土五祖像 贊アリ 五幅	大正七年四月八日	葉栗郡宮田町字前飛保曼荼羅寺	
工藝	銅鐘 一口	昭和六年十二月十四日	同	
甲種四等美術工藝	黑漆蒔繪經筥 一合 輪鳳凰獅子文樣アリ 附 法華經入金銅寶相華透彫經筒 一箇	明治三十七年八月二十九日	中島郡稻澤町大字長野萬德寺	
彫刻	木造虛空藏菩薩坐像 一軀	明治四十二年九月二十一日	中島郡大里村大字北市場虛空藏堂	
彫刻	木造釋迦如來坐像 一軀	大正一一年四月十四日	中島郡明治村大字矢合國分寺	
甲種三等彫刻	木造傳覺山和尚坐像 一軀	同	同	
甲種三等彫刻	木造傳熱田大宮司夫妻坐像 二軀	同	同	
甲種四等彫刻	木造釋迦如來坐像 一軀	同	同	

彫刻	木造藥師如來坐像 一軀 藥師堂安置	大正二年四月十四日	中島郡明治村大字法花寺法華寺	
彫刻	木造十一面觀音立像 一軀	大正四年八月十日	中島郡明治村大字船橋安樂寺	
彫刻	木造阿彌陀如來坐像 一軀	同	同	
彫刻	木造釋迦如來坐像 一軀	同	同	
彫刻	木造大應國師坐像 一軀 開山堂安置	大正三年八月二十五日	中島那大和村大字妙興寺妙興寺	
繪畫	絹本着色佛涅槃圖 一幅	明治三十七年八月二十九日	同	
繪畫	紙本着色足利義教像 一幅 周鳳ノ贊アリ	明治三十八年四月四日	同	
繪畫	絹本着色不動尊像 一幅	明治三十四年三月二十七日	海部郡甚目寺町甚目寺	
繪畫	絹本着色佛涅槃圖 一幅	同	同	
刀劍	太刀 銘眞守 一口	大正九年四月十五日	海部郡津島町津島神社	

刀劍	劍 銘長光 一口	大正十二年三月二十八日	同	
繪畫	絹本着色佛涅槃圖 一幅	大正七年四月八日	海部郡津島町寶壽院	
彫刻	木造十一面觀音立像 一軀	昭和六年十二月十四日	海部郡蟹江町大字須成龍照院	
繪畫	紙本淡彩惠可斷臂圖 一幅 雪舟筆	明治三十七年八月二十九日	知多郡大野町齋年寺	
彫刻	木造阿彌陀如來立像 一軀 頭部內弘長三年七月日法橋圓覺作ノ銘アリ	昭和六年十二月十四日	知多郡成岩町常樂寺	
繪畫	絹本着色善光寺如來繪傳 三幅	大正七年四月八日	碧海郡矢作町大字桑子妙源寺	
繪畫	絹本着色法然上人繪傳 三幅	同	同	
繪畫	絹本着色親鸞上人繪傳 三幅	同	同	
繪畫	絹本着色聖德太子繪傳 十幅	同	碧海郡櫻井村大字野寺本證寺	
繪畫	絹本着色善光寺如來繪傳 四幅	同	同	

丙種刀劍	太刀一口 銘正恒（于胄江）、拵糸卷太刀 德川家綱寄進	大正三年四月十七日	穎田郡常磐村大字瀧常磐神社	
丙種刀劍	太刀一口 銘長光、拵糸卷太刀 附太刀箱一箇、德川家光寄進	大正十三年四月十五日	同	
甲種四等繪畫	絹本着色佛涅槃圖一幅 應永二十八年幹緣比丘義睦トアリ	大正七年四月八日	西加茂郡擧母町大字長興寺長興寺	
繪畫	紙本着色織田信長像 狩野元秀筆	昭和十年四月三十日	同	
丙種刀劍	太刀一口 銘行安、拵兵庫鎖太刀	大正八年四月十二日	西加茂郡猿投村大字猿投猿投神社	
甲種三等美術工藝	銅鐘一口	大正十一年七月十五日	寶飯郡八幡村大字八幡分國寺	
甲種四等彫刻	木造地藏菩薩立像二軀	大正三年八月二十五日	寶飯郡豐川町大字豐川妙嚴寺	
甲種四等繪畫	絹本着色王宮曼荼羅圖一幅 皇慶元年二月トアリ	大正七年四月八日	寶飯郡御津村大字廣石大恩寺	
彫刻	木造千手觀音立像一軀	昭和六年十二月十四日	寶飯郡大塚村大字赤根法住寺	
甲種四等彫刻	木造阿彌陀如來坐像一軀	大正十一年七月十五日	渥美郡二川町大字谷川普門寺	

甲種四等彫刻	木造釋迦如來坐像一軀	大正十一年七月十五日	同	
甲種四等彫刻	木造四天王立像四軀	同	同	
丙種金石文	銅經筒（瓦壺入）一口 久壽三年建辰月二十九日願主僧勝意ノ銘アリ 附屬鏡一面（瓦壺入）鴛鴦花唐草文樣	文正十二年三月二十八日	同	
彫刻	木造阿彌陀如來坐像一軀 位牌堂安置	昭和六年十二月十四日	渥美名二川町大字小松原東觀音寺	
彫刻	木造愛染明王坐像一軀 愛染堂安置	昭和三年四月四日	八名郡石巻村赤岩寺	
彫刻	木造藥師如來坐像一軀	昭和六年十二月十四日	八名郡八名村大字庭野藥師堂	

國寶（建造物）

名稱	構造形式	指定年月日	所在地及所有者
熱田神宮上門	八脚門、屋根切妻造、檜皮葺（桃山時代）	大正九年四月十五日	名古屋市南區熱田神宮坂町熱田神宮

熱田神宮鎭皇門	三間一戶樓門、屋根入母屋造、正面軒唐破風檜皮葺（桃山時代）	昭和三年四月四日	名古屋市南區熱田神宮坂町熱田神宮	
七寺本堂	桁行五間梁間五間單層屋根四柱造本瓦葺（桃山時代）	明治四十二年八月二十九日	名古屋市中區門前町七寺	
高岳院本門	三間一戶門、屋根切妻造本瓦葺（桃山時代）	大正九年四月十五日	名古屋市東區高岳町高岳院	
性高院表門	四脚門、屋根切妻造本瓦葺（桃山時代）	同	名古屋市中區門前町性高院	
本遠寺樓門	三間一戶樓門、屋根入母屋造棧瓦葺（室町時代）	大正十年四月三十日	名古屋市南區熱田田中町本遠寺	
觀音寺塔婆（多寶塔）	三間二層塔婆屋根銅板葺（室町時代）	同	名古屋市南區荒子町觀音寺	
大天守	（五層天守（地階一層）屋根五重、第一重本瓦葺、第二重以上銅瓦葺、二層天守（地階一層）屋根二重、本瓦葺）			
小天守	三層櫓、屋根二重、本瓦葺			
西南隅櫓	同			
東南隅櫓	三層櫓、屋根三重、本瓦葺			
西北隅櫓	櫓門、屋根入母屋造、本瓦葺			
表一之門	高麗門、屋根切妻造、本瓦葺			
表二之門	櫓門、屋根入母屋造、本瓦葺			
東一之門	高麗門、屋根切妻造、本瓦葺			

東二之門	櫓門、屋根入母屋造、本瓦葺			
不明門	同			
正門	櫓門、屋根入母屋造、本瓦葺			
玄關	桁行五間梁間五間單層隅屋造、本瓦葺			
附車寄	根入母屋造、本瓦葺			
大廊下	桁行二間梁間一間、銅瓦葺、單層、屋			
表書院	木入向唐破風造、本瓦葺			
附溜ノ間	桁行六間、棧瓦葺、單層、屋			
渡廊下	根入母屋造、本瓦葺			
對面所	桁行三間梁間三間、棧瓦葺、單層、屋			
梅之間及鶯廊下	根兩下、棧瓦葺			
附廊下	桁行九間梁間一間、棧瓦葺、單層、屋			
上洛殿	根入母屋造、銅瓦葺			
附雁廊下	桁行四間梁間一間、本瓦葺、單層、屋			
湯殿書院	根兩下、棧瓦葺			
黑木書院	桁行十間梁間四間、突出、桁行二間梁間二間、各單層、屋			
附朝顏廊下	根入母屋造、棧瓦葺、單層、屋			
	桁行四間梁間二間、北一間、棧瓦葺、單層、屋根兩下、南一間、	昭和五年十二月十一日	名古屋市西區南外堀町六丁目一番地名古屋市	

上御膳所 附廊下 下御膳所 柳之間及孔雀之間 上臺所	桁行五間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、桟瓦葺 桁行三間、梁間一間、單層、屋根葺下、桟瓦葺 桁行八間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、桟瓦葺 桁行七間、梁間五間、單層、屋根南面入母屋造、北面切妻造、桟瓦葺 桁行十一間、梁間五間、單層、屋根切妻造、桟瓦葺		
東照宮社殿	本殿（桁行三間、梁間三間、屋根入母屋造、銅瓦葺） 渡殿（桁行三間、梁間一間、屋根兩下、銅瓦葺） 拜殿（桁行五間、梁間二間、屋根入母屋造、正面据破風附、向拜三間、總銅瓦葺） 唐門　一間平唐門、屋根銅板葺 透塀　延長六十四間、屋根桟瓦葺 樓門　三間一戸樓門、屋根入母屋造、檜皮葺	權現造	昭和十年五月十三日
			名古屋市西區茶屋町二丁目 東照宮

伊賀八幡宮社殿 本殿 幣殿 拜殿 透塀 御供所 隨身門 神橋 鳥居	三間社流造、屋根檜皮葺 桁行二間、梁間一間、單層、屋根兩下、檜皮葺 桁行五間、梁間三間、向拜一間、單層、屋根入母屋造、正面据破風付、檜皮葺（延長三、二二米（百四十二尺三寸）） 屋根桟瓦葺 桁行五間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺（今桟瓦假葺） 三間一戸樓門、屋根入母屋造、前後軒唐破風附、檜皮葺 石造反橋、勾欄附 石造明神鳥居	權現造	昭和八年一月二十三日
六所神社々殿 本殿 幣殿 拜殿 社務所（舊神供所） 樓門	三間社流造、屋根銅板葺 桁行二間、梁間三間、單層、屋根兩下、銅板葺 桁行五間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、正面据破風附、向拜一間、向唐破風造、總銅板葺 桁行五間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、桟瓦葺 三間一戸樓門、屋根入母屋造、銅板葺	權現造	昭和十年五月十三日
			岡崎市明大寺町 六所神社

密藏院塔婆（多寶塔）	三間二層塔婆屋根柿葺（室町時代）	大正九年四月十五日	東春日井郡篠木村大字熊野 密藏院	
定光寺本堂（佛殿）	桁行五間梁間五間重層上層假屋根切妻造柿葺（室町時代）	大正十五年四月十九日	東春日井郡品野町沓掛 定光寺	
龍泉寺仁王門	三間一戸樓門、屋根入母屋造棧瓦葺（桃山時代）	昭和三年四月四日	東春日井郡志段味村字吉根 龍泉寺	
高田寺本堂	桁行五間梁間五間單層屋根四注造茅葺（鎌倉時代）	大正九年四月十五日	西春日井郡師勝村大字高田 高田寺	
犬山城天守	三層天守、內部四重、地階二重、屋根本瓦葺	昭和十年五月十三日	丹羽郡犬山町大字犬山字北古券六十五番地ノ二	
萬德寺塔婆（多寶塔）	三間二層塔婆屋根檜皮葺（室町時代）	明治三十四年三月二十七日	中島郡稻澤町大字長野 萬德寺	
性海寺塔婆（愛染堂）	三間二層塔婆屋根銅板葺（室町時代）	明治三十六年四月十五日	中島郡稻澤町大字大塚 性海寺	
長光寺地藏堂（六角堂）	六角圓堂單層屋根棧瓦葺（室町時代）	明治三十九年四月十四日	中島郡大里村大字六角堂 長光寺	
妙興寺勅使門	四脚門屋根切妻造棧瓦葺（室町時代）	大正九年四月十五日	中島郡大和村大字妙興寺 妙興寺	
甚目寺南大門（仁王門）	三間一戸樓門、入母屋造柿葺（鎌倉時代）	明治三十三年四月七日	海部郡甚目寺町 甚目寺	

津島神社本殿	三間社流造屋根檜皮葺（桃山時代）	大正九年四月十五日	海部郡津島町 津島神社	
知立神社塔婆（文庫又八神庫）	三間二層塔婆屋根柿葺（室町時代）	明治四十年五月二十七日	碧海郡知立町大字知立 知立神社	
妙源寺柳堂	方三間單層屋根四注銅板葺（室町時代）	明治三十六年四月十五日	碧海郡矢作町字桑子 妙源寺	
金蓮寺彌陀堂	桁行三間梁間三間屋根四注造棧瓦葺（鎌倉時代）	大正九年四月十五日	幡豆郡横須賀村大字饗庭 金蓮寺	
幡豆神社本殿	三間社流造屋根檜皮葺（桃山時代）	大正十年四月三十日	幡豆郡吉田町大字宮崎 幡豆神社	
久麻久神社本殿	三間社流造屋根銅板葺（室町時代）	昭和四年四月十七日	幡豆郡西尾町大字八ッ面 久麻久神社	
瀧山寺山門（仁王門）	三門一戸樓門、屋根入母屋棧瓦葺（鎌倉時代）	明治三十四年三月二十七日	額田郡常磐村大字瀧 瀧山寺	
瀧山寺本堂（藥師堂）	桁行五間梁間五間單層屋根四注造棧瓦葺（鎌倉時代）	明治三十七年二月十八日	同	
信光明寺觀音堂	方三間單層屋根入母屋茅葺（室町時代）	同	額田郡岩津村大字岩津 信光明寺	
大樹寺塔婆（多寶塔）	三間二層塔婆屋根檜皮葺（室町時代）	同	額田郡岩津村大字鴨田 大樹寺	